

志木市遺跡群 15

西原大塚遺跡第67地点

2007

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 柚木 博

ここに刊行する『志木市遺跡群15』は、国庫・県費補助事業として、教育委員会が、平成14年度に発掘調査を実施した西原大塚遺跡第67地点の調査成果をまとめたものです。

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目を中心に広がっており、面積163,100㎡を跨る市内最大規模の遺跡として知られています。

そして、この遺跡では、西原特定土地区画整理事業が行われており、平成5年より大規模な発掘調査が実施されてきました。そのため、現在では市内遺跡の中で最も調査件数が多い遺跡になっています。

さて、今回の第67地点の発掘調査は、個人住宅建設に伴い実施され、縄文時代中期後葉の住居跡8軒・土坑8基・集石1基、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡8軒・掘立柱建築遺構1棟、平安時代の溝跡1本・土坑1基が調査区域のほぼ全域から検出されました。

中でも、縄文時代中期の住居跡からは、文様豊かな土器群や打製石斧を中心とした石器などが数多く出土しており、志木市の縄文時代を深く追究するためには欠くことのできない貴重な資料となりました。

このような貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されることになりました。今後もこうした新発見が、郷土の歴史研究に、ひいては幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、平成14年度に発掘調査を実施した西京人塚遺跡第67地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。発掘調査は、平成14年9月11日より平成14年11月29日までの期間を実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏・深井恵子が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。
深井恵子 第2章第2～4節の遺構
4. 石器の実測及び観察表の作成は、(有)アルケオリサーチ（代表取締役 藤波啓容）に依頼した。
5. 自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボ（代表取締役 藤根 久）に依頼し、その結果を付編に併載するものである。
6. 遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子・止口優子が行った。遺構のデジタルトレースは遠藤英子が、遺物のトレースは深井恵子が行った。写真撮影は尾形則敏が行った。
7. 調査組織

調 査 主 体 者	志木市教育委員会
教 育 長	細 田 信 良（～平成17年6月）
“	柚 木 博（平成17年10月～）
教育長職務代理者	新 井 茂（平成17年7月～9月）
教 育 政 策 部 長	谷 合 弘 行（平成12年4月～平成15年3月）
“	白 砂 正 明（平成15年4月～平成16年3月）
“	杉 山 勇（平成16年4月～平成17年3月）
“	新 井 茂（平成17年4月～）
参事兼生涯学習課長	土 橋 春 樹（平成10年4月～平成16年3月）
“	宮 川 英 夫（平成18年4月～）
生涯学習課長	大 熊 章 只（平成16年4月～平成18年3月）
生涯学習課主幹	金 子 雅 佳（平成12年4月～平成14年3月、平成14年8月～16年3月）
“	下 河 辺 信 行（平成14年4月～7月）
“	醍 醐 一 正（平成16年4月～平成18年3月、平成18年8月～）
“	内 田 誠（平成18年4月～7月）
生涯学習課主査	関 根 正 明（平成9年4月～平成15年7月）
“	佐 々 木 保 俊（昭和61年4月～）
“	今 野 美 香（平成15年8月～）
生涯学習課主任	尾 形 則 敏（昭和62年4月～）
“	倉 部 恵 子（平成14年4月～平成18年3月）
“	松 永 真 知 子（平成18年4月～）
志木市文化財保護審議会	神 山 健 吉（審議会会長）
“	井 上 國 夫・高 橋 長 次・高 橋 豊・内 田 正 子（審議会委員）

8. 発掘調査及び整理作業参加者

（発掘調査）

調査担当者	尾 形 則 敏
調 査 員	深 井 恵 子

発掘協力員 青木 修・井出和子・遠藤英子・奥野恭子・鎌本あけみ・鈴木浩子・高田美智子・高野美子・星野恵美子・松浦恵子・山口優子
村本周三・佐々木 潤（東洋大学）・藤岡智子（早稲田大学）

（整理事業）

調査員 深井恵子

調査補助員 青木 修（平成15年10月～）

整理協力員 遠藤英子・奥野恭子・鎌本あけみ・鈴木浩子・高田美智子・高野美子・星野恵美子・松浦恵子・山口優子

9. 各遺跡の発掘調査及び整理事業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第四小学校

荒井幹夫・石井 寛・井上洋一・上田 寛・江原 順・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗原和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・小林寛子・齋藤欣延・笹森健一・笹森紀巳子・斯波 治・鈴木一郎・鈴木重信・岡田 眞・高橋 学・照林敏郎・根本 靖・野沢 均・原 京子・早坂廣人・福田 聖・藤波啓容・堀 善之・松本 完・松本富雄・三田光明・柳井彰宏・山田尚友・山本 龍・和田晋治

開発主体者（個人）

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製 平成9年3月志木市1：2,500をデジタルマップにより縮図編集

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行 株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。
4. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。
5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 遺構挿図版中のスクリーンーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーンーンは土器の場合は赤彩範囲を、石器の場合は使用痕を示す。
7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

J＝縄文時代の住居跡 Y＝弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡 D＝土坑
S＝集石 M＝溝跡 T＝掘立柱建築遺構

目 次

はじめに

例 目次／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 西原人塚遺跡の概要	5
第2章 西原大塚遺跡第67地点の調査	6
第1節 発掘調査の概要	6
(1) 調査に至る経緯	6
(2) 発掘調査の経過	6
(3) 基本層序	10
第2節 縄文時代の遺構と遺物	11
(1) 概 要	11
(2) 住居跡	11
(3) 土 坑	79
(4) 集 石	88
第3節 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の遺構と遺物	89
(1) 概 要	89
(2) 住居跡	90
(3) 掘立柱建築遺構	111
第4節 平安時代の遺構と遺物	111
(1) 概 要	111
(2) 土 坑	111
(3) 溝 跡	113
第5節 遺構外出土遺物	113
第3章 調査のまとめ	127
第1節 縄文時代中期後葉の住居構造について	127
第2節 縄文時代中期後葉の土器について	128
区 版	
報告書抄録	
〔付 編〕 自然科学分析	
出土動物遺体について	145

插图目次

第1图	市域の地形と調査地点 (1/20000)	2
第2图	西原大塚遺跡の調査地点 (1/5000)	7
第3图	遺構分布図 (1/50)	8
第4图	基本層序 (1/30)	10
第5图	35号住居跡・竪跡 (1/60・1/30)	12
第6图	35号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)	14
第7图	35号住居跡出土遺物2 (1/3)	15
第8图	35号住居跡出土石器1 (2/3・1/3)	16
第9图	35号住居跡出土石器2 (1/3)	17
第10图	88号住居跡・竪跡 (1/60・1/30)	20
第11图	88号住居跡出土遺物1 (1/4)	22
第12图	88号住居跡出土遺物2 (1/3)	23
第13图	88号住居跡出土石器 (2/3・1/3)	24
第14图	131号住居跡・埋藏 (1/60・1/30)	25
第15图	131号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	26
第16图	131号住居跡出土石器 (2/3・1/3)	27
第17图	132号住居跡・埋藏 (1/60・1/30)	30
第18图	132号住居跡遺物出土状態 (1/60)	31
第19图	132号住居跡出土遺物1 (1/4)	34
第20图	132号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)	35
第21图	132号住居跡出土遺物3 (1/3)	36
第22图	132号住居跡出土石器 (1/3)	37
第23图	133号住居跡 (1/60)	40
第24图	133号住居跡遺物出土状態 (1/60)	41
第25图	133号住居跡出土遺物1 (1/4)	44
第26图	133号住居跡出土遺物2 (1/4)	45
第27图	133号住居跡出土遺物3 (1/3)	46
第28图	133号住居跡出土遺物4 (1/3)	47
第29图	133号住居跡出土遺物5 (1/3)	48
第30图	133号住居跡出土遺物6 (1/3)	49
第31图	133号住居跡出土石器1 (2/3・1/3)	50
第32图	133号住居跡出土石器2 (1/3)	51
第33图	133号住居跡出土石器3 (1/3)	52
第34图	133号住居跡出土石器4 (1/3・1/4)	53
第35图	134号住居跡・456号土坑 (1/60)	56
第36图	134号住居跡遺物出土状態 (1/60)	57
第37图	134号住居跡出土遺物1 (1/4)	60

第38图	134号住居跡出土遺物 2 (1/4)	61
第39图	134号住居跡出土遺物 3 (1/3)	62
第40图	134号住居跡出土遺物 4 (1/3)	63
第41图	134号住居跡出土遺物 5 (1/3)	64
第42图	134号住居跡出土遺物 6 (1/3)	65
第43图	134号住居跡出土石器 1 (2/3・1/3)	66
第44图	134号住居跡出土石器 2 (2/3)	67
第45图	134号住居跡出土石器 3 (1/3)	68
第46图	134号住居跡出土石器 4 (1/4)	69
第47图	135号住居跡 (1/60)	71
第48图	135号住居跡出土遺物 (1/3)	72
第49图	135号住居跡出土石器 (2/3・1/3)	73
第50图	136号住居跡 (1/60)	75
第51图	136号住居跡出土遺物 1 (1/4・1/3)	76
第52图	136号住居跡出土遺物 2 (1/3)	77
第53图	136号住居跡出土石器 (1/3)	78
第54图	土坑 (1/60)	81
第55图	土坑出土遺物 1 (1/3・2/3)	82
第56图	土坑出土遺物 2 (2/3)	83
第57图	22号集石 (1/30)	88
第58图	22号集石出土遺物 (1/4・1/3)	89
第59图	138号住居跡・出土遺物 (2/60・1/3)	91
第60图	289号住居跡・出土遺物 (2/60・1/3・2/3)	93
第61图	291号住居跡・出土遺物 1 (1/60・1/3)	94
第62图	291号住居跡出土遺物 2 (2/3・1/3)	95
第63图	391号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)	97
第64图	392号住居跡・出土遺物 1 (1/60・1/3)	99
第65图	392号住居跡出土遺物 2 (2/3・1/3)	100
第66图	393号住居跡 (1/60)	102
第67图	393号住居跡出土遺物 1 (1/3・2/3)	104
第68图	393号住居跡出土遺物 2 (1/3)	105
第69图	394号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)	107
第70图	395号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)	108
第71图	2号掘立柱建築遺構 (1/60)	110
第72图	451号土坑 (1/60)	111
第73图	13号溝跡 (1/60)	112
第74图	遺構外出土石器 1 (2/3・1/3)	118
第75图	遺構外出土石器 2 (2/3)	119
第76图	遺構外出土遺物 1 (1/3)	120

第77図	遺構外出土遺物 2 (1/3)	121
第78図	遺構外出土遺物 3 (1/3)	122
第79図	遺構外出土遺物 4 (1/3)	123
第80図	遺構外出土遺物 5 (1/3)	124
第81図	西原大塚遺跡第67地点の土器編年図	134
第82図	呉系列土器における相関関係図	140

目 次

第1表	志本町埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	発掘調査工程表	9
第3表	縄文時代住居跡・土坑出土の土製品・石製品一覧	85
第4表	縄文時代住居跡・土坑出土の石器一覧(1)	86
	縄文時代住居跡・土坑出土の石器一覧(2)	87
第5表	弥生時代住居跡出土の石器一覧	109
第6表	遺構外出土の石器一覧	125
第7表	遺構外出土の土製品一覧	125
第8表	遺構外出土の陶磁器・土器一覧	126
第9表	各住居跡の主な特徴	127
第10表	加普利E式系土器の属性基準	137
第11表	曾利式系土器の属性基準	138
第12表	連環文系土器の属性基準	139

図版目次

図版1	1. 調査区近景 2. 基本層序 3～6. 35号住居跡遺物出土状態 7. 35号住居跡炉跡A・3 8. 35号住居跡
図版2	1. 35・88号住居跡 2. 88号住居跡遺物出土状態 3. 88号住居跡炉跡 4. 88号住居跡壁溝 5. 88号住居跡
図版3	1. 131号住居跡遺物出土状態 2. 131号住居跡炉跡 3. 131号住居跡埋壘 4. 131号住居跡 5～8. 132号住居跡遺物出土状態
図版4	1. 132号住居跡調査風景 2. 132号住居跡埋壘付近 3. 132号住居跡埋壘 4. 132号住居跡 5. 133号住居跡遺物出土状態
図版5	1～6. 133号住居跡遺物出土状態 7. 133号住居跡炉跡付近 8. 133号住居跡
図版6	1. 134号住居跡発掘風景 2～4. 134号住居跡遺物出土状態 5. 134号住居跡炉跡A 6. 134号住居跡炉跡B 7・8. 135号住居跡
図版7	1～3. 136号住居跡遺物出土状態 4. 136号住居跡炉跡 5. 452号土坑 6. 453号土坑 7. 454号土坑 8. 455号土坑

- 圖版 8 1. 456号土坑 2. 457号土坑 3. 458号土坑 4. 459号土坑
5. 6. 22号集石遺物出土狀態 7. 22号集石瀝り方 8. 22号集石調査風景
- 圖版 9 1. 2. 138号住居跡 3. 138号住居跡貯藏穴 4. 289号住居跡
5. 6. 291号住居跡炭化材出土狀態 7. 291号住居跡粘土出土狀態 8. 291号住居跡
- 圖版10 1. 391号住居跡硬化面 2. 391号住居跡起り方 3. 392号住居跡
4. 392号住居跡貯藏付近 5. 392号住居跡遺物出土狀態
6. 392号住居跡貯藏穴と入口梯子穴 7. 393号住居跡 8. 393号住居跡貯藏穴
- 圖版11 1. 393号住居跡発掘風景 2. 393・394号住居跡 3. 394号住居跡 4. 394号住居跡貯藏
5. 395号住居跡 6. 395号住居跡遺物出土狀態
7. 2号獨立柱建築遺構 柱穴A土層断面 8. 2号獨立柱建築遺構 柱穴A
- 圖版12 1. 2号獨立柱建築遺構 柱穴B土層断面 2. 2号獨立柱建築遺構 柱穴B
3. 2号獨立柱建築遺構 柱穴C土層断面 4. 2号獨立柱建築遺構 柱穴C
5. 451号土坑 6. 13号溝跡土層断面A 7. 13号溝跡土層断面C
8. 13号溝跡調査風景
- 圖版13 35号住居跡出土遺物 1
- 圖版14 1. 35号住居跡出土遺物 2 2. 35号住居跡出土石器
- 圖版15 1. 88号住居跡出土遺物 2. 88号住居跡出土石器
- 圖版16 1. 131号住居跡出土遺物 2. 131号住居跡出土石器
- 圖版17 132号住居跡出土遺物 1
- 圖版18 1. 132号住居跡出土遺物 2 2. 132号住居跡出土石器
- 圖版19 133号住居跡出土遺物 1
- 圖版20 133号住居跡出土遺物 2
- 圖版21 133号住居跡出土遺物 3
- 圖版22 133号住居跡出土石器
- 圖版23 134号住居跡出土遺物 1
- 圖版24 134号住居跡出土遺物 2
- 圖版25 134号住居跡出土遺物 3
- 圖版26 134号住居跡出土石器
- 圖版27 1. 135号住居跡出土遺物 2. 135号住居跡出土石器 3. 136号住居跡出土遺物 1
- 圖版28 1. 136号住居跡出土遺物 2 2. 136号住居跡出土石器 3. 土坑出土遺物 1
- 圖版29 1. 土坑出土遺物 2 2. 22号集石出土遺物 3. 138号住居跡出土遺物
4. 289号住居跡出土遺物
- 圖版30 1. 291号住居跡出土遺物 2. 391号住居跡出土遺物 3. 392号住居跡出土遺物
- 圖版31 1. 393号住居跡出土遺物 2. 394・395号住居跡、13号溝跡出土遺物
- 圖版32 1. 遺構外出土石器 2. 遺構外出土遺物 1
- 圖版33 遺構外出土遺物 2
- 圖版34 遺構外出土遺物 3
- 圖版35 遺構外出土遺物 4
- 圖版36 88号住居跡出土骨片

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約6万8千人の自然と文化の調和する都市である。

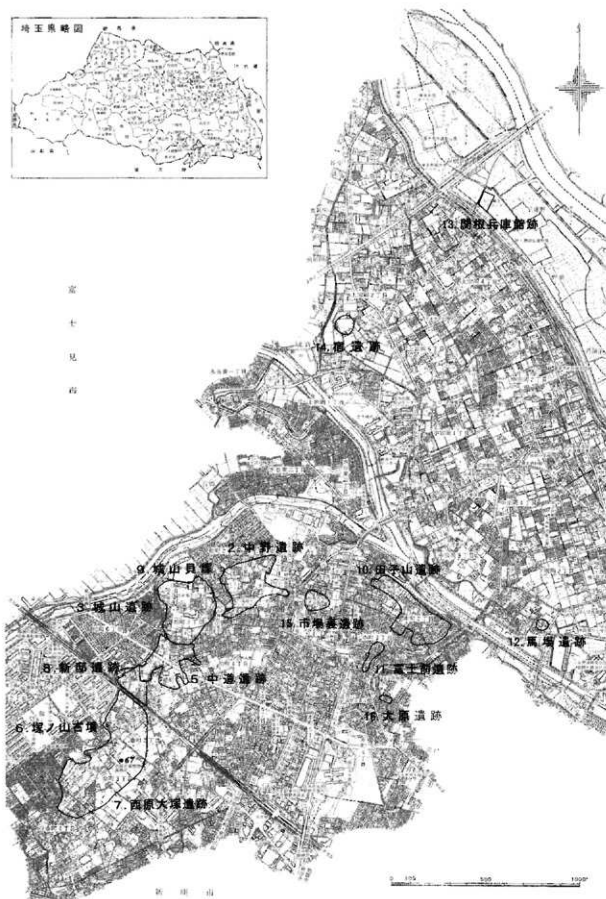
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟遊で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新郷遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、皇子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大塚遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにさげつつあり、

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	60,990m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器(縄前一期)、弥生(古銅～後)、中・古鉄	石倉庫中軸部、住居跡、土師・井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、弥生土器、弥生土器等
3	城山	78,700m ²	畑・宅地	城跡跡・集落跡	旧石器(縄前一期)、弥生(古銅～後)、銅・中・古鉄	石倉庫中軸部、住居跡、土師・井戸跡、溝跡、石製臼跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、弥生土器、古銭、弥生土器等
5	中道	45,860m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器(縄前一期)、弥生(古銅～後)、銅・中・古鉄	石倉庫中軸部、住居跡、土師・井戸跡、溝跡等	石器、縄文土器、土師器、弥生土器、古銭、大形等
6	塚/山古墳	800m ²	林	古墳?	古墳?	なし	なし
7	西原大塚	163,100m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器(縄前一期)、弥生(古銅～後)、銅・中・古鉄	石倉庫中軸部、住居跡、土師・井戸跡、溝跡、石製臼跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、弥生土器、古銭等
8	新郷	16,400m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄文(早～中)、古銅(後)、中・古鉄	貝塚、住居跡、土師、方形周溝跡、井戸跡、溝跡、段状土溝、ビド遺構	土器、貝、縄文・弥生土器、土師器、弥生土器、古銭等
9	城山貝塚	900m ²	林	貝塚	縄(前)	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	山了山	62,200m ²	畑・宅地	集落跡	縄(前)～弥生(古銅)、古鉄(後)、銅・中・古鉄、近世	住居跡、土師、方形周溝跡、井戸跡、溝跡、段状土溝等	縄文・弥生土器、土師器、銅器、弥生土器、弥生土器等
11	富士前	7,100m ²	宅地	集落跡	弥(後)～古(前)	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800m ²	畑	集落跡	古(前)	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700m ²	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構造物	木・石製品
15	市場裏	10,700m ²	宅地	集落跡・墓跡	弥(後)～古(前)、近代	住居跡・方形周溝基	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大塚	1,700m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		463,850m ²					

平成16年5月30日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と調査地点 (1/20000)

将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した12遺跡に塚ノ山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、旧石器時代からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・城山・中野遺跡がある。中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原緑（現ユリノキ通り）の工事に伴う調査により、立川ローム層のIV層上部・VI層・VII層で文化層が確認されており、燧群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石筈や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

平成11～14年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層のIV層下部から、黒曜石・頁岩の石材の石核・剥片が約60点出土している。

縄文時代になると、草創期では、平成4年度に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から凡形文系土器1点、平成10年度の田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器が、新郷・富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新郷遺跡の前期黒沢式のもの最古に位置付けられ、それぞれ1軒検出されている。そのうち、新郷遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利B式期である。平成5年度以降、西原大塚遺跡内には西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査が本格的に実施され、多くの遺構が検出されている。特に住居跡はその分布状況から、環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から数石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

さらに後期では、報告書として刊行された住居跡は皆無であるが、西原大塚遺跡から後期の堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、田子山遺跡第31地点において、1坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千歳式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄になる傾向にある。平成12年度の西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査では、晩期のものと思われる溝跡1本が検出されている。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考えると重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、入時の発見に伴い、龍目痕をもつ笠形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の葬域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高杯が出土していることに注目される。平成11年度に西原大塚遺跡第45地点で発見された一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口線香、古ヶ谷系系の赤、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

最新では、平成15年6～8月に発掘調査が実施された新郷遺跡第8地点から、古墳時代前期に比定される住居跡8軒・方形周溝墓が1基検出されている。方形周溝墓については、遺跡名は異なっても墓群の中心をもつ西原大塚遺跡から見れば北東端に含まれるものと考えられることができる。ただし、集落跡の様相から察すると、新郷遺跡第2地点から古墳時代前期終末から中期に比定される住居跡1軒が検出されていることから、現時点では西原大塚遺跡から継続して集落が広がったものではないかと推測される。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第37地点の19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

平成15年には、新郷遺跡でも初めて7世紀代の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼矢住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新郷遺跡で1軒を数える。また、田子山遺跡第24地点では、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mのやや不整円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える上坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸鞆、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡第35地点の128号住居跡からは、印面に「富」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、遠投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

中・近世では、柏城跡を有する城山遺跡と関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数次にわたる発掘調査により、『館村日記』にある「柏之城落城後の屋敷御の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、城山遺跡第29地点の127号土坑から馬の骨が検出されている。この土坑からは、板津と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、特に、

イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三又状の十製品、砥石などが出土している。

また、平成11～14年度にかけて実施された中野遺跡第49地点の調査から、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載されている「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

近代以降の遺跡では、19世紀以降の溝跡・地下室などが、城山遺跡を中心に検出されているが、田子山遺跡の第31地点では、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節 西原大塚遺跡の概要

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目を中心とする遺跡で、東武東上線志木駅の1km程西方に位置している。本遺跡は、北東-南西方向に約700m、北西-南東方向に約150mほどの広がりを持ち、面積163,100㎡を有する市内最大規模の遺跡である。

遺跡を地勢的に見ると、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は遺跡南端で約19m、北端で約14mを割り、大崎町から北にかけて徐々に標高が低くなっている。岸線部は西側でゆるやかな傾斜地になっているが、北側では際立った断崖地形に変化している様子が観察される。この遺跡の北西方向には柳瀬川が北東流し、さらに崖下にはいくつもの湧水地があったという記録もあることから、古より生活するためには欠かすことのできない飲料水が豊富にあったものと想像される。

遺跡の現況は、大部分が畑地であるが、平成5年度以降、この地域内で西原特定上地区画整理事業が本格的に開始されており、これに伴う発掘調査が急ピッチで遂行されている。平成10年以降は、道路の完成に付随して個人住宅・共同住宅建設などの小規模開発が急増しており、今後は事業の完了に前後して、さらに発掘調査が激増するものと予想される。これについても今後、いかに迅速に対応するかが課題であろう。

本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、旧石器時代、縄文時代前～晩期、弥生時代後期、古墳時代前～後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

注1 『館村旧記』は館村（現在の志木市幸町・幸町・館）の名主であった宮原伴右衛門伴恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

第2章 西原大塚遺跡第67地点の調査

第1節 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経過

平成14年8月、佐藤建築設計事務所から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町3丁目3228番地（面積456.20㎡）内に個人住宅及び物置建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。
3. 周辺での遺構分布状況をから、当地域には縄文時代中期を中心とした遺構が存在することは明らかであることを説明する。

平成14年8月23日、教育委員会は、開発主体者である（個人）より埋蔵文化財確認調査依頼書と埋蔵文化財発掘届を受理し、9月9日、午前9時30分から確認調査を実施した。

確認調査は、調査区の長軸中央ほぼ南北方向に1本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代中期後葉の住居跡数軒と弥生時代後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡1軒と思われる遺構を確認した。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、計画を変更することは不可能であり、さらに盛土保存は不可能であるという回答を得たため、教育委員会は依頼者に発掘調査の実施を要請した。同日には依頼者から教育委員会に発掘調査の依頼があったため、教育委員会ではこれを受け、発掘調査を実施することに決定した。教育委員会は、埋蔵文化財発掘届と発掘調査届をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

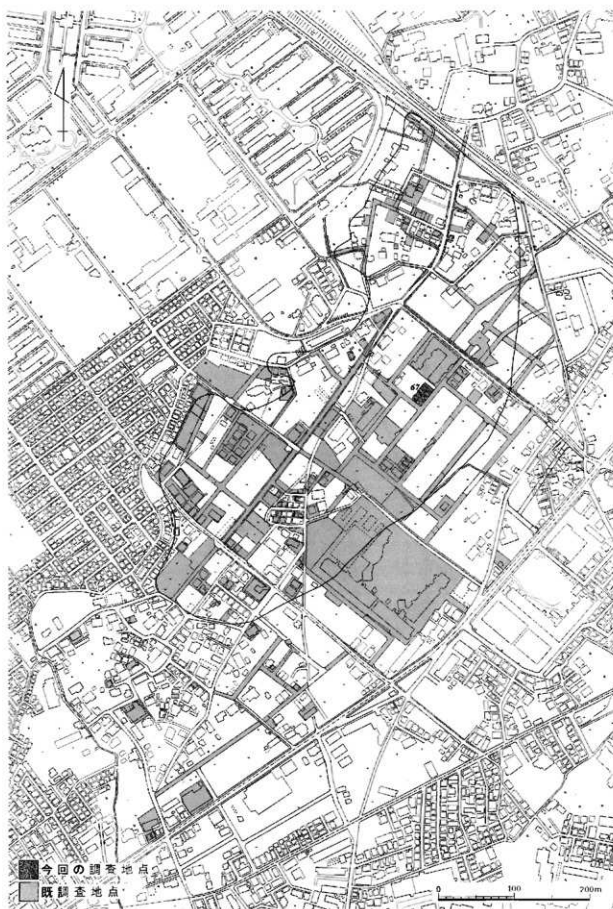
埼玉県教育委員会教育長通知番号は、教文第3-535号 平成14年9月25日付である。

(2) 発掘調査の経過

重機による表土剥ぎ作業は、9日午後から着手し、調査区域全面の表土及び残土は、すべて調査区外に一度搬出する予定をとった。

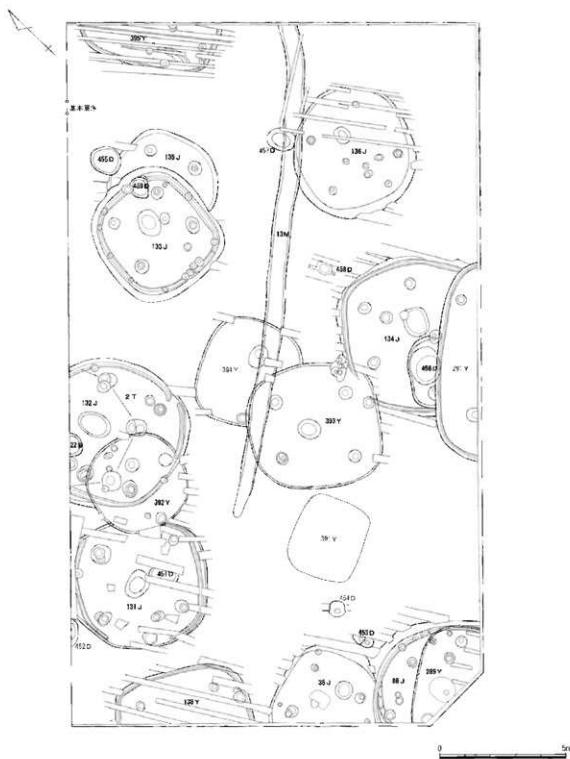
人員導入による発掘調査は、11日から開始した。まず、器材の搬入作業を行い、その後調査区域内の整備と炬部の遺構確認作業を行った。その結果、調査区域内には縄文時代中期後葉と弥生時代後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡を中心とした遺構がほぼ全域に分布していることが明らかになった。

以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第2表の発掘調査工程表に示した。



第2図 厩原大塚遺跡の調査地点 (1/5000)

平成18年3月31日 現在



第3図 遺構分布図 (L/150)

- 9月中旬～下旬。遺構精査は調査区南半部から開始する。当面の残土置場は調査区北半部に当て、その残土は調査区外に搬出した。35・88J、138・289・291・391・392Yの精査を行う。
- 10月上旬。35・88J、138・392Yは掘り終え、写真撮影・実測を終了する。131・132J、22S、2T、451Dの精査を開始し、2T、451Dは写真撮影・実測を終了する。
- 10月中旬。131J、22Sは掘り終え、写真撮影・実測を終了する。133J、452～454D、395Yの精査を開始し、452～454Dは写真撮影・実測を終了する。
- 10月下旬。135J、291・393・394Y、13Mの精査を開始する。132・133・135J、395Yは掘り終え、写真撮影・実測を終了する。
- 11月上旬。291・393・394Y、13Mは掘り終え、写真撮影・実測を終了する。
- 11月中旬～下旬。133～136J、455～459Dの精査を行い、写真撮影・実測を終了する。
- 11月22日。すべての調査を終了する。
- 11月27～29日。埋戻し完了。

	平成14年9月	10月	11月
表土削き作業	9.9		
138Y	9.20		
289Y	9.12		
291Y		10.21	
391Y	9.13		
392Y		9.27	
393Y			10.20
394Y			10.20
395Y		10.18	
2T		10.4	
13M			10.20
451D		10.2	
35J	9.12		
88J	9.12		
131J		10.2	
132J		10.4	
133J		10.15	11.20
134J			11.12
135J		10.20	11.11
136J			11.11
452D		10.15	
453D		10.15	
454D		10.15	
455D			11.12
456D			11.15
457D			11.20
458D			11.20
459D			11.21
22S		10.7	
埋戻し作業			11.27 29

第2表 発掘調査工程表

(3) 基本層序 (第4図)

西原大塚遺跡は、武蔵野台地の北端部にあたり、遺跡の標高は南端で約19m、北端で約14mを測り、大略南から北にかけて序々に標高が低くなっている。こうした中、今回の調査地点は、標高約16.2mを測る当遺跡の中間的な標高を示している箇所である。調査地点に立った印象では、目立った高低差は感じられない平坦な地形であると言える。

今回の調査における基本層序として、調査区北西隅に1ヶ所設定した。最下層は立川ローム層IV層中である。

以下、各層についての説明をすることにする。

第I層 表土

以前は畑地であったため、耕作土層に相当する。層厚は約40~60cmである。

第II層 縄文時代の新移層及び遺物包含層である。

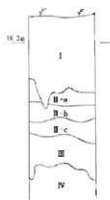
a~c層に分層される。a層はローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土、b層はローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土、c層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土である。土層の色調は、a→c層というように上層→下層の方向で漸次ローム粒子が多く、明色である。

第III層 立川ローム層第III層

黄褐色軟質ローム層（ソフトローム層）である。層厚は30cm前後である。

第IV層 立川ローム層第IV層

黄褐色硬質ローム層（ハードローム層）である。ソフト化の進行が著しい。



第I層 表土。
 第II層 新移層。
 a ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
 b ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
 c ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
 第III層 立川ローム層第III層。
 第IV層 立川ローム層第IV層。

第4図 基本層序 (1/30)

第2節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 概要

縄文時代の遺構については、住居跡8軒・土坑8基・集石1基が検出された。

まず、住居跡については、平面形態として円形・隅丸方形・六角形といった違いが見られる。各遺構からの出土遺物は、質・量共に豊富で、特に土器については、加曾利Ⅱ式・曾利式・速飯文系という3系統の土器の相伴関係を把握する上で良好な資料につながったと言える。石器についても打製石斧を主体に実測図だけでも約200点にのぼる点数が出土した。

土坑については、耕作による擾乱が著しいため遺存状態が悪いものが多いが、455Dが比較的に掘り込みも深く遺存状態が良好で、出土遺物も比較的多く出土した。

集石については、132J内の調査区西端で1基検出され、遺構の西側半分は調査区外であった。

(2) 住居跡

35号住居跡

遺構 (第5図)

〔住居構造〕88Jに切られる。西側は平成8年度の西原特定上地区面整理事業に伴う調査で、調査済みである。(平面形)隅丸方形か。(規模)不明。(壁高)残りのよい部分で24～33cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝)確認できなかった。(床直)全体的に良く踏み固められていたが、特に硬化していた箇所を区示した。(か)2ヶ所検出された。かAは石囲みで、住居中央より北に偏って位置する。平面形は長方形、長軸方位はN-10°-W。石囲いの規模は70×45cm、石を取り塗いた後の掘り込みは規模80×60cm・深さ10cmを測る。炉床の下は10cm程焼けて赤化しており、さらに石の外側に焼けた部分が広範囲で確認されたことから、地床か転用の可能性もある。炉Bは地床炉で、住居中央より南東に偏って位置する。平面形はほぼ円形で、径約70cmを測る。掘り込みは約8cmで、炉床の下は5cm程焼けて赤化していた。(柱穴)土柱穴は4本と思われ、本調査ではそのうちの3本が検出された。深さは77cm～110cmを測る。住居南側の深さ18cmのものは、入口梯子穴の可能性がある。(覆土)11層に分層される。

〔遺物〕土器・土器・石器などが出土した。

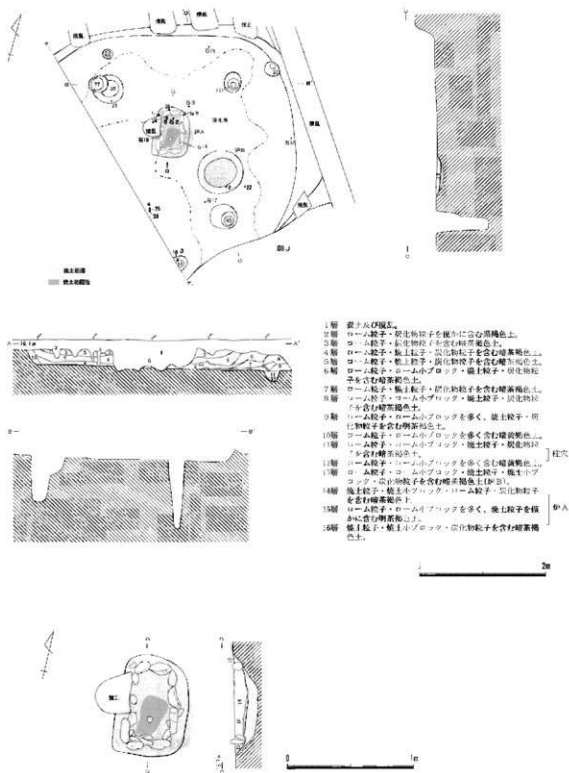
〔時期〕縄文時代中期後葉(加曾利Ⅱ式前葉)。

遺物 (第6～9図、第3・4表)

土器 (第6・7図1～3)

7～21は中期前葉から中葉にかけての土器である。

7は複合口縁の直下に結節沈線文を巡らしている。8・9は口縁部が短く「く」字状に内傾し、その幅狭の口縁部に結節沈線文と刺交文が施文される。10は複合口縁の直下に横位と斜位の沈線が施文される。円筒形の器形になるものか。11は口縁部直下に1ヶ所の突起が付され、同時に2本の結節沈線文が巡らされている。12は円筒形の器形になろう。口縁部に無文帯をもち、その直下には横位沈線文が巡らされ、以下は沈線と結節沈線文により文様が施文される。13は口縁部に隆帯を貼付け屈曲させ、その直下に横位沈線文や鋸歯状文により文様が施文される。隆帯の上端には不鮮明であるが縄文が付されてい



第5図 35号住居跡・炉跡 (1/60・1/30)

る。14は沈線により文様が施文されている。15・16は平行沈線文あるいは双渦文風の文様が描かれ、刺突文が加えられる。17～20は幅広い連続爪形文が施文される十器で、17・20は連続刺突の充填文が多用されている。21は半載竹管による2単位の蛇行する平行細線文が縦位あるいは斜位に描かれる。中央付近の細線文については、1本の軌跡であり、途切れ途切れに連続する弧文状に施文される。22は把手で左右には三叉文が描かれている。23は口縁部破片で、渦巻状の突起が付される土器で、隆帯間は沈線が加えられている。

以上、7～9は五領斗台式土器と思われるが、8・9は「く」の字に内屈する口縁部形態をもつことから、中峠式土器の可能性がある。10～20・22・23は巻坂式土器であろう。21は型式帰属が難しく、不明としたい。

①～⑥・24～41は中期後葉の土器である。

1は小型深鉢。現器高13.2cm・口径12.7cm・底径4.6cm。口縁部は降沈線による渦巻つなぎ弧文と棒状区画文で構成される。胴部は3本単位の沈線による懸垂文が施文される。地文はR L縄文である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。炉A上方の覆土中（床上25cm）の出土で、遺存度は1/2程度である。

2は現器高32.7cm・推定口径27.2cm。口縁部は渦巻文と楕円文で構成され、渦巻文の上部のみが隆帯であるが、他は沈線による文様表現である。口縁部と胴部の境には2本の沈線により栴位沈線文を巡らし、懸垂文は栴位沈線文から続く平行直線文と蛇行文である。地文はLの燃糸文である。色調は暗褐色を基調とし、胎土には砂粒・小石を含む。炉B上方の覆土中（床上14cm）からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/4程度遺存する。

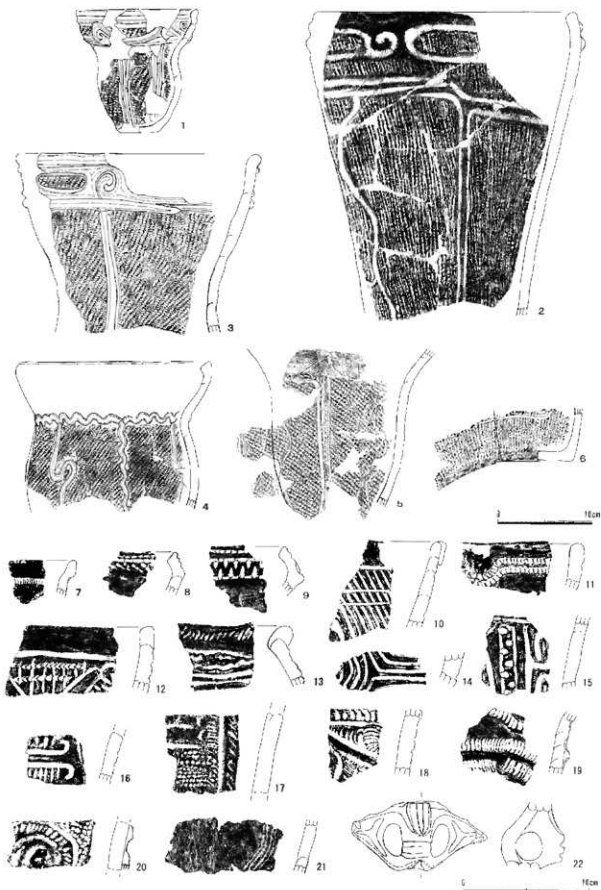
3は現器高19.3cm・推定口径26.0cm。口縁部と胴部の境に隆帯を巡らし、口縁部は隆帯による渦巻文と降沈線による楕円文で構成され、胴部はR L縄文を地文に2本単位の懸垂文が施文される。地文はR L縄文である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。両端のピット上方の覆土中（床上10cm）からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/4程度遺存する。

4は現器高16.3cm・推定口径20.4cm。口縁部の十器で、口縁部と胴部の境に波状隆帯を巡らし、胴部は縄文R Lを地文に1本単位の隆帯による懸垂文が施文される。懸垂文は蛇行文と途中に逆「J」字文（丱状）をもつ隆帯が交互に配されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒・茶褐色粒・砂粒を含む。炉Aの南側の覆土中（床上7cm）からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて4/5程度遺存する。

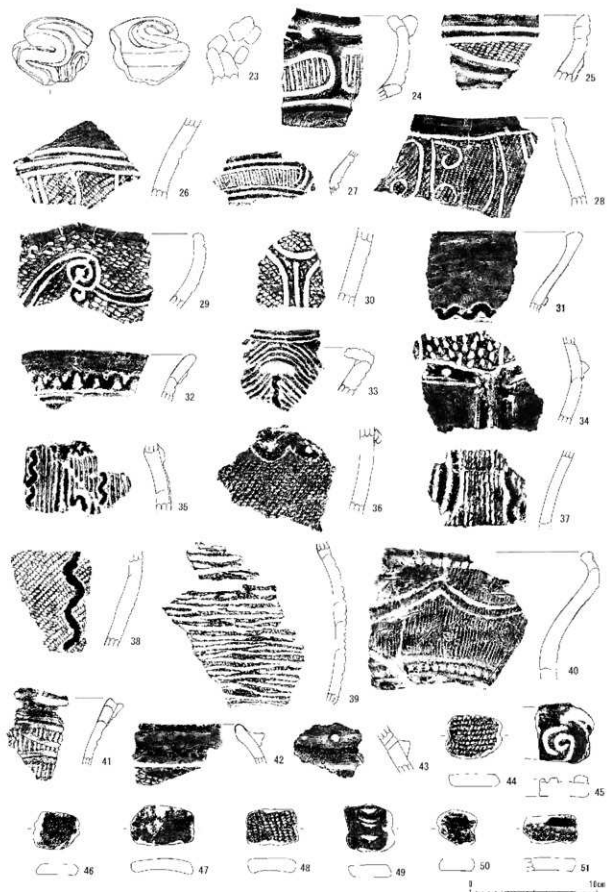
5は現器高17.0cm。頸部は無文で、胴部はL R縄文を地文に沈線による懸垂文が施文される。懸垂文は3本単位の直線文と2本単位の蛇行文が交互に配されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒・砂粒を含む。炉A上方の覆土中（床上23cm）からの出土で、頸部から胴部下半にかけて1/3程度遺存する。

6は現器高5.8cm・底径7.6cm。胴部下半にはLの燃糸文を地文に半載竹管による栴位の沈線文が施文される。色調は内面が黒色、外面が茶褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。覆土中からの出土で、底部のみ1/2程度遺存する。

24・25・27は口縁部文様帯をもつ土器で、24は降沈線により渦巻文と楕円文が施文され、楕円文区画内には縦位沈線が充填されている。25は降沈線による文様が施文され、区画内にR L縄文が施される。27は半隆起線による文様が施文され、区画内にはRの燃糸文が充填される。26は3本の栴位沈線文によ



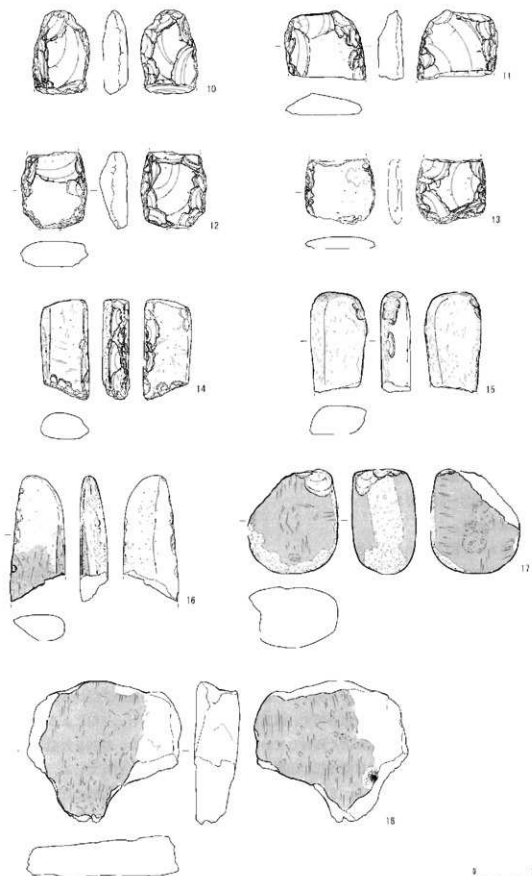
第6図 35号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第7図 35号住居跡山土遺物2 (1/3)



第8圖 35号住居跡山上石器1 (2/3・1/3)



第3図 35号住居跡出土土器2 (1/3)

り頭部と胴部を区分し、頭部は無文帯で、胴部はR L縄文を地文に懸垂文がまわっている。28は口縁部直下に沈線を巡らし、R L縄文を地文に懸垂文が施文されるが、一部に双弧文をもつ。

29は波状口縁を呈し、節の粗いR L縄文を地文に渦巻つなぎ弧文状の文様が施文される。渦巻文直下には懸垂文が施文されるのであろうか。降帯による渦巻文の一部が見られる。30はL R縄文を地文に沈線による懸垂文あるいは連弧文状の文様が施文される。

31は頭部と胴部の境に波状隆帯を巡らし、口縁部が無文の4と同類の十器である。32は口縁無文部が狭く、直下に横位沈線文が施文される。33は口縁部が「く」字状に内屈し、文様は2本の沈線文の直下に重弧文が施文される。重弧文の連結部には波状隆帯が垂下している。34は胴部には懸垂文に連結する押捺をもつ降帯が巡り、胴部を上下に区分し、上部には列点文が充填される。35は半截竹管による条線を地文に降帯による波状隆帯と懸垂文が施文される。36はR L R縄文を地文に1本の横位降帯を巡らし、その直下に波状文が付される。37はLの捻糸文を地文に降帯による懸垂文が施文される。38はR L縄文を地文に降帯による波状の懸垂文が施文される。39は稜位の細条線を地文に半截竹管による横位沈線文が施文される土器である。

40は口縁部直下に1本の列点文、胴部に列点文を伴う横位沈線文を巡らし、口縁部には2本単位による連弧文が施文される。地文はRの捻糸文であると思われるが、条線表現なのであろう。41は波状口縁を呈し、口唇上には沈線を巡らし、Lの捻糸文を地文に横位沈線文とつなぎ弧文が施文される。

42・43は有孔罅付土器の口縁部小破片である。42の罅部直下にはRの捻糸文が斜位に施される。43には罅部直上に3mm程度の1孔が穿たれている。いずれも全面赤彩される。

以上、1～3・5・24～30・37・38は加曾利R式系土器、4・31～36・39は曾利式系土器、8・40・41は連弧文系土器と思われる。

土製品 (第7図44～51、第3表)

すべて十種である。

石 器 (第8・9図1～18、第4表)

1は黒曜石製の石鏃である。左側縁から左側部にかけて欠損している。刃基礎であり、決りは非常に深い。調整は丁寧に施されており、縁辺は鋸歯縁である。

2は緑色片岩製の磨製石斧の破片である。表面には整形による磨耗面と敲打痕が観察される。

3は凝灰岩製の乳棒状磨製石斧である。左側縁から刃部にかけて欠損している。整形は丁寧に施されており、表面の磨耗が顕著に認められる。右側面と残置する左側面には成形時の敲打痕が観察される。

4～13は打製石斧である。4は分銅形を呈する。基部付近の両側縁は磨滅が見受けられる。表面には原礫面が広く残置している。5は短筒形を呈する。両側縁に敲打痕が認められ、使用によると思われる磨滅も見受けられる。表面には原礫面が広く残置している。6は短筒形を呈し、基部を欠損している。両側縁に敲打痕が認められる。表面には原礫面が残置している。7は基部を欠損している。表面には使用によると思われる磨滅が見受けられる。8は基部および刃部を欠損している。表面には原礫面が広く残置している。左右両側縁は使用によると思われる磨滅が顕著に観察される。9は刃部を欠損しているが、楕円形を呈すると思われる。表面には原礫面が部分的に残置している。10は刃部を欠損している。全体は風化が著しい。11は刃部を欠損しており、完形は比較的大形であろうと推定される。12は刃先および基部を欠損している。表面には原礫面が広く残置している。13は基部を欠損しており、比較的薄身である。表面には原礫面が広く残置している。

4が片岩製、5・6・9が砂岩製、8・10～12がホルンフェルス製、7・13が頁岩製である。

14～16は敲石である。14は砂岩製である。右側縁および下面を使用面としている。右側縁には特殊磨石状の使用面の再生と思われる剥離による調製が見受けられる。表裏面には使用によると思われる擦痕が観察される。15は凝灰岩製であり、下部を欠損している。左右両側縁を使用面としており、敲打痕および剥離状痕が認められる。上面は磨耗面が顕著に認められる。16は片岩製であり、下部を欠損している。左右両側縁を使用面としており、敲打痕および剥離状痕が認められる。表面は擦痕が観察され、磨耗面が認められる。

17は花崗岩製の磨石である。表裏両面に磨耗面が顕著に認められる。縁辺には全周にわたり敲打痕が観察される。上面は稜が敲打によりつぶれており剥離状痕も認められることから、破壊後も使用したと思われる。

18は片岩製の石皿である。表裏両面を使用していると思われ、擦痕が観察される。裏面には凹みが1カ所認められる。

88号住居跡

遺構 (第10図)

[住居構造] 289Yに切られ、35Jを切る。住居南側は平成13年の区画整理に伴う調査で、調査済みである。住居上層は後世の耕作によりかなり壊されている。(平面形)六角形か。(規模)5.70×5.50m。(長軸方位)ほぼN-S。(壁高)残りのよい部分で43cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。(壁溝)確認できた範囲では巡らされており、西側は2重になっている。上幅14～26cm・下幅6～12cm・深さ4～18cmを測る。(床面)住居中央部分は289Yにより床面が割られていたが、壁際を除いて良く硬化していたと思われる。壁際に5cm程の粘土が確認できた。(炉)2ヶ所確認できた。炉Aは、石の遺存状態は悪かったが、石囲埋焼炉と思われる。住居中央より北側に偏って位置し、平面形は楕円形で、規模107×92cm・掘り込みは17cmを測る。南側には深鉢の上半部が埋められていた。炉床は焼けて赤化しており、とくに炉体土器の両側に良く焼けていた。炉Aの西側に焼けて赤化した5cm程の掘り込みが確認できたため炉Bとしたが、南側が調査区域外のため詳細は不明である。(柱穴)主柱穴は5本と思われ、そのうちの3本が確認された。深さは78～82cmを測る。(覆土)8層に分層される。

[遺物] 土器・土製品・石器が出土している。炉A内から竹片が出土した。分析結果は付編参照。

[時期] 縄文時代中期後葉(加富利EⅡ式中葉)。

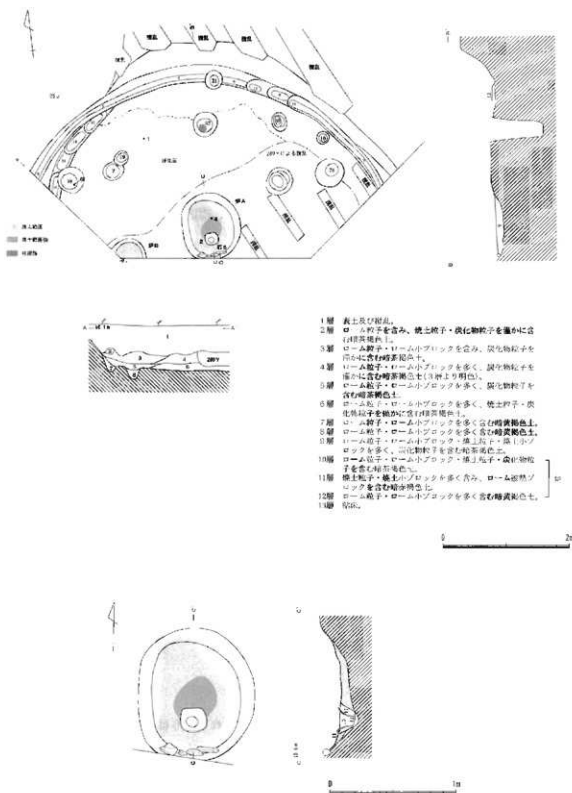
遺物 (第11～13図、第3・4表)

土器 (第11・12図1～23)

5～13は中期中葉の土器である。

5は口縁部直下に2本の半截竹管による結節沈線文が施文される。6は口縁部直下にやや幅広い結節沈線文を巡らし、その下部に沈線による上下交互の三角刺突文が施文される。7は口縁部の隆帯の内側に沿って半截竹管による結節沈線文が施文される。8は半截竹管による波状文が施文される。9は連続八角形文と半円形の刺突文が施文され、隆帯上には結節沈線文が付される。5・7～9の胎上には多くの金雲母が含まれている。

10は刻み目をもつ隆帯は懸垂文となり、その区画内は上下交互に短沈線が施文される。11は縦位沈線文と半截竹管による半円形の刺突文に区画された中に短沈線が充填されている。12はキャタピラ状の連



第10図 88号住居跡・楕円(1/60・1/30)

続爪形文が施文されるが、間隔が開く部分には、再度目の細かい結節沈線文を補っている。13は沈線文の区画内には刺突文が充填されている。

以上、5～9は阿玉台式土器、10～13は橋板式土器であろう。

1～4・14～22は中期後葉の土器である。

1は現器高29.0cm・推定口径37.2cm。口縁部直下と胴部中に3本単位の横位沈線文を巡らし、上下段を区分し、それぞれの段には連弧文が施文される。連弧文は上段に2段、下段に1段である。地文は条線である。色調は暗茶褐色を基調とし、胎上には赤褐色粒子・砂粒・小石を含む。北壁近くの覆土中(床上33cm)からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/3程遺存する。

2は現器高15.0cm・口径23.0cm。4単位の波状口縁を呈する。口縁部直下と胴部下半に2本単位の横位沈線文を巡らし、上下段を又分し、上段には3本単位の沈線による連弧文が2段施文される。胴部下半の横位沈線文は途中で渦巻文をもち、地文はLの燃糸文である。色調は暗黄褐色を基調とし、胎上には砂粒を多く含む。炉Aに設置された炉体土器で、口縁部から胴部中部にかけて4/5程遺存する。

3は現器高38.8cm・推定口径11.5cm。頸部と胴部の境に2本の隆帯が巡り、頸部は無文である。胴部は2本単位の隆帯による直線文と大柄渦巻文、1本単位による蛇行文の組み合わせにより懸垂文が構成されている。地文は条線である。内面には輪積み痕が顕著に見られる。色調は淡茶褐色を呈し、胎上には砂粒・小石を含む。北西柱穴上方の覆土中(床上42cm)からの出土で、頸部以下を1/3程遺存する。

4は現器高11.5cm・口径6.9cm。胴部下半には当載竹管による条線文が施される。色調は淡茶褐色を呈し、胎上には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。炉A中からの出土で、胴部下半から底部にかけて4/5程遺存する。

14は波状口縁を呈するもので、隆帯による渦巻文が施文される。15は口唇部が幅狭の複合口縁を呈し、口縁部にはLの燃糸文を地文に隆帯による渦巻文が施文される。16は口縁部小破片で、2本の隆帯を巡らし、その直下にRの燃糸文を地文に沈線文の一部が見られる。17・18は粗い燃糸文を地文に17は横位平行沈線文、19は2本の隆帯による懸垂文が施文される。

19は口縁部に重弧文が施文される。20はLの燃糸文を地文に隆帯による波状文が施文される。21は隆帯による懸垂文の一部である逆「J」地文(舌状)が施文される。地文は条線文である。

22は口縁部直下に3本の横位沈線文が施文される。23は2本の沈線により連弧文が施文される。いずれも地文は条線文である。

以上、14～18は加曽利R式土器、3・4・19～21は曾利式土器、1・2・22・23は連弧文系土器と思われる。

土製品 (第12図24～28、第3表)

24は土製F形、25～28は土鉢である。

石器 (第13図1～5、第4表)

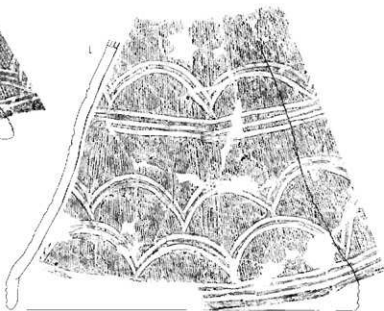
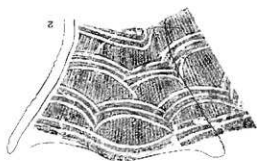
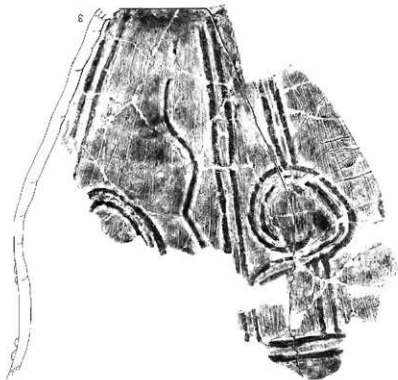
1は黒曜石の原石である。不純物が多く見受けられる。

2・3は打裂石斧である。2は砂岩製で、体部の一部である。表面に原礫面が残置している。3はホルンフェルス製で、基部を欠損している。比較的細身だが基厚がある。

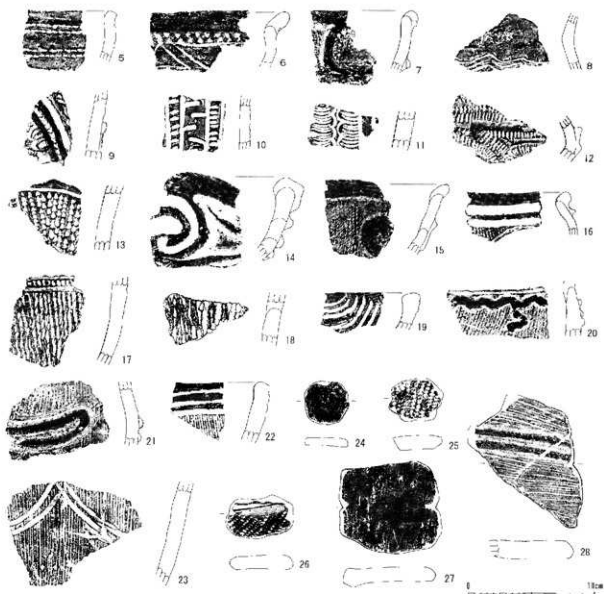
4は緑色片岩製の多孔石器である。破片であり、表面の縁辺に3カ所の凹みが認められる。また擦痕も観察される。

5は緑色片岩製の石皿で、欠損している。表裏両面をかなり使用しており、上部から下部にむけて薄

第11圖 1 編號平泉州出土遺物 1 (1/1)



附2表 西風人塚新出遺物の地文の別表



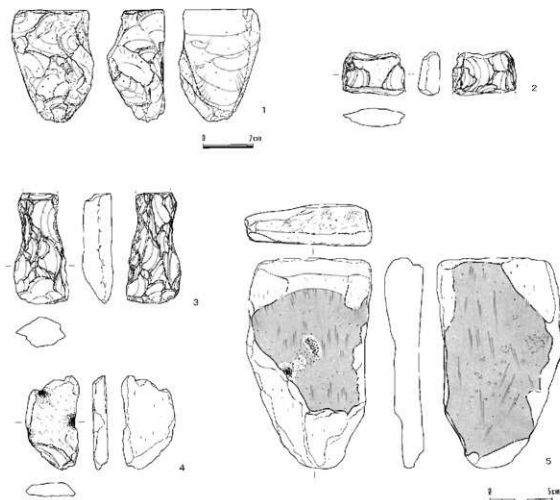
第12図 88号住居跡出土遺物2 (1/3)

身になっている。擦痕が認められる。

131号住居跡

遺構 (第14図)

〔住居構造〕392Y・451Dに切れ、西側の一部は調査区域外である。(平面形)六角形。(規模)不明×5.20m。(壁高)10～15cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝)巡らされていたが、壁から少し離れて掘られており、住居の北側と埋裏のある南西側では一部途切れていた。(床面)竈の北側から西側にかけて、よく硬化している。(か)住居のほぼ中央に位置する。石はあまり確認できなかったが、右開戸であったと思われる。平面形は楕円形で規模114×88cm・深さ10～14cmの掘り込みを持つ。東側が良く焼けて赤化していた。(埋裏)南西壁の中央付近に位置し、径約110cmの円形に近い掘り込みの中に、



第13図 88号住居跡出土石器 (2/3・1/3)

深鉢の上半部が埋め込まれていた。(柱穴) 上柱穴と思われるものは4本検出された。北コーナーと西コーナーのものは重複形態をとっていた。深さ35～74cmを測る。(覆土) 7層に分層される。

〔遺物〕 土器・土鍾・石器が出土した。

〔時期〕 縄文時代中期後葉 (加曾利EⅡ式中葉)。

遺物 (第15・16図、第3・4表)

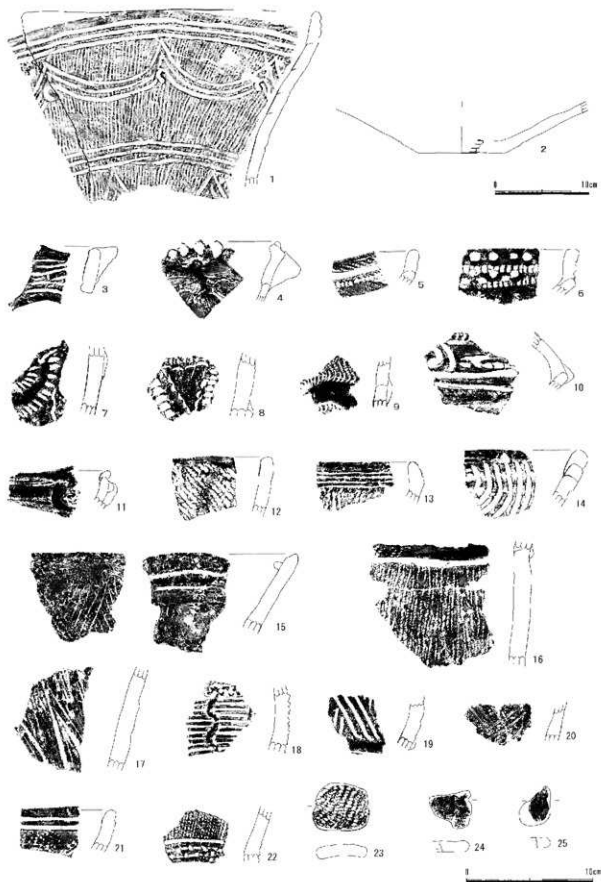
土器 (第15図1～22)

3～10は中期前葉から中葉にかけての土器である。

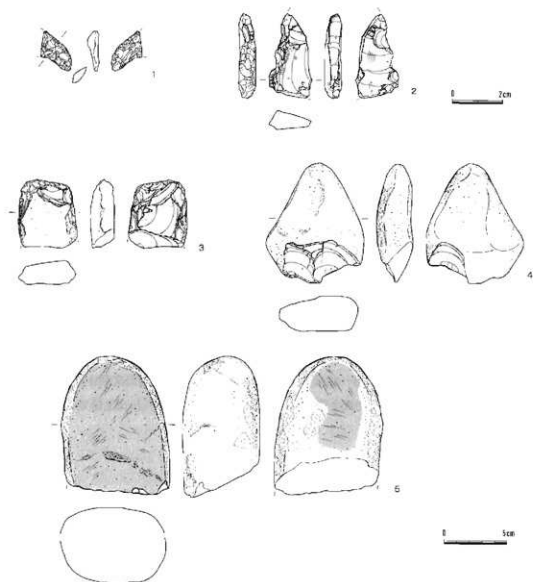
3は口縁部の装飾突起部分で、口縁部は波状口縁を呈する。波頂部直下に横位沈線文を施文し、その後斜位の細線による平行沈線文が加えられている。

4は鋸歯状の突起をもつ口縁部小破片である。外面に瘤状の貼付けをし、その下部から隆帯を連続させ、さらに隆帯に沿って楕円状の結節沈線文が施文される。

5は波状口縁を呈し、口縁部直下には横位沈線文と連続爪形文を巡らしている。地文はR.L縄文である。6は口肩部外面に刻み目が施され、その直下には2本の軸広の連続爪形文と交互刻突による連続「コ」の字状文が施文される。7・8は隆帯に沿って軸広の連続爪形文を施す土器で、7には鋸歯状文、



第15図 131号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第16図 131号住居跡出土石器 (2/3・1/3)

8には連続する爪形刺突文が施文されている。9はLR縄文を地文に曲線的な隆帯に沿って連続爪形文が施文される。

10は浅鉢の破片で、口縁部には沈線による渦巻文、横位直線文、結節沈線文、連続する刻み目が施文される。

以上、3は五領ヶ台式土器、4は阿玉台式土器、5～10は勝坂式土器であろう。

1・2・11～22は中期後葉の土器である。

1は現器高18.8cm・口径31.2cm。口縁部直下と胴部中に横位沈線文を巡らし、上下段を区分し、それぞれの段には1段の連弧文が施文される。積位沈線文と連弧文は3本単位の沈線を基本とするが、上段の連弧文は連結部分で上から3本目の沈線に渦巻文をもつ。地文は条線（原体は撻糸文）である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。南西壁近くに埋蔵として使用された深鉢で、口縁部

から胴部中位にかけて 4/5 程度遺存する。

2は硯器高5.6cm・底径9.4cm。浅鉢で、胴部下半は無文である。色調は内面が黒褐色、外面が暗褐色を呈する。胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を含む。北東壁近くの覆土中（床上10cm）からの出土で、胴部下半以下を 1/3 程度遺存する。

11は波状口縁を呈し、I線部直下には1本の隆帯を巡らし、波頂部には隆帯による「S」字状の渦巻文が施文される。地文は横位のLの滄糸文である。

12は粗いLR縄文が全面に施される土器である。13は口縁部直下に半截竹管による2本の平行沈線文を巡らし、そこから半截竹管による懸垂文が施文される。地文はLの滄糸文である。13J 5に類似する土器である。14は口縁部に重弧文が施文される。15は口縁部に格子目文が施文され、口縁部内面には隆帯を巡らし、口唇部には短沈線による刻み目状文が施文される。16はLの滄糸文を地文に胴部に1本の隆帯が回っている。17は地文に縦位の粗い条線文が施文される土器で、半截竹管によるものであろう。18は口縁部と胴部の境に交互刺突文を巡らし、胴部は半截竹管による横位平行沈線文を地文とし、蛇行隆帯による懸垂文が施文される。19はI線部と胴部の境に隆帯を巡らし、I線部は斜位の沈線文が施文される。20は地文に沈線による格子目状文を施し、隆帯による懸垂文が施文される。

21はI線部直下に2本の横位沈線文を巡らし、地文はRL縄文である。22は胴部に列点文を伴う横位沈線文を巡らし、地文はRの滄糸文である。

以上、2・11は加曾利E式土器、13～20は曾利式土器、1・21・22は連弧文系土器と思われる。12は縄文を地文とする土器であるが、曾利式土器の可能性もある。16は加曾利E式土器であるかもしれない。

土製品（第15図23～25、第3表）

すべて土錐である。

石器（第16図1～5、第4表）

1は黒曜石製の石鏃の右側部である。凹基鏃であり、抉りはかなり深い。調製は非常に丁寧に施されている。

2は黒曜石製の二次加工のある剥片である。右側縁を欠損している。左側縁に調整を施している。素材剥片の背面構成から90°打面転移が窺える。

3は砂岩製の打製石斧であり、刃部を欠損している。両側縁には敲打による調製を施している。表面には原礫面が広く残置している。

4はホルンフェルス製の礫器である。扁平礫の一端に加工を施し刃部を作出している。刃先には微細割離痕が認められる。裏面の割離面はその縁辺に微細割離痕が見受けられないことから、使用中による割離と考えられよう。

5は砂岩製の磨石であり、刃部を欠損している。表裏面に磨耗が認められ、両側面には敲打痕が観察される。

132号住居跡

遺構（第17・18図）

【住居構造】392Y・2Tに切られる。住居の北側は調査区域外である。（平面形）六角形。（規模）不明×6.10m。（壁高）26～32cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がる。（壕溝）確認できた範囲では巡らされていたが、東コーナー付近と南壁の堀裏付近で一部途切れている。（床面）柱穴の内側に硬化し

た部分が確認できた。(炉) 2ヶ所検出された。炉Aは、地床がで、住居中央より北に偏って位置する。平面形は楕円形で、規模132×92cm・7cm程の掘り込みを持つ。炉床は良く焼けており、10cm程の厚さでロームが赤化していた。炉Bは、6cm程の掘り込みと焼けた炉床が確認されたため、地床炉と思われるが、北側が調査区域外にあるため詳細は不明である。炉Aの西側で、壁側に偏って位置する。(埋壘) 南壁の中央付近に位置する。住居に貼床を施したあと床面を掘り込み、3層を貼った上に深鉢を埋設している。内部より石7個と深鉢の破片が出た。(柱穴) 主柱穴は5本と思われるが、そのうちの4本が検出された。深さ73~79cmを測る。北東のものは重複形態で、東コーナーの柱穴の隣にやや浅めのものが1本検出されているため、住居の建替えが行われた可能性がある。(覆土) 14層に分層される。

[遺物] 土器・土錘・石器が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉(加曾利EⅡ式後葉)。

遺物 (第19~22図、第3・4表)

土器 (第19~21図1~47)

14~19は中期中葉の土器である。

14は胴状突起をもつ口縁部破片で、突起上端には刻み目をもち、外面には結節沈線が施文される。15は口唇上に刻み目をもち、結節沈線により胴状文が施文される。14・15には胎土中に金雲母を多く含む。16は横位の結節縄文が2段見られる。

17は口縁部に1ヶ所の豚鼻状の突起が貼り付けられ、口唇部には沈線が巡らされている。頸部は無文であるが、直下に1本の横位沈線文が見られる。18は口縁部の把手部分で、内面には楕円形の穿孔をもつ。突起直下の口縁部には沈線と刻み目を巡らし、地文にはLの捲糸文が施される。19は瘤状突起をもち、半截竹筴による結節沈線文と平行沈線文を縦横に施文し区画文を構成し、区画内はLR縄文が施される。20は隆帯による渦巻文上に結節沈線文と幅広爪形文が施される。

以上、14~16は阿玉台式土器、17~20は勝坂式土器であろう。

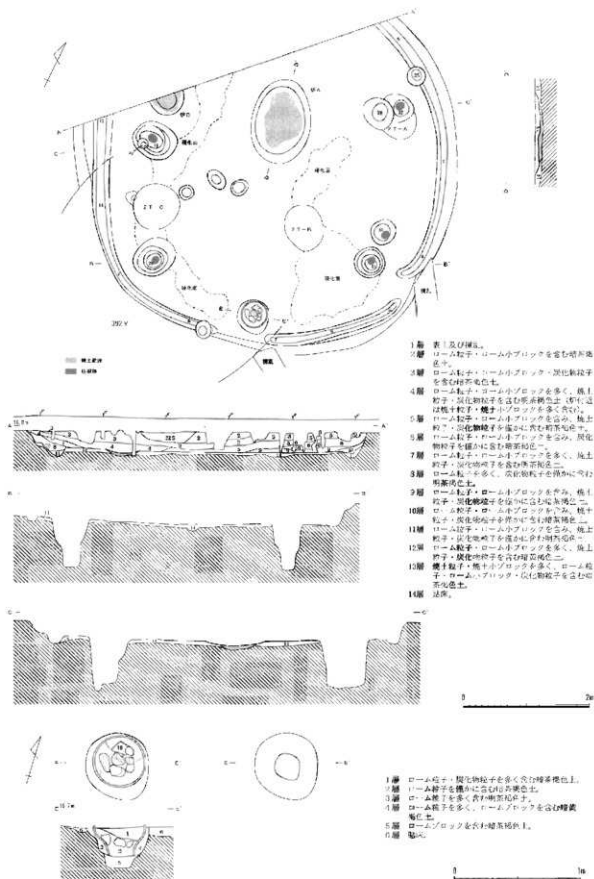
1~13・21~47は中期後葉の土器である。

1は現器高7.9cm・推定口径20.0cm。小型浅鉢で、口縁部直下に無文部をもち、口縁部文様帯は沈線表現による渦巻つなぎ弧文が施文される。弧文上部にはRL縄文が抱かれ、縄文以外はいわいに磨き調整が施される。内面及び外面無文部には赤彩が施される。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。炉Aの東側の覆土中(床土14cm)からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/2程遺存する。

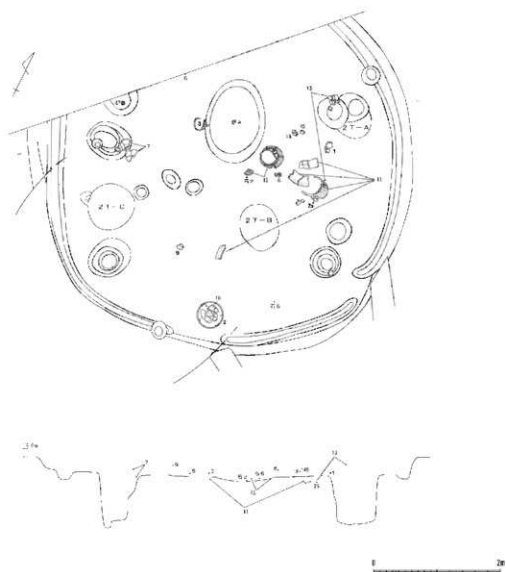
2は現器高23.4cm・口径40.5cm。頸部に無文帯をもち、口縁部には2本単位の降沈線による渦巻つなぎ弧文が施文される。胴部は頸部との境に2本の隆帯を巡らし、以下隆帯による懸垂文が施文される。懸垂文は2本単位の直線文と1本単位の蛇行文が交互に配されている。地文はすべてLの捲糸文である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。南壁の中央付近に埋壘として使用された深鉢で、口縁部から胴部中位にかけて完形である。

3は現器高13.6cm。胴部にはRL縄文を地文に9単位の磨消懸垂文が施文される。色調は暗橙褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。炉のすぐ西側の覆土中(床土12cm)からの出土で、胴部中位から下半にかけて4/5程遺存する。

4は大型深鉢の破片である。口縁部文様帯は隆帯による杵状区画文で構成され、胴部文様帯は磨消懸垂文が等間隔で施文されている。地文はすべてLR縄文である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄



第17図 132号住居跡・埋窠 (1/60・1/36)



第18図 132号住居跡遺物出土状態(1/60)

褐色粒子・砂粒を含む。覆土中からの出土である。

5は現器高8.6cm・底径8.4cm。地文のR L縄文のみが施される。色調は内面が黒色、外面が暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。北端の覆土中（床上6cm）からの出土で、胴部下半以下を1/2程度遺存する。

6は現器高8.9cm・底径8.9cm。2本単位の沈線により連弧文と懸垂文が施文される。地文は複節R L R縄文である。色調は内面が黒色、外面が淡茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。炉Aの東側の覆土中（床上16cm）からの出土で、胴部下半以下を1/3程度遺存する。

7は現器高14.6cm・底径10.2cm。胴部にはR L縄文を地文に沈線による懸垂文が施文される。懸垂文は2本単位の直線文と1本単位の蛇行文により構成される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。炉B南の柱穴近くのほぼ床面上からの出土で、胴部中心位以下を2/3程度遺存する。

8は現器高3.8cm・推定口径11.8cm。小型深鉢で、口縁部は無文で、頸部には上下2段の隆帯を巡らし、その区画内には波状隆帯を施文している。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。覆土中からの出土で、口縁部から頸部にかけて1/3程度遺存する。

9は現器高6.8cm・推定口径14.7cm。口縁部と胴部の境には2本の隆帯を巡らし、口縁部は無文で、胴部はR L縄文を地文に半截竹管による懸垂文が施文される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。南西柱穴の東側のほぼ床面上からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて2/3程度遺存する。

10は現器高9.5cm・推定口径20.1cm。口縁部と胴部の境には半截竹管による平行沈線文が3段巡らされ、口縁部は無文で、胴部は条線文を地文に半截竹管による懸垂文が施文される。なお、平行沈線文は最上と最下段が途中で途切れ、段違いのアレンジがされているようである。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には小石を含み、金室母を僅かに含む。埋蔵として使用された2の土器内からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/2程度遺存する。

11は現器高30.7cm・口径35.0cm。口縁部と胴部の境に3本の隆帯とその区画内に交互押捺を付す2本の隆帯が回り、その上には懸垂文と同単位の5単位に耳たぶ状の突起が付される。口縁部は無文で、胴部は条線（原体は捺糸文か）を地文に2本単位の隆帯による「J」字文（剣先状）を途中にもつ懸垂文が施文される。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。炉Aの東側の床面上からやや散在的に出土し、口縁部から胴部下半にかけて4/5程度遺存する。

12は現器高29.6cm・口径34.7cm。口縁部と胴部との境に2本の波状隆帯を巡らせ、口縁部には重弧文が施文される。また、口唇上には6単位の「S」字状の突起が貼り付けられ、その突起の単位に合わせて波状懸垂文が配されている。胴部はL R縄文を地文に懸垂文が施文される。懸垂文は2本単位の隆帯による逆「J」字文を途中にもつ直線文と1本単位の蛇行文が交互に配されている。文様割付構成は上から口唇上の突起・重弧文の中心・口縁部の波状懸垂文・胴部の逆「J」字文（舌状）をもつ懸垂文が一直線上に並ぶ。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。炉Aのすぐ東側の床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程度遺存する。

13は胴部破片で、胴部に2本の隆帯を巡らし、その隆帯の下端には1つの突起が付されている。文様は条線文を地文に隆帯による蛇行文と途中で渦巻文風の「J」字文（舌状）と逆「J」字文（舌状）の一部をもつ懸垂文が交互に施文されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。北東柱穴から炉Aの東側付近の床面上及び覆土中からの出土である。

21は口縁部に隆沈線による渦巻文が施文される。地文には縄文が施されるが、単節ではなくLRL縄文であろうか。22は小型深鉢で、口縁部には隆沈線による杓状区画文が施文され、区画内にはRI縄文が施される。頸部は無文である。23は隆帯あるいは隆沈線による杓状区画文が施文され、区画内には渦巻文が配置され、RL縄文が施される。24は口縁部に突起部の一部が残り、口縁部直下に2本の沈線が巡り、以下にRL縄文を地文に等間隔の磨消懸垂文が施文される。25は口縁部直下に交互刺突文を伴う横位沈線文を巡らせている。地文はLRL縄文であろう。26は口縁部直下に1本の隆帯を巡らし、直下には地文の条線文が施される。27は口縁部に隆帯による杓状区画文が施文され、区画内には刺突文風の隆帯文が垂下し、Lの懸糸文が施される。28は口縁部直下に横位太沈線文を2本巡らし、地文はLRL縄文である。29は口縁部に半隆起線による渦巻つなぎ弧文の一部と思われる弧文が施文されている。区画内はLの懸糸文が施される。30はRL縄文を地文に2本の隆帯による懸垂文が施文される。31はLの懸糸文を地文に2本の沈線による懸垂文が施文される。32は地文にLの懸糸文、33・34はLRL縄文が施され、34は磨消懸垂文が施文される。

35は口縁部にLの懸糸文が施される。36は口縁部直下に3本の横位沈線文を巡らし、そこから2本の沈線により懸垂文が施文される。地文はLの懸糸文である。37は頸部に無文帯をもち、その直下に先端を「ㄍ」・「ㄷ」状に途切れる横位沈線文を巡らし、胴部はRL縄文を地文に懸垂文が施文される。懸垂文は2本単位の直線文と1本単位の蛇行文の交互に配されている。38は胴部に隆帯を巡らし、その上部に矢羽根状の沈線文を地文に横位太沈線文が1本施文される。39はLの懸糸文を地文に2本単位の隆帯による懸垂文が施文される。懸垂文は途中に渦巻つなぎ弧文状の連結部をもつ。40は小型深鉢で、LRL縄文を地文に沈線による蛇行する懸垂文が施文される。41はRI縄文を地文に2本単位の沈線による懸垂文が施文される。懸垂文は直線文と鋤歯状の蛇行文が交互に配されている。42は口縁部と胴部の境に1本の隆帯を巡らし、口縁部には沈線文と隆帯により格子目文を構成させ、胴部はLRL縄文を地文に隆帯による蛇行する懸垂文が施文される。43・44は懸糸文を地文に隆帯による蛇行する懸垂文が施文される。43はLの懸糸文、44はRの懸糸文である。45は底部破片で、Lの懸糸文を地文に半載竹管による懸垂文が施文される。

46は胴部に半載竹管による横位沈線文を巡らし、その下方に連弧文が施文される。地文はRI縄文である。

47は有孔鏝付土器の小破片である。内外面に赤彩が施される。

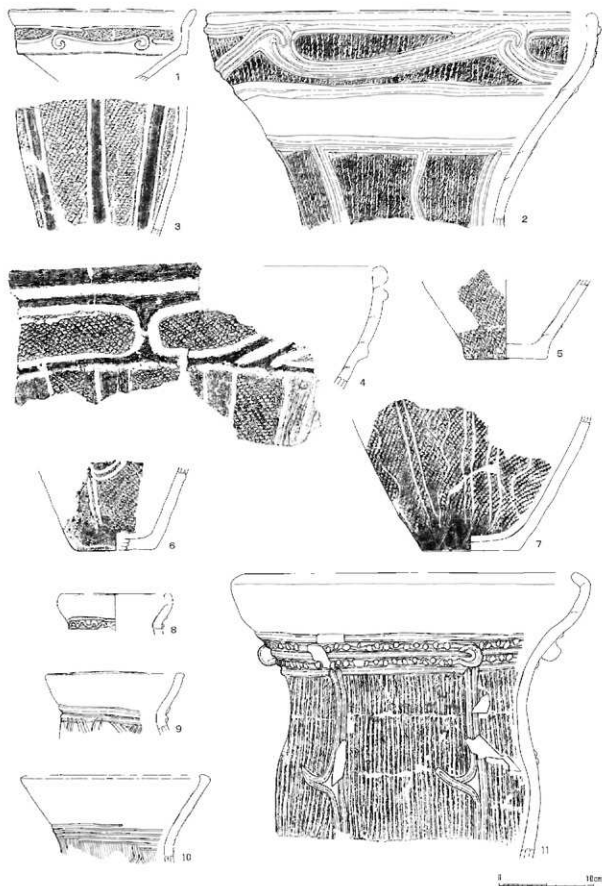
以上、1～5・7・21～34は加曽利R式土器、8～13・35～45は曾利式土器、6・46は連弧文系土器と思われるが、41・43は加曽利E式土器であるかもしれない。

土製品 (第21図48～53、第3表)

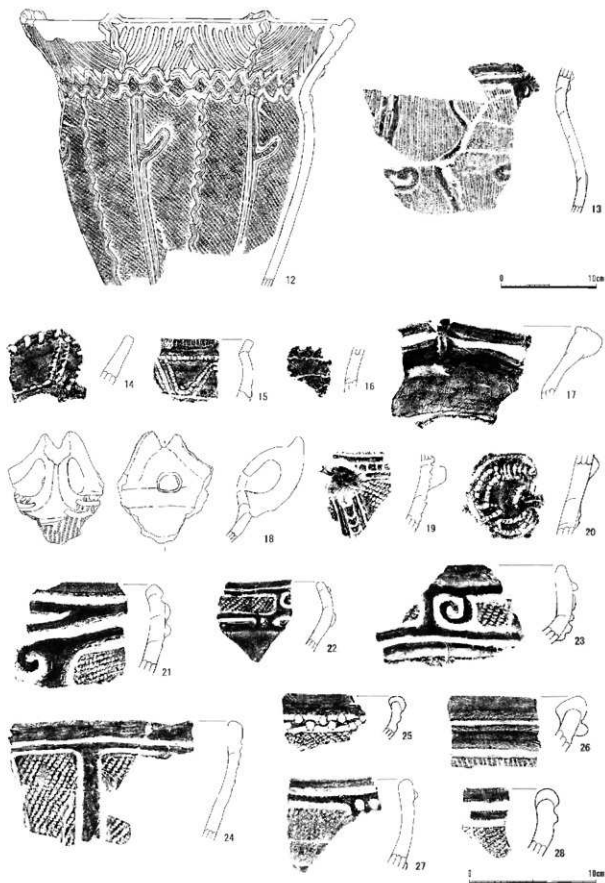
すべて土器と思われる。

石器 (第22図1～10、第4表)

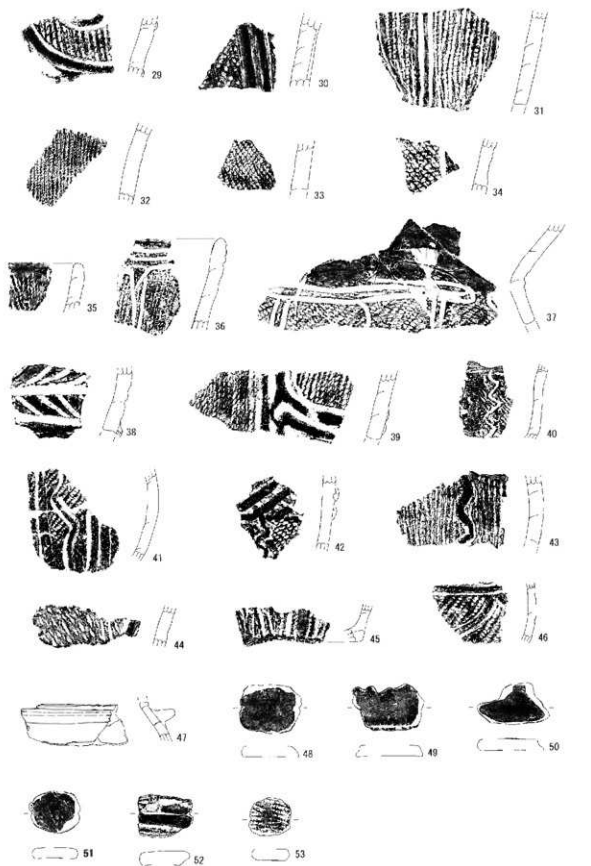
1～5は打製石斧である。1は刃部を欠損している。表面には原礫面が残置している。2は基部および対部左側縁付近を欠損している。撥形を呈する。比較的、厚みがあり、右側縁を敲打により調整を施している。表面には原礫面が残置している。3は撥形である。右側縁は敲打により調整を施している。刃部付近には磨滅が顕著に見受けられる。表面には原礫面が残置している。4は短冊形を呈する。刃部から両側縁にかけてと裏面には、磨滅がかなり顕著に見受けられる。表面には原礫面が広く残置している。5は短冊形を呈する。風化が著しい。1は砂岩製、2～4が頁岩製、5がホルンフェルス製である。



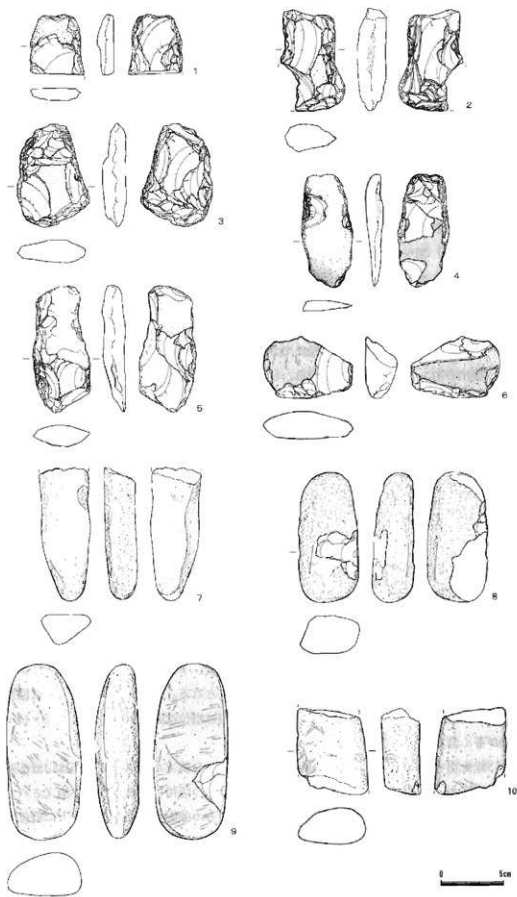
第19図 132号住居跡出土遺物1 (1/4)



第20図 132号住居跡出土遺物 2 (1/4・1/3)



第21図 132号住居跡出土遺物3 (1/3)



第22図 132号住居跡出土石器 (1/3)

6～9は砂岩製の敲石である。6は上面を欠損している。残置している両側縁および下部には敲打痕が観察され、剥離痕も認められる。表裏両面には磨耗が顕著に認められ、剥離の稜線も磨滅している。

7は上部を欠損している。棒状礫を素材とし、素材の稜と下部の先端を使用しており、敲打痕が認められる。8は表裏両面に敲打痕が観察される。風化が著しい。9は棒状礫を素材としている。左右両面を使用しており、敲打痕が認められる。表裏両面および左側面には磨耗が顕著に認められる。

10は砂岩製の磨石である。表裏両面に磨耗が認められる。また両側縁下部には敲打痕も観察される。

133号住居跡

遺構 (第23・24図)

〔住居構造〕135 Jを切り、459 Dに切られる。(平面形) 隅丸方形。(規模) 5.12×4.80m。(長軸方位) N-13°-E。(壁高) 38～48cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。(壁溝) 全周する。上幅18～30cm・下幅6～14cm・深さ9～17cmを測る。壁柱穴と思われるビットが多数検出された。(床面) 住居の南側が良く硬化していた。貼床は2～6cmの厚さで施されている。(炉) 住居中央より北に偏って位置する。石は9個しか検出されなかったが、石州炉であったと思われる。平直形は楕円形で、規模110×82cm・深さ10cmの掘り込みを持つ。炉床は良く焼けており、5cm程の厚さでロームが赤化していた。(柱穴) 土柱穴は4本検出され、深さ69～75cmを測る。(覆土) 16層に分層される。北壁の中央付近の床面上から礫が8個検出された。

〔遺物〕多数の土器と土師・浮子・石器が出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉(加曾利EⅡ式前葉)。

遺物 (第25～34図、第3・4表)

土器 (第25～30図1～81)

14～46は中期前葉から中葉にかけての土器である。

14は集合沈線文を地文に三角陰刻文が施文される。胎土には金雲母を多く含む。

15は鋸歯状の口縁部を呈し、口縁部直下に半載竹管による2本の平行沈線文が巡らされ、地文にはL R縄文が施される。16は口縁部直下に2本の結節沈線文が施される。17は口縁部直下に半載竹管による1本の結節沈線文を施し、その下方には連続爪形文が施文される。18の口縁部直下には鋸歯状文による鋸歯状文の一部が見られる。19は半載竹管による結節沈線文により柵目区画された内部に鋸歯状文が充填される。20は横位隆帯の上方に半載竹管による平行沈線文、下方に連続爪形文が施文される。21は半載竹管による平行沈線文と結節沈線文により曲線文が施文される。22はL R縄文を地文に結節縄文が横位に施される。23は隆帯による渦巻文が施文され、区画内は縦位沈線が充填される。15・17～23の胎土には金雲母が多く含まれる。

24は複合口縁を呈する土器で、複合部の直下には地文のL R縄文が施される。25は口縁部直下に結節沈線による直線文と鋸歯状文が施文される。26は刻み目をもつ隆帯による渦巻文が施文され、渦巻文の上端の一部にはキャタピラ文が加えられる。27は刻み目をもつ曲線状の隆帯文の直下に縦位沈線文が施文される。28は刻み目をもつ曲線状の隆帯文と沈線文が施文される。29は口縁部直下に1段の鋸歯状文を巡らせ、その下方は縦位沈線文であろう。30は口縁部直下に1本の沈線文を巡らせ、その下方に半載竹管による沈線文が施文させる。31・32は同一個体と考えられる。口縁部から胴部中途にかけての大型破片で、口縁部に幅狭の無文帯をもち、以下に刻み目をもつ隆帯を上下に巡らすことにより、幅広い文

様帯を区画している。文様は意匠を凝らした隆帯による大きな円形文を施文し、その内部には沈線と連続爪形文を併用した3つの渦巻文を配置させている。32では円形文以外の文様が見られるが、縦位沈線を基本にさらに区画文が構成され、沈線と連続爪形文により重層的な文様が施文される。33は胴部に1本の隆帯を巡らせ、その上方に沈線による直線文や三角文などの文様が施文される。34は半截竹管を多用し、連続刺突文や平行沈線文、キタビラ文が施文される。35は隆帯に沿って幅広い連続爪形文が施文される。36は半隆起線による円形文や枠状区画文が施文される。37は隆帯に沿って結節沈線文が施され、さらに隆帯内側と隆帯上には連続刺突文による擬縄文が充填されている。隆帯外側はR L縄文を地文に縦帯文が施文される。38は刻み目をもつ隆帯と楕円形状の枠状区画文が施文され、区画内は縦位沈線文が充填される。39は刻み目をもつ隆帯により上向きの弧文が巡らされる。40は刻み目をもつ隆帯と2本の沈線文により山形状の文様が施文される。41はR L縄文を施した隆帯が胴部に巡らされ、そこから刻み目をもつ隆帯が連結し上方に延び、沈線による区画文も見られる。下方には地文のR L縄文が施される。42はLの燃糸文を地文に刻み目をもつ隆帯が巡らされる。43は連続刺突文が縦位に施される。44は幅広い半截竹管による平行沈線文を2段巡らせ、その内側にLの燃糸文が施される。

45は大型浅鉢になるうか。連続刺突文が横位に3段施文される。不鮮明であるが、内外面赤彩が施される可能性がある。

46~48は地文のみの土器である。45は口縁部破片で、縦位の条線文が施文され、46はRの燃糸文が格子状に施文される。47は短く連続しない縦位のL R縄文が施文される。

以上、14は五領ヶ台式土器、15~23は阿玉台式土器、24~48は勝坂式土器と思われるが、46~48は地文のみであり、型式不明とした方がいいのかもしれない。

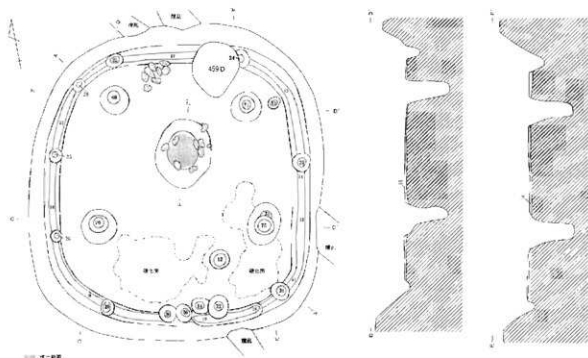
1~13・49~81は中期後葉の土器である。

1は現器高21.5cm・推定口径49.4cm。大型浅鉢で、体部は大きく開き、頸部で内屈し、頸部から口縁部にかけては「く」字状を呈する。口縁部と体部は無文で、頸部には上・下2本の隆帯により区画文を構成し、内部には渦巻文と楕円文が施文される。色調は暗茶褐色を基調とするが、口頭部内外面は赤彩が施されると思われる。胎土には砂粒を含む。南壁近くの覆土中（床上24cm）からの出土で、口縁部から体部中位にかけて1/4程度遺存する。

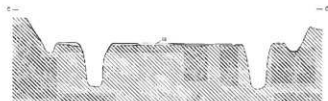
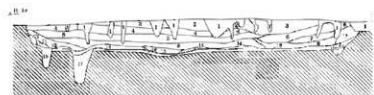
2は現器高6.9cm・推定口径19.0cm。口縁部直下と口縁部と頸部の境に横位隆帯を巡らし、口縁部文様帯を構成し、内部は隆沈線による渦巻つなぎ弧文状と楕円文が施文される。地文は全体にLの燃糸文が施され、胴部は地文のみである。色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には角閃石・砂粒を含む。北東柱穴上方のはば床面上からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程度遺存する。

3は現器高20.4cm・推定口径29.0cm。頸部に無文帯をもち、口縁部はR L縄文を地文に隆沈線による渦巻つなぎ弧文・枠状区画文が施文される。頸部と胴部との境に3本の沈線を巡らせ、地文にLの燃糸文が施され、懸垂文はない。全体に精巧に作られている土器である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には白色針状物質・砂粒を含む。炉のすぐ北側の覆土中（床上14cm）からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/4程度遺存する。

4は現器高30.0cm・口径37.5cm。口縁部は隆帯による6単位の渦巻文が連結し、その間は区画文で構成される。胴部は口縁部との境に隆帯を巡らし、隆帯による懸垂文が施文される。懸垂文は隆帯による2本単位の直線文と1本単位の蛇行文が交互に配されている。地文はすべてRの燃糸文である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。南東柱穴の西側の床面上（6の外側）から

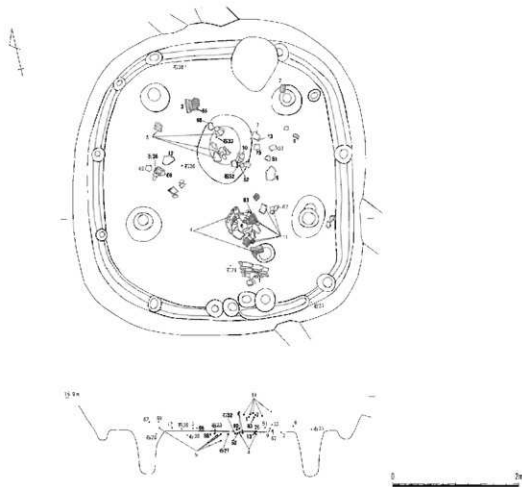


67 遺構概略



- 1層 瓦葺
- 2層 ローム粒土・ローム小ブロック、炭化物粒を多く含む暗茶褐色土
- 3層 ローム粒土・ローム小ブロック、炭化物粒を含む暗茶褐色土
- 4層 ローム粒土・ローム小ブロック、焼土粒子、炭化物粒を含む暗茶褐色土
- 5層 ローム粒土・ローム小ブロック、焼土粒子、炭化物粒を含む暗茶褐色土
- 6層 ローム粒土・ローム小ブロック、焼土粒子、炭化物粒を含む暗茶褐色土
- 7層 ローム粒土・ローム小ブロックを含む、焼土粒子、炭化物粒を多く含む暗茶褐色土
- 8層 ローム粒土・ローム小ブロック、炭化物粒を含む、赤土粒子を多く含む暗茶褐色土
- 9層 ローム粒土・ローム小ブロック、炭化物粒、焼土粒子を多く含む暗茶褐色土
- 10層 赤土粒子・ローム小ブロック、炭化物粒を含む、赤土粒子を多く含む暗茶褐色土
- 11層 ローム粒土・焼土粒子、炭化物粒を多く含む暗茶褐色土
- 12層 ローム粒土・ローム小ブロックを含む、焼土粒子を多く含む暗茶褐色土
- 13層 ローム粒土・ローム小ブロックを多く、焼土粒子、炭化物粒を含む暗茶褐色土
- 14層 ローム粒土・ローム小ブロックを多く、赤土粒子、炭化物粒を含む暗茶褐色土
- 15層 ローム粒土・ローム小ブロックを多く、焼土粒子を多く含む暗茶褐色土
- 16層 ローム粒土・ローム小ブロックを多く、焼土粒子、炭化物粒を含む暗茶褐色土
- 17層 ローム粒土・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土
- 18層 瓦葺

0 2m



第24図 133号住居跡遺物出土状態 (1/60)

の出土で、口縁部から胴部下半にかけて4/5程遺存する。

5は現器高23.1cm・口径18.5cm・底径8.5cm。口縁部直下に半截竹管による平行沈線文を廻らし、そこから懸垂文が配されている。懸垂文は2本単位の蛇行文・直線文を交互とするが、1箇所のみ蛇行文が1本単位の部分が見られる。沈線はすべて半截竹管によるもので、地文はR L縄文である。色調は明茶褐色を基本とし、口縁部から胴部中位にかけては黒褐色を呈する。胎土には茶褐色粒子・角閃石・砂粒・小石を含む。埴及び覆土中(床土17cm)からやや散在的に出土し、遺存度は3/4強である。

6は現器高26.0cm・口径34.6cm。キャリパー形を呈し、口縁部と胴部の境に波状隆帯を廻らし、口縁部は無文で、胴部は半截竹管による横位沈線文を地文に微隆起の棒状貼付文が上下千鳥状に配されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、黄褐色粒子・橙色粒子を含む。南東柱穴の西側の床面上(4の内側)からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて4/5程遺存する。

7は現器高13.2cm・推定口径25.0cm。口縁部文様は沈線による重弧文が施文され、口唇部内面は1本の沈線がまわり、沈線の直上に刻みが施される。口縁部と胴部との境には波状隆帯を廻らし、さらに波状隆帯は口縁部の重弧文間から胴部懸垂文と共有している。胴部は縦位沈線を地文に3本単位の沈線により重弧文が施文されている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には角閃石・砂粒・小石を含む。埴のすぐ

東側の覆土中(床上31cm)からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて2/3程遺存する。

8は現器高7.6cm・推定口径23.2cm。内湾する口縁部には半載竹管による短沈線を縦位に施文し、以下はLの粗い捺糸文が施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。東塚近くの覆土中(床上18cm)からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて1/3程遺存する。

9は現器高16.5cm。頸部と胴部の境に隆帯を巡らし、口縁部には斜位の沈線文が施文される。胴部は隆帯直下に4本の横位沈線文を巡らし、Lの捺糸文を地文に懸垂文が施文される。懸垂文は1本単位の隆帯による蛇行文と途中に逆「J」字文(舌状)をもつものが交互に配されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。炉のすぐ東側の覆土中(床上18cm)からの出土で、頸部から胴部下半にかけて1/3程遺存する。

10は現器高15.0cm・推定底径9.4cm。胴部にはLの捺糸文を地文に沈線による懸垂文が施文される。懸垂文は3本単位を基本とする点線文と1本単位の蛇行文が交互に配されている。3本単位の懸垂文は全体のレイアウトのバランスが崩れたと思われる、重複している部分が見られる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。炉の直上(床面レベル)からの出土で、胴部中位以下を1/3程遺存する。

11は現器高27.8cm・推定口径29.0cm。口縁部直下に凹形刺突文を2段伴う横位沈線文と胴部中位に横位沈線文を巡らし、上下段を区分し、上段には連弧文が2段、下段には懸垂文が施文される。横位沈線文・連弧文・懸垂文はすべて3本単位の沈線を基本とし、地文は条線である。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒を含む。南東柱穴の内側の覆土中(床上28cm)からやや敢断的に出土し、口縁部から胴部下半にかけて1/3程遺存する。

12は現器高13.6cm・推定口径30.3cm。口縁部直下に3本単位の沈線による横位沈線文を巡らし、その下には3本単位の沈線による連弧文が施文される。地文はRの捺糸文が斜位・横位・縦位とランダムに施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。炉の西側の覆土中(床上13cm)からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/6程遺存する。

13はRの捺糸文を地文に渦巻文を伴う連弧文系の土器である。連弧文は3本の沈線を単位とし、3段確認できるが、弧文というより横位沈線文である。色調は内面が黒褐色、外面が暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。炉のすぐ東側の覆土中(床上14cm)からの出土で、胴部上半から下半にかけて1/2程遺存する。

49は鈔状に張り出した口縁部には船狭の文様帯をもつ。文様は口縁部に1ヶ所の突起を貼り付け、そこから二手に分かれるように交互刺突文による連続「コ」字状文が施文される。連続「コ」字状文は明瞭な隆帯ではなく、半隆起線による表現である。胴部はRの捺糸文を地文に半載竹管による懸垂文が施文される。50は小型深鉢と思われる。口縁部には横位沈線と隆沈線により文様が施文される。51は口縁部に隆帯による渦巻文と沈線による枠状区画文が施文され、枠状区画内には縦位沈線文が充填される。胴部にはR L縄文を地文に隆帯による懸垂文が施文される。52は口縁部に隆沈線による渦巻文と枠状区画文が施文される。枠状区画内はR L縄文が施される。頸部は無文帯でその直下には1本の横位沈線文が見られる。53は口縁部には2本単位の隆帯による曲線文が施文される。地文はR L縄文である。54は口縁部に隆帯と太線による渦巻文あるいは枠状区画文が施文される。胴部は磨滑懸垂文が施文される。地文はL R L縄文と思われる。55は口縁部に隆帯による渦巻文と枠状区画文が施文される。地文は条線文である。56は口縁部に隆帯による渦巻文と連結する文様で構成される。地文はRの捺糸文であろうか。57・58は複節斜縄文を地文に磨滑懸垂文が施文される。

59は現器高4.8cm・推定口径14.7cm。小型深鉢で、口縁部には渦巻文を利用し、獸面を思わせるような突起が付され、口縁部は重弧文が施文される。口縁部内面には沈線を巡らし、沈線外側には実際には途切れているが、重弧文から連続するような手法で短沈線が施されている。非常に精巧に作られている土器である。60は口縁部にやや太い沈線による重弧文が施文される。地文は条線文である。61は1層上面に2本の沈線を巡らし、口縁部には半截竹管による斜行沈線文とソーマン状の細い隆帯の組み合わせにより格子目文が施文される。62は口縁部に粗いR.L縄文が施される。63は粗いLの燃糸文を地文に隆帯による懸垂文が施文される。64は半截竹管による横位沈線文を地文に2本の隆帯による懸垂文が見られる。65は条線文を地文に隆帯と沈線による懸垂文が施文される。66は条線文を地文に沈線による懸垂文が施文される。懸垂文は直線文が3本単位、蛇行文が2本単位で、蛇行文の上方には木の葉状の沈線文の一部が見られる。67は条線文を地文に隆帯による蛇行する懸垂文が施文される。68は胴部下半から底部にかけての破片で、粗いR.L縄文を地文に2本の沈線による懸垂文が施文される。

69は口縁部直下と胴部に横位沈線文を巡らせ、口縁部と胴部を区分し、11縁部には連弧文とその下方に梨形状の文様が彫刻を埋めるように施文されている。胴部には懸垂文が施文される。地文はR.L縄文で、文様はすべて半截竹管によるものである。70・71は同一個体と考えられる。条線文を地文に3本単位の沈線により横位沈線文と連弧文が施文される。胎上には砂粒・小石(最大で7mm程の大きさ)を多く含んでいる。72はLの燃糸文を地文に沈線による横位沈線文と連弧文が施文される。11縁部直下の横位沈線文は3本単位、連弧文は1本単位である。73は11縁部直下に交互刺突文を伴う2本の横位沈線文を巡らせ、以下に連弧文が見られる。地文はL.R縄文である。74は3本単位の沈線により横位沈線文と連弧文が施文される。地文は斜位のLの燃糸文である。75は3本単位の沈線により横位沈線文と連弧文が施文される。連弧文は弧文というより曲線的な波状文であり、地文にはLの燃糸文が施される。76は11縁部直下に2本単位の横位沈線文を巡らせ、その下方に連弧文の一部が見られる。地文はLの燃糸文である。77は口縁部直下に2本単位の横位沈線文を巡らせ、その下方に楕円形状の文様が見られる。地文はLの燃糸文である。78は条線文を地文に菱形の文様が施文される。79は条線文を地文に沈線による懸垂文と横に連結する文様が施文される。80は条線文を地文に横位沈線文とその下方に懸垂文が連結する連弧文が施文される。81は胴部下半から底部にかけての破片で、L.R縄文を地文に懸垂文を伴う連弧文が施文される。

以上、1～4・10・49～57は加曾利E式土器、5～9・59～68は曾利式土器、11～13・69～81は連弧文系土器と思われるが、63・64は加曾利E式土器、10は曾利式土器であるかもしれない。49は勝飯式系統の土器であろうか。

土製品・石製品 (第30図82～101、第3表)

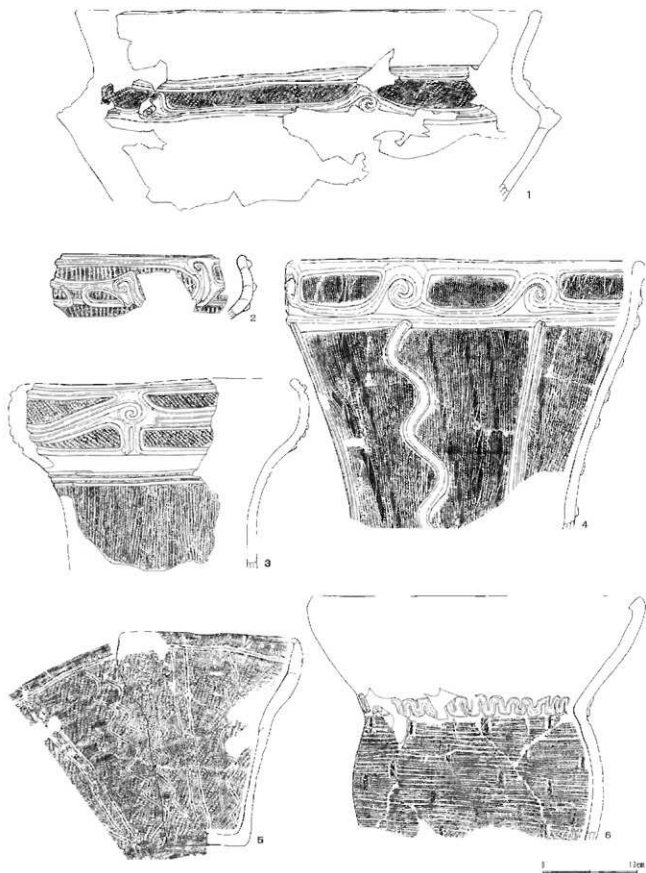
82～94は土鐘、95～100は土製円盤、101は浮子である。

石器 (第31～34図1～38、第4表)

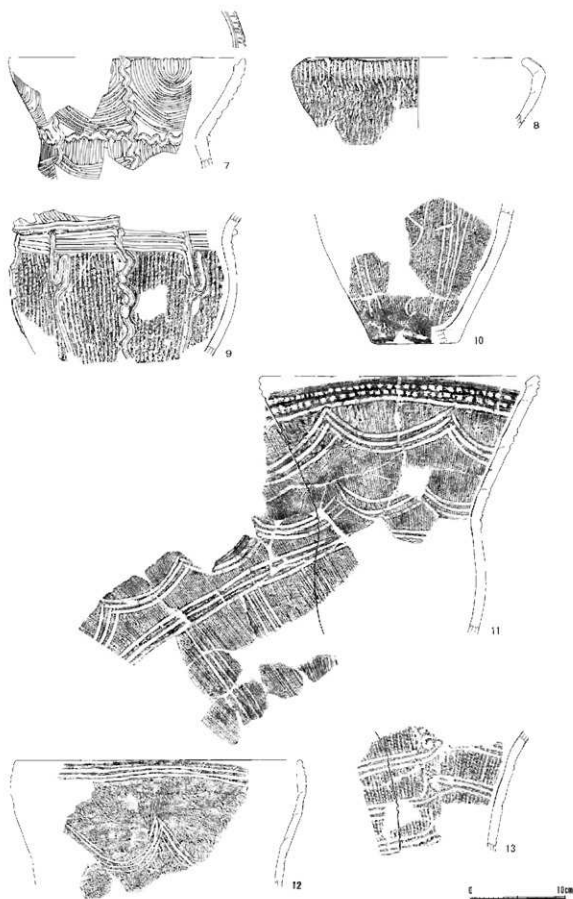
1・2は黒曜石製の石楯である。1は凹基楯であり、本遺跡出土の石楯の中では扱りは浅い方である。丁寧に調整が施されている。2は先端および左踵部を欠損している。調整は粗く、基部の形状も不明な点があり、未製品の可能性が窺えよう。

3は黒曜石の石楯未製品である。素材は縦長剥片である。左側縁は表面に、右側縁は裏面に調整を施している。基部の調整はまだ施されていない。

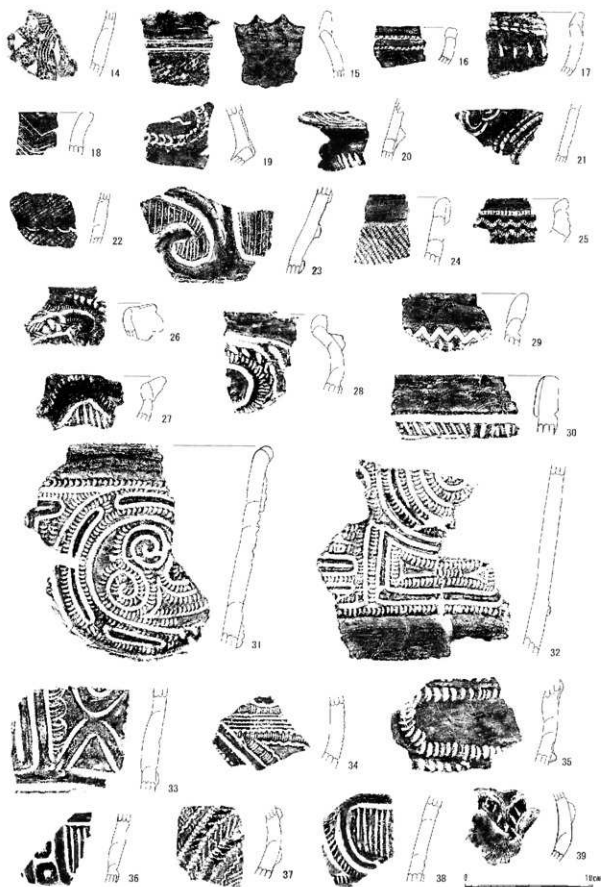
4・5は黒曜石製の楔形石器である。上下両端に剥離痕が認められる。



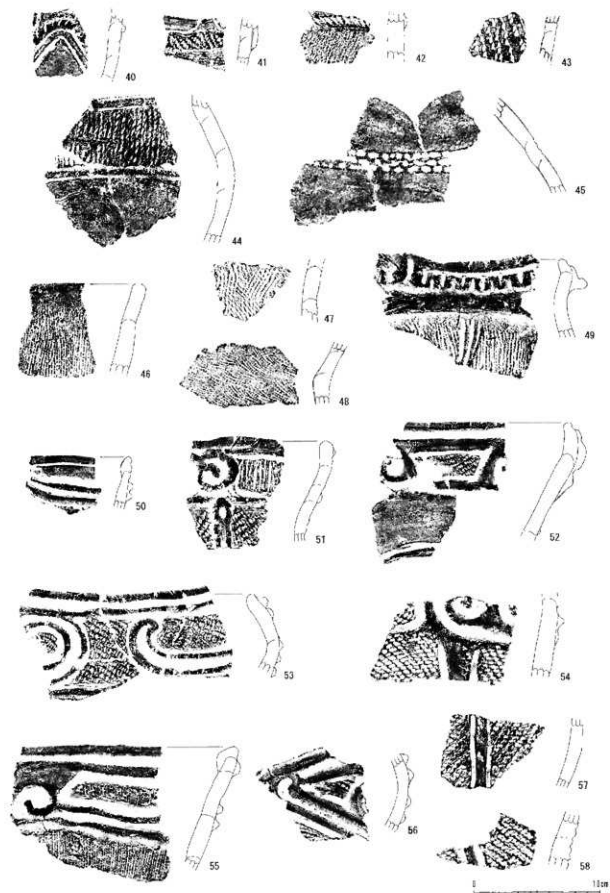
第25図 133号住居跡出土遺物1 (1/4)



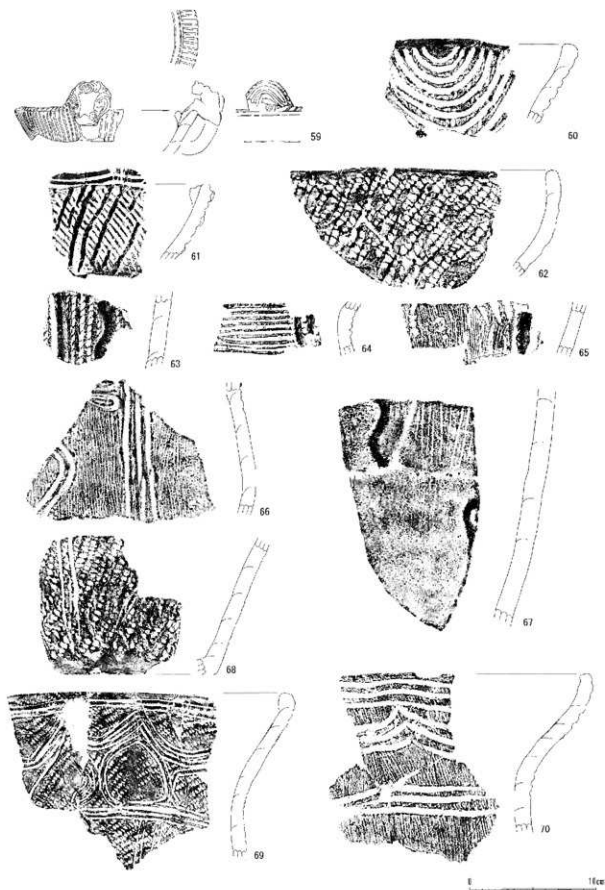
第26図 183号住居跡出土遺物2 (1/4)



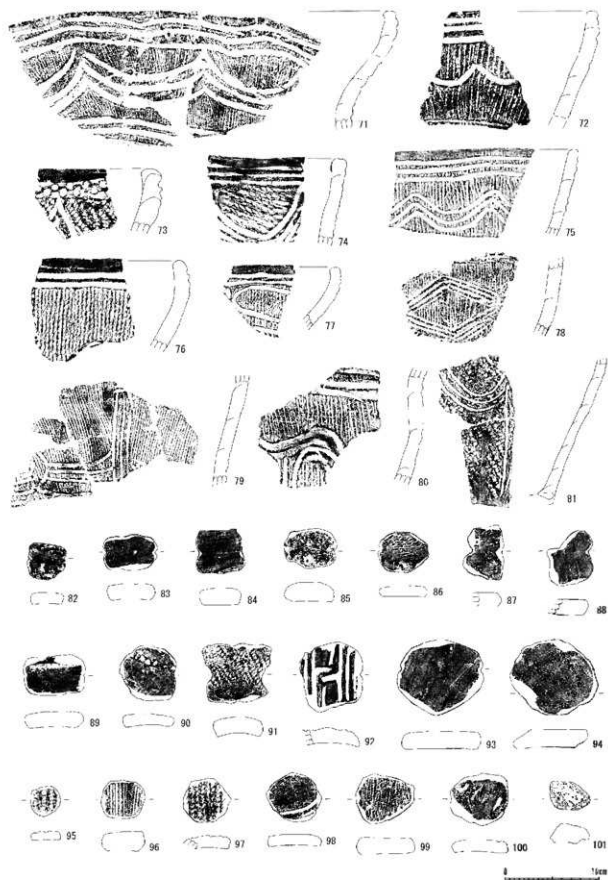
第27図 133号住居跡出土遺物 3 (1/3)



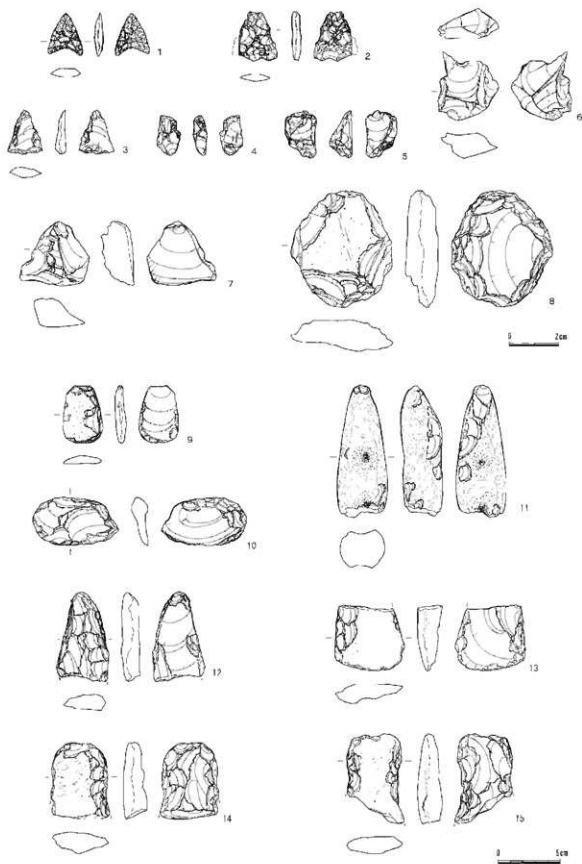
第28図 133号住居跡出土遺物4 (1/3)



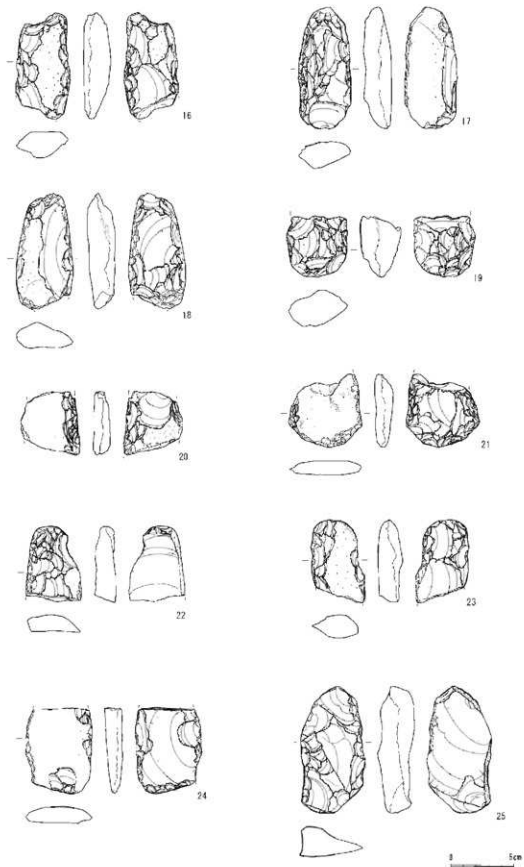
第29図 133号住居跡出土遺物 5 (1/3)



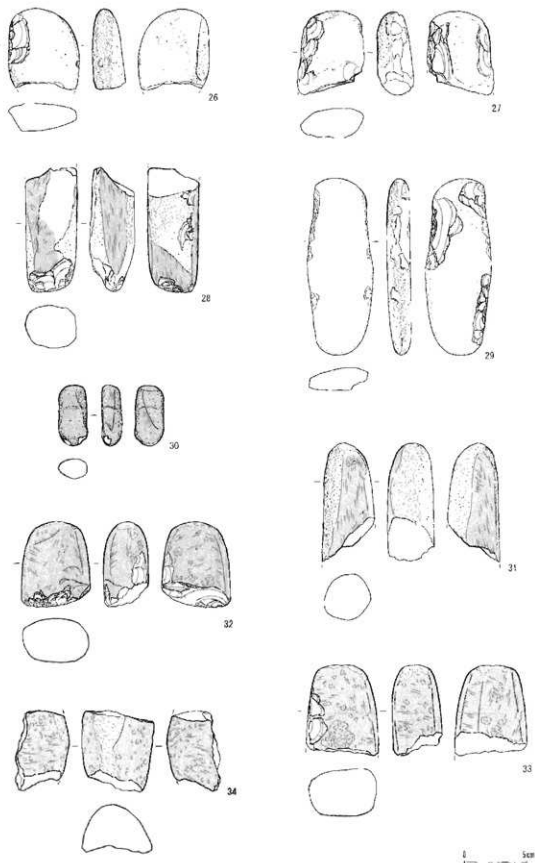
第30図 133号伴野跡出土遺物6 (1/3)



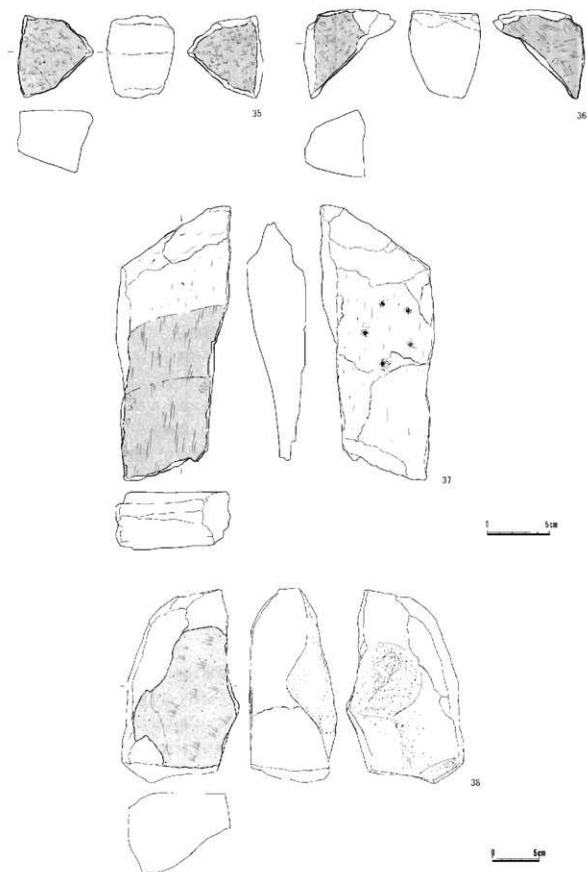
第31図 133号住戸跡出土石器1 (2/3・1/3)



第32図 133号住居跡出土石器2 (1/3)



第33区 133号住居跡出土石器3 (1/3)



第34図 133号住居跡出土石器4 (1/3・1/4)

6は黒曜石製の石核で、左側面を欠損している。180°打面転移が窺える。原礫面が残置している。

7は黒曜石製の剥片である。背面構成から打面転移が窺える。

8は片岩製の円盤状石器である。全周にわたり調整を施している。調整順は表面で粗く形状を作出した後、裏面に表面より細かい調整を行っている。表面に原礫面が広く残置している。

9は砂岩製の小形石器であり、上部を欠損している。縦長剥片を素材とし、縁辺に調整を施している。表面には原礫面が広く残置している。全体的に風化が著しい。

10は片岩製の横刃である。横長剥片を素材とし、端部に連続した調整を施し刃部を作出している。基部にも調整が見受けられる。

11は凝灰岩製の凹石であり、磨製石斧の転用と考えられる。表裏両面に2ヵ所ずつ凹みが見受けられる。素材の草製石斧は乳棒状であり、刃部を欠損している。表裏両面は整形による磨耗面が顕著に認められ、両側面には敲打痕が観察される。

12～24は打製石斧である。12は刃部を欠損しているが、楕形を呈すると思われる。右側縁は敲打による調整を施している。13は基部を欠損しているが、楕形を呈すると思われる。両側縁には敲打による調整を施しており、また磨滅も認められる。表面には原礫面が広く残置している。14は刃部を欠損しているが、楕形を呈すると思われる。風化が著しい。表面には原礫面が残置している。15は刃部を欠損しているが、楕形を呈すると思われる。両側縁には敲打による調整を施している。表面には原礫面が広く残置している。16は基部および刃部を欠損しているが、楕形を呈すると思われる。扁平礫を素材としており、表裏両面に原礫面が残置している。17は楕形を呈する。裏面には原礫面が広く残置している。縁辺は風化により欠損している部分が見受けられる。18は刃部を欠損している。楕形を呈する。両側縁には敲打による調整を施している。表裏両面に磨耗が顕著に認められる。19は基部を欠損している。比較的厚みがあり、右側縁には敲打による調整が認められる。裏面には原礫面が残置している。20は基部および刃部を欠損している。比較的、薄身である。表面には原礫面が広く残置している。21は基部を欠損している。表面には原礫面が広く残置している。22は裏面および刃部を欠損している。表面と左側面に原礫面が残置しており、扁平な礫を素材としておりと思われる。23は刃部を欠損している。風化が著しい。右側縁には敲打痕が観察される。表面には原礫面が広く残置している。24は基部および刃先を欠損している。表面には原礫面が広く残置している。13～17・19C～22が砂岩製、23・24がホルンフェルス製、18が凝灰岩製、12が片岩製である。

25はホルンフェルス製の大形利器である。右側縁に連続した調整を施し、刃部を作出している。

26～29は敲石であり、すべて砂岩製である。26は下部を欠損している扁平礫を素材とし、縁辺を使用している。左側縁には敲打による剥離痕が認められる。27は下部を欠損している。扁平礫を素材としており、縁辺を使用している。全体的に風化が著しい。28は棒状礫を素材としており、上部を欠損している。下部には剥離痕が認められ、敲打痕が観察される。また素材礫の稜にも敲打痕が見受けられる。磨石としての使用も顕著に見受けられ、磨耗面が形成されている。29は縦長の扁平礫を素材とし、左右両側縁を使用しており敲打痕および剥離痕が観察される。

30～33は磨石である。30は非常に小形であり全面に磨耗が認められる。31は下部を欠損している。表裏両面に磨耗面が顕著に認められる。また左右面には敲打痕が観察される。32は表裏左右面を使用しており、磨耗が顕著に認められる。右側面から裏面に剥離痕が認められるが、稜縁が磨滅している。上面・左右両側面には敲打痕が観察される。下面にも敲打痕が認められ、表面縁辺には剥離痕が見受けられる。

33は下部を欠損している。裏表左右面を使用しており、磨耗が顕著に認められる。表面・上面および左側縁には敲打痕が観察される。33が安山岩製、他は砂岩製である。

34～38は石皿である。34～36は閃緑岩製であり、大きく欠損している。裏表両面を使用面としており、磨耗が顕著に認められる。37は緑色片岩製であり、欠損している。表面は磨耗面および捺痕が顕著に認められ、下部はかなり基薄である。裏面には比較的小さな凹みがかつ所、見受けられる。38は砂岩製であり、欠損している。表面を使用面としており、磨耗が顕著に認められる。

134号住居跡

遺構 (第35・36図)

〔住居構造〕 291Y・393Y・456J)に切られる。住居の上部は後世の耕作によりかなり壊されている。(平面形)六角形。(規模)不明×6.66m。(壁高)30cm前後を測り、壁は緩やかに立ち上がる。(壁溝)確認できた範囲では巡らされていた。上幅14～22cm・下幅6～11cm・深さ5～9cmを測る。(床面)柱穴より内側に良く硬化した面が確認できた。(炉)2ヶ所確認できた。炉Aは、石匠炉で住居中央より北東に偏って位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は118×90cm・深さ20cm程の掘り込みを持つ。石は17個焼出された。炉床は良く焼けており、10cm程の厚さでロームが赤化していた。炉Bは炉Aの西側に位置し、掘り込みを持たない地床炉と思われる。86×60cmの楕円形で、東側は焼けて赤化しており、西側には被熱により硬化したロームが確認できた。(柱穴)主柱穴は5本と思われるが、そのうちの4本が確認できた。深さは55～64cmを測る。南西壁近くの深さ49cmのものは入口梯子穴の可能性がある。(覆土)11層に分層される。

〔遺物〕 土器・土釘・石器が出土した。

〔時期〕 縄文時代中期後葉(加曾利BⅢ式)。

遺物 (第37～46図、第3・4表)

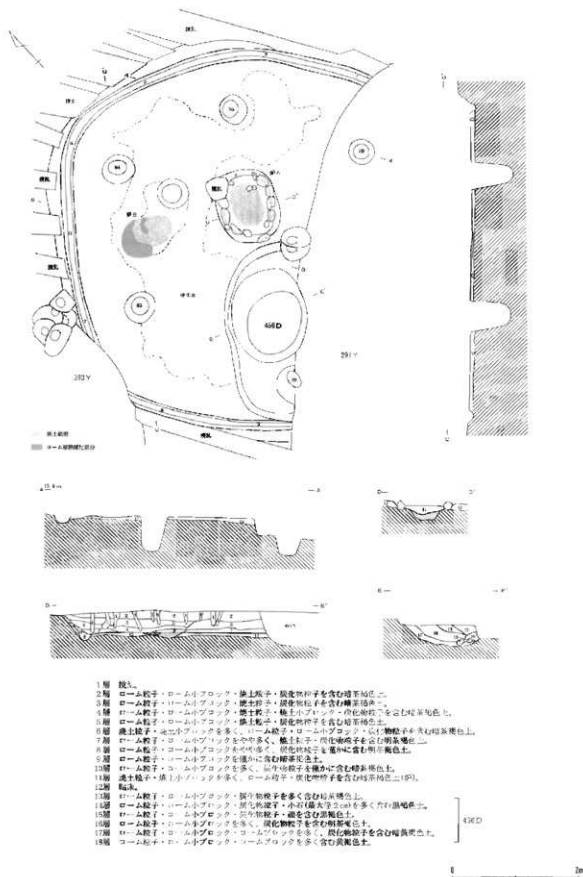
土器 (第37～41図1～84)

14～52は中期前葉から中葉にかけての土器である。

14～16は口縁部が「く」字状に短く内屈する土器で、口縁部外面には結節沈線による文様が施文される。14・15は内外面赤彩が施される。17は隆帯の上に横位集合沈線と曲線的な文様が施文され、隆帯下端に結節沈線が加えられる。18は無地に横位沈線文が施文される土器である。

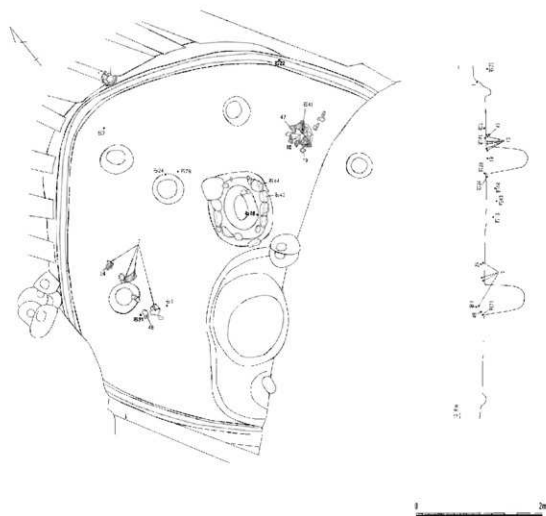
19は口縁部文様帯には隆帯により区画された楕円区画内に結節沈線による文様が施文される。隆帯の一部には刻み加えられる。20は口縁部に刻みをもつ半円形状の突起が付き、口縁部直下や突起内側に沿って半載竹管による結節沈線文が施文される。21は山形状の突起部分で、外面には器形に沿って半載竹管による結節沈線文が施文される。22は底部破片で、隆帯による1本の懸垂文が見られる土器で、懸垂文の下端には押捺が加えられている。19～22の胎土にはいずれも石英・雲母類が多く含まれる。

23・24は口縁部に貼られた突起部分の破片で、23はやや複雑に貼られた隆帯は装飾的で、橋状突起を思わせる。内産にも楕円形の透かしが穿たれている。24は螺旋状の突起で、内側は中空である。25は山形状を呈した口縁部の口唇部外面に連続爪形文が加えられる。26は隆帯に沿って幅広の連続爪形文が施文される。27は口縁部には渦巻きを基調とした刻みをもつ小突起が見られ、その下方には沈線により区画された文様帯をもつ。区画内の文様は小門形文に半載竹管を刺突させた半円形文と短沈線により連続爪形文風に表現した文様を組み合わせて構成されている。28は口縁部に無文帯をもち、その下方は3本



- 1層 瓦葺。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 6層 炭土粒子・ローム小ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロック、炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を多く含む暗褐色土。
- 9層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、粘土粒子を多く含む暗褐色土。
- 11層 炭土粒子・粘土小ブロックを多く、ローム粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 12層 瓦葺。
- 13層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭土粒子を多く含む暗褐色土。
- 14層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭土粒子を多く含む暗褐色土。
- 15層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭土粒子・炭を含む暗褐色土。
- 16層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 17層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く、炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 18層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土。

第35図 134号住居跡・456号土坑 (1/60)



第36図 134乃住店跡遺物出土状態 (1/60)

の沈線で弧文が描かれ、その区画内には連続刺突文による擬縄文が充填されている。29は口縁部に連続爪形文を伴う渦巻状の突起が貼られている。30は大きな渦巻文をもつ口縁部破片である。

31・32は浅鉢と思われる。31は口縁部は無文帯をもち、その下方には横位沈線文と波状文が施文される。32は口縁部文様帯に小門形文や「M」字状文の組み合わせにより、象形的な文様が施文される。

33は口縁部が直立し、口唇端は平坦で、胴部に膨らみをもつ。口縁部は無文で、胴部にはRの撚糸文が施されている。34は口縁部がやや複合口縁状に肥厚し、胴部にはL・R縄文が全面に施される。35・36は刻みをもつ隆帯による渦巻文が施文される。37は「X」字状の隆帯を貼り付け、幅広い結節沈線文が施文される。38は胴部中位に刻みをもつ隆帯を巡らし、その上方に沈線文と連続爪形文の組み合わせによる文様が施文される。39は連続爪形文をもつ隆帯を斜位に貼り付け、それ以外には沈線による重弧文風の文様が施文される。40は胴部と口縁部との境に隆帯を巡らし、そこから連続して隆帯による懸垂文が施文され、隆帯上端には連続爪形文が伴う。胴部文様には刺突文とキャタピラ文風の文様が施文される。41は胴部と口縁部との境に刻みをもつ隆帯を巡らし、胴部文様は半截竹管を刺突した半円形文とキャタピラ文を組み合わせて構成されている。42は曲線的な隆帯の内側に連続爪形文と歯歯状文が施文され

る。43は沈線区画内に連続刺突文が充填される。44は三角形区画内にキャクピラ文と三叉文が施文される。45は沈線表現により連続爪形文をもつジグザク文と半截竹筥を刺突した半円形文が施文される。46・47は沈線により区画された内部に短沈線文が充填される。48は胴部と口縁部の境に隆帯を巡らし、口縁部文様帯には隆帯による渦巻文、沈線による三叉文、刺突列文が施文される。胴部には地文が施される。無節1縄文であろう。49は縦位の沈線区画内に「X」字状文を施すことにより、さらに三角形区画を構成させ、その区画には二叉文や連続爪形文、短沈線が充填される。50は上方に2本単位による隆帯文を垂下させ突起部を作り、その突起部から斜めをもつ隆帯による胴部懸垂文が施文される。さらに胴部には1本の沈線を巡らし、そこから縦位沈線文をほぼ均等に施し全周させている。51はRL縄文をもつ微隆起線による文様が施文される。

52は底部破片で、腰部付近までRL縄文が施されている。底部には網代痕が残る。

以上、14～18は五頭ヶ台式土器、19～22・52は阿玉台式土器、23～51は勝板台式土器と思われる。特に52の網代痕をもつ土器については、埼玉県ふじみ野市（旧大井町）亀井遺跡の報告（今井・坪田・土本1998）で網代痕をもつものは阿玉台式系という分析成果を参考にした。

1～13・53～84は中期後葉の上器である。

1は現器高16.2cm・口径22.2cm。4単位の小波状口縁を呈し、口縁部には幅広い沈線を主体とした渦巻文と楕円文が施文される。地文はLR縄文で、胴部には磨消懸垂文が配されている。色調は黒褐色を呈し、胎上には砂粒・小石を含む。北壁に接する覆土中（床上14cm）からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/2程度遺存する。

2は現器高25.3cm。1の燃糸文を地文に磨消懸垂文が均等に配されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎上には砂粒・小石を含む。覆土中からの出土で、胴部中位から下半にかけて1/2程度遺存する。

3は現器高22.0cm・推定底径8.0cm。胴部にはRL縄文を地文に3本単位の沈線により懸垂文が施文され、胴部中位には横位沈線文の一部が観察される。懸垂文内は僅かに磨消されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎上には茶褐色粒子・砂粒を含む。覆土中からの出土で、胴部中位以下を2/3程度遺存する。

4は現器高13.1cm・推定口径42.8cm。浅鉢で、底部から体部にかけて大きく開く器形である。口縁部は内湾し、口唇部は外面に粘土が貼付けられ、鐮状口縁を呈する。全面無文であるが、内面に赤彩が施されているものと思われる。色調は淡茶褐色を基調とし、胎上には黄褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。覆土中からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/4程度遺存する。

5は現器高15.3cm・推定口径33.0cm。浅鉢で、体部上半に膨らみをもち、口縁部は直立する。口縁部は外面に粘土糊を貼り付け肥厚させ、口唇部は半坦である。色調は暗茶褐色を呈し、胎上には砂粒をやや多く、小石を含む。覆土中からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/6程度である。

6は現器高16.3cm・口径27.2cm。口縁部から胴部下半にかけて内湾する器形で、鉢タイプであろう。口唇部は肥厚している。全面無文であるが、部分的に赤色塗料の付着が観察されることから、内外面に赤彩が施されているものと思われる。色調は暗茶褐色を呈し、胎上には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む、金雲母を僅かに含む。覆土中からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/6程度遺存する。

7は現器高21.5cm。浅鉢で、体部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲する器形である。口縁部と体部との境には鐮状に隆帯が貼られている。口縁部は渦巻文を伴う隆帯を基本に沈線が併用された区画文が施文され、把手と思われる一部が残存している。区画文内の地文はRL縄文で、体部は無文である。色

調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。南西柱穴付近の床面上及び覆土中(床土9cm)からやや散在的に出土し、遺存度は1/4程である。

8は現器高9.3cm・推定口径34.2cm。口縁部文様は沈線による重弧文が施文される。また重弧文との境には狭い間隔内に重弧文を埋め込み、その下部には双渦文風の文様が描かれている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。覆土中からの出土で、口縁部から頸部にかけて1/5程遺存する。

9は現器高19.3cm・推定底径8.5cm。胴部中に3本単位の横位沈線文を巡らし、そこから懸垂文が施文される。懸垂文は1本単位の蛇行文と3本単位の直線文が交互に配置される。地文はR L R縄文である。覆土中からの出土で、胴部中部から底部にかけて1/2程遺存する。

10は現器高26.2cm・口径26.4cm。胴部中に3本単位の横位沈線文を巡らし、上下段を区分し、上段には3本単位の沈線による連弧文を1段とその直下に円形文あるいは重弧文が施文される。地文は条線である。北東壁近くの床面上からの出土で、底部を除き4/5程遺存する。

11は現器高24.2cm・口径23.0cm。口縁部直下と胴部中に横位沈線文を巡らし、上下段を区分し、それぞれの段には1段の連弧文が施文される。横位沈線文と連弧文は3本単位の沈線を基本とし、地文は条線である。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。覆土中からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/2程遺存する。

12は現器高8.6cm・推定口径22.6cm。小波状口縁を呈し、口縁部直下に2本の横位沈線文を巡らし、口縁部と胴部の境には2本の連弧文が施文される。地文はL R縄文である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。覆土中からの出土で、口縁部から胴部中部にかけて1/4程遺存する。

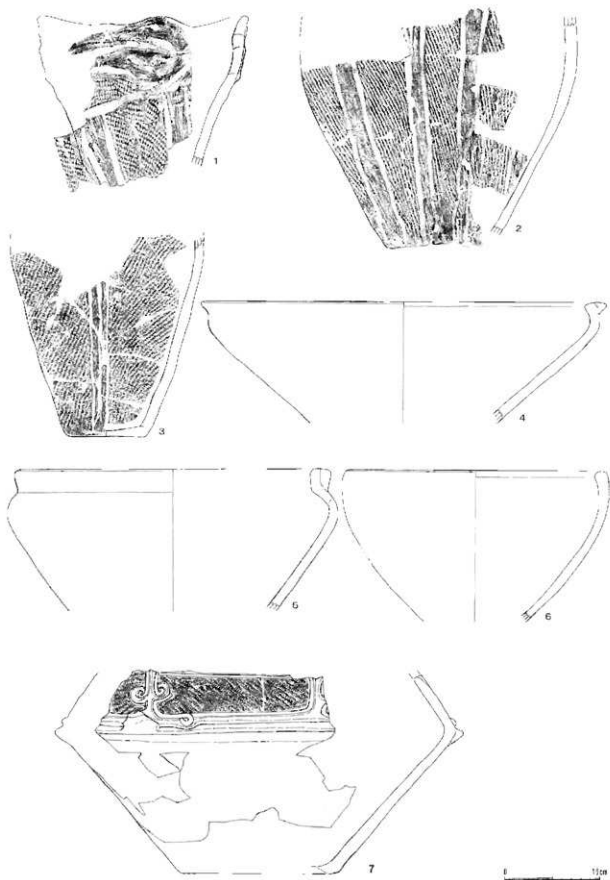
13は器台の破片である。現器高2.8cm・上面推定径17.4cm。上面は平坦で、円形を呈する。胎台部は剥落しているが、10cm程の幅があった痕跡が観察される。色調は全体に暗赤褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内外面に赤彩が施されていると思われる。覆土中からの出土である。

53は口縁部に隆帯による文様を施文し、区画文にはRの燃糸文が施される。54は口縁部に2本単位の隆帯によるクランク文状の文様と小円形の貼付文が施文される。地文はLの燃糸文である。55は小波状口縁を呈し、2本単位の横位沈線文を口縁部直下とその下方に巡らし、波頂部には燃糸文が配置される。地文には縄文の施されるが、原体は不明である。56は幅狭の口縁部文様帯をもち、以下は無文である。文様は下端に隆帯を貼り、区画内にはR L縄文が施される。57は隆沈線による渦巻文と区画文が施される。区画内にはR L縄文が施される。

58は胴部に巻流懸垂文が施文され、地文はL R L縄文である。59・60は地文に複筋縄文が施される。59はL R L縄文である。60はL R L縄文で、沈線による懸垂文の一部が見られる。

61・62は無文地に曲線的な沈線文が施文される。

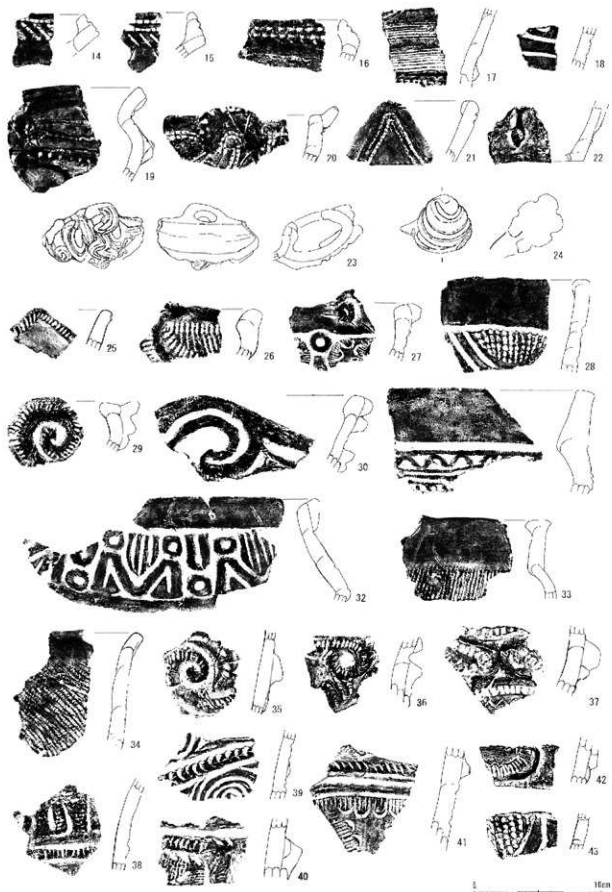
63は口縁部にLの燃糸文が施文される。64は口縁部と胴部の境に隆帯による1本の波状文を巡らし、その上方の口縁部には半截竹管による斜位沈線を施し、その上に沈線と反対向きに隆帯による斜位の貼り付けを行い、格子目状に文様を構成させている。65は胴部に大粒のLの燃糸文が施される。66はLの燃糸文を地文に隆帯による懸垂文が施文される。懸垂文は隆帯による2本単位の直線文と1本単位の蛇行文が交互に配されている。67は太沈線を絞杉状に施し地文とし、1本の隆帯による懸垂文が施文される。68・69は半截竹管による条線文を地文に隆帯による蛇行する懸垂文が施文される。70は半截竹管による半截定線による文様が施文される。71は大型破片で、口縁部と胴部の境に1本の隆帯を巡らし、そ



第37図 134号住居跡出土遺物1 (1/4)



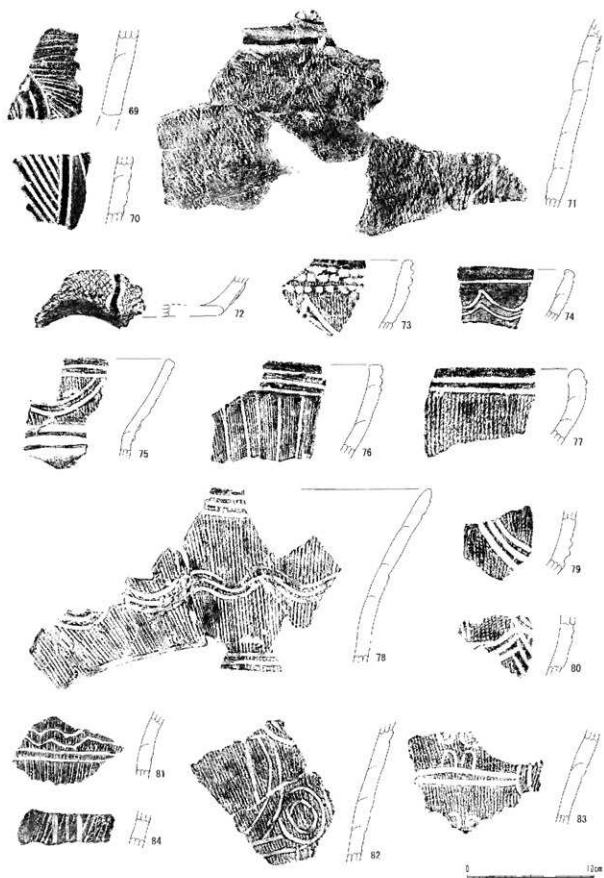
第38図 134号住居跡出土遺物2 (1/4)



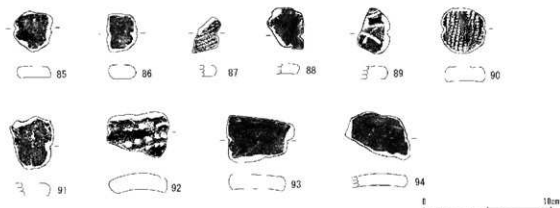
第39图 134号住居跡出土遺物3 (1/3)



第40図 134号住居跡出土遺物4 (1/3)



第41図 134号住居跡出土遺物5 (1/3)



第42図 134号住居跡出土遺物 6 (1/3)

の下方の洞部には地文のLの撚糸文が施される。72は底部破片で、R L縄文を地文に1本の懸垂文が施される。

73~75は口縁部直下に横位沈線文を巡らし、その下方に連弧文が施文される土器で、73は口縁部直下に凹形刺突文を伴う3本の横位沈線文を巡らし、その下方に条線文を地文に連弧文が施文される。74は無文地である。75は口縁部と胴部の境に微隆起帯を2本巡らしている。地文は条線文である。

76は口縁部直下に3本の横位沈線文を巡らし、その下方に縦位条線文が施される。条線文は左回りに新しくなっており、1単位毎に沈線文を伴い、常に左側に沈線文が位置している。77は口縁部直下に2本の横位沈線文を巡らし、その下方にLの撚糸文が施される。78は口縁部から胴部にかけての大型破片である。口縁部は波状凹縁を呈している。口縁部直下と胴部に横位沈線文を巡らし、口縁部には波状文に変化した連弧文が施文される。沈線はすべて3本単位で、地文は条線文である。79・80は連弧文が施文される。地文は79がLの撚糸文、80が条線文である。81は条線文を地文に波状文と横位沈線文が施文される。沈線は浅く、弱い感じがする表現である。82は条線文を地文に連弧文と横位沈線文、そして連弧文の下方に凹形文が施文される。83はLの撚糸文を地文に横位沈線文と縦位2列の「口」字状の文様が施文される。84はLの撚糸文を地文に3本の沈線による懸垂文が施文される。

以上、1~7・9・53~62は加曾利B式土器、8・63~72は曾利式土器、10~12・73~84は連弧文系土器と思われるが、65・66・72は加曾利B式土器であるかもしれない。また、61・62については帰属不明とした方がよいであろうか。

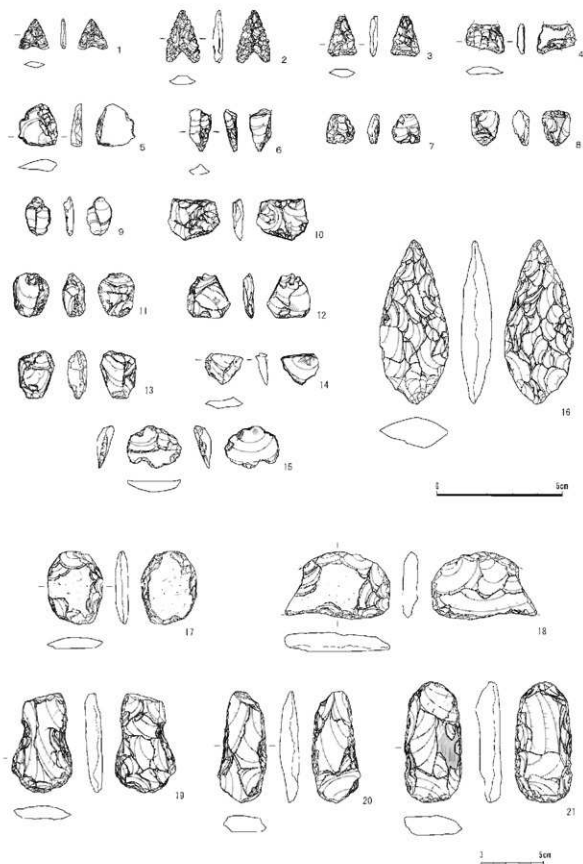
土製品 (第42図85~94、第3表)

すべて土器である。

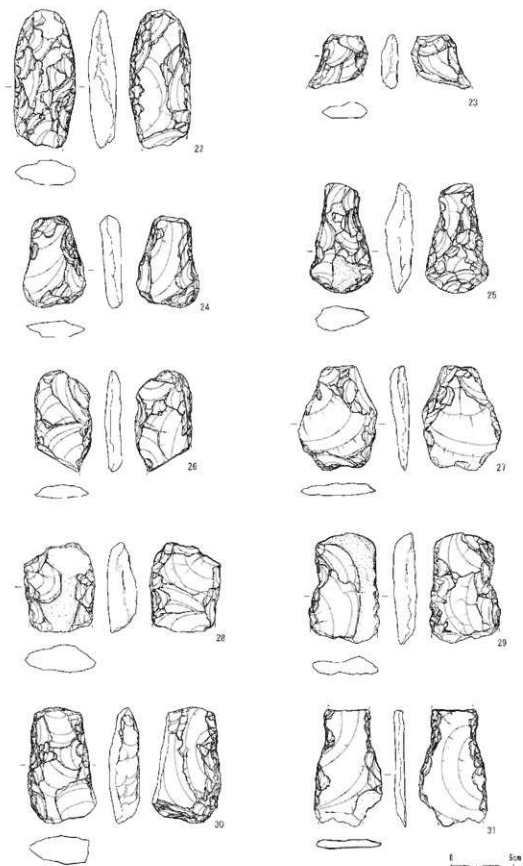
石器 (第43~46区1~44、第4表)

1~3は石縁である。1は黒曜石製であり、右側部を欠損している。比較的小形の凹基縁であり、挟りは浅い。1字に調整を施している。2はチャート製の凹基縁である。挟りはやや深い。調整は粗く、縁辺は鋸歯状を呈している。3は黒曜石製の平基である。先端を欠損している。先端部の調整が粗く、未製品の可能性も窺える。

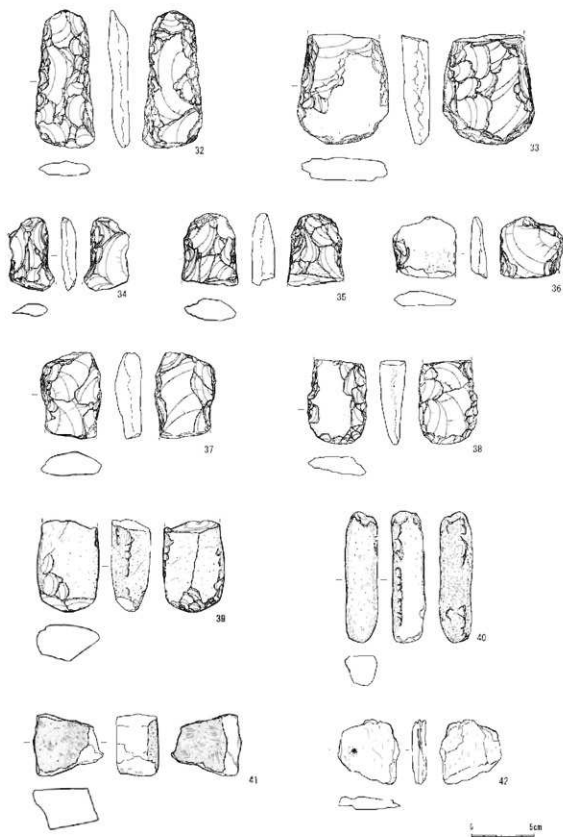
4・5は黒曜石製の石縁未製品である。4は先端と左脚部を欠損している。表面右側縁には素材面が



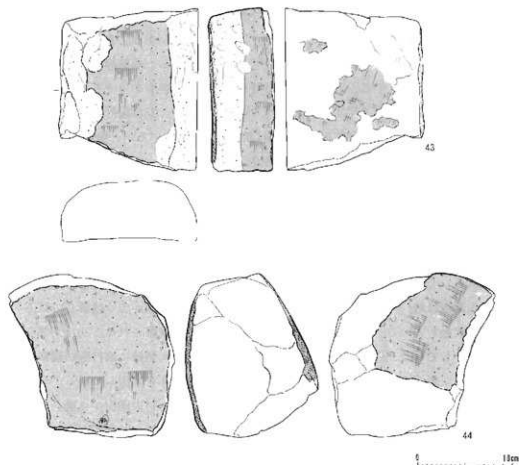
第43图 134与住屋跡山土石器1 (2/3・1/3)



第44図 134号住居跡出土石器2 (1/3)



第45図 134号住居跡出土石器3 (1/3)



第46図 134号住居跡片土石器4 (1/4)

見受けられる。素材は縦長剥片と思われる。裏面には原礫面が広く残置している。5は縦長剥片を素材としており、打点が残置している。右側縁に調整を施している。裏面には原礫面が広く残置している。

6は黒曜石製の石錐であり、刃先および上部を欠損している。左側縁は裏面に、右側縁は表面に連続した調整を施し、刃部を作出している。

7～13は黒曜石製の楔形石器である。8は上下・左右の2方向を使用したと思われ、他は上下両端に剥離痕が認められる。10は縦長剥片を素材としており、打面および打点を残置している。11は横長剥片を素材としており、裏面には原礫面が残置している。

14・15は黒曜石製の二次加工のある剥片である。14は小形の横長剥片を素材とし、左側縁に調整を施している。15は横長剥片を素材とし、右側縁から下部・左側縁にかけて調整を施している。基部には抉り状の調整も認められる。表面には原礫面が広く残置する。

16は安山岩製の尖頭器であり、木楔形を呈する。両面調整であり、J字に調整を施している。

17はホルンフェルス製の小形石器である。扁平な小形礫を素材とし、縁辺に調整を施している。表裏面には原礫面が広く残置している。全体的に風化が著しい。

18は砂岩製の横刃であり、左側縁を欠損している。横長剥片を素材とし、端部に調整を施し刃部を作出している。微細剥離痕が見受けられる。基部には剥離および敲打による調整を施している。

19～38は打製石斧である。19は基部を欠損しているが、分銅形を呈すると思われる。刃部には磨減が認められる。20は撥形を呈する。刃部裏面側は使用により剥離していると思われる。両側縁は敲打による調整を施している。表裏面には磨減が認められる。21は短冊形を呈する。表面および右側縁に磨減が認められる。22は刃部を欠損しているが、短冊形を呈すると思われる。両側面には敲打痕が見受けられる。表面には原礫面が残置している。23は刃部を欠損しているが、撥形を呈すると思われる。両側縁には敲打痕が観察される。24は撥形を呈する。全体的に風化が著しい。25は撥形を呈する。両側縁は丁寧な調整を施している。全体的に風化が見られる。26は基部を欠損しているが、撥形を呈すると思われる。比較的、薄身である。27は基部を欠損している。比較的、薄身である。28は刃部を欠損している。両側縁には磨減が見受けられる。表面には原礫面が残置している。29は刃部を欠損しているが、撥形を呈すると思われる。表面には原礫面が残置している。30は撥形を呈する。比較的、厚みがある。右側面は節理面である。31は基部および刃部を欠損しているが、撥形を呈すると思われる。比較的、薄身である。左側縁下部には磨減が認められる。表面には原礫面が残置している。32は撥形を呈する。右側縁には敲打痕が見受けられる。33は基部を欠損しているが、撥形を呈すると思われる。完形はかなり大形であると推定される。両側縁は敲打による調整を施している。表面には原礫面が広く残置している。34は刃部と裏面側で左側縁欠損している。残置している右側縁には敲打痕が観察される。35は刃部を欠損している。扁平礫を素材としており、表裏両面に原礫面が残置している。両側縁に敲打痕が観察される。36は刃部を欠損している。表面には原礫面が広く残置している。37は刃部を欠損している。全体的に風化が著しい。38は基部を欠損している。両側縁に敲打痕が観察される。石材の選択から磨石などの礫石器の転用の可能性が窺えよう。表面には原礫面が広く残置している。24・26・33・37がホルンフェルス製、20・21が凝灰岩製、27が片麻岩製、19が頁岩製、38が閃緑岩製、他は砂岩製である。

39・40は敲石である。39は砂岩製であり、上部を欠損している。下部および両側縁に敲打痕および微細剥離痕が観察される。また表面と左側面には磨耗面が認められる。40は緑色片岩製である。棒状礫を素材としており、断面形は三角形を呈する。上下面および3本の稜線を使用しており、敲打痕および微細剥離痕が観察される。

41は安山岩製の磨石であり、大きく欠損している。表裏面は使用により擦痕および磨耗が顕著に認められる。また、左側面と下面の割れ面も使用しており、磨減が観察される。

42は片岩製の多孔石器であり、欠損している。表面に1ヵ所、凹みが認められる。

43・44は石皿である。43は安山岩製であり、欠損している。表面と右側面に磨耗面が認められる。また、裏面の割れ面も使用しており、磨耗が顕著に観察される。44は閃緑岩製であり、欠損している。表裏両面を使用しており、磨耗および擦痕が認められる。

135号住居跡

遺構 (第47区)

「住居構造」133 J・455 Dに切られる。(平面形) 円形。(規模) 不明×4.40 m。(壁高) 20～30 cmを測り、壁は比較的緩やかに立ち上がる。(壁溝) 確認できなかった。(床面) 住居中央付近に變化した面が確認できた。貼床は10 cm程度の厚さで施されていた。(炉) 133 Jの床面から検出された5 cm程の掘り込みが、本住居の炉の可能性があり、炉体上器と考えられる深鉢の破片が出土した。住居中央よりやや北に偏って位置する。(柱穴) 主柱穴は4本確認された。そのうちの2本は133 Jの貼床下から検出され、南

東のものは重複形態をとる。本住居の床面からの深さ50cm～73cmを測る。(覆土) 3層に分層される。

遺物] 土器・土錘・石器が出土した。

時期] 縄文時代中期後葉(加曾利FⅠ式後葉)。

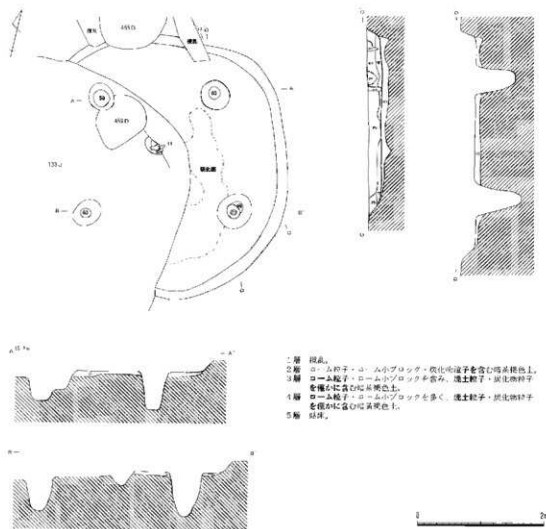
遺物 (第48・49図、第3・4表)

土器 (第48図1～17)

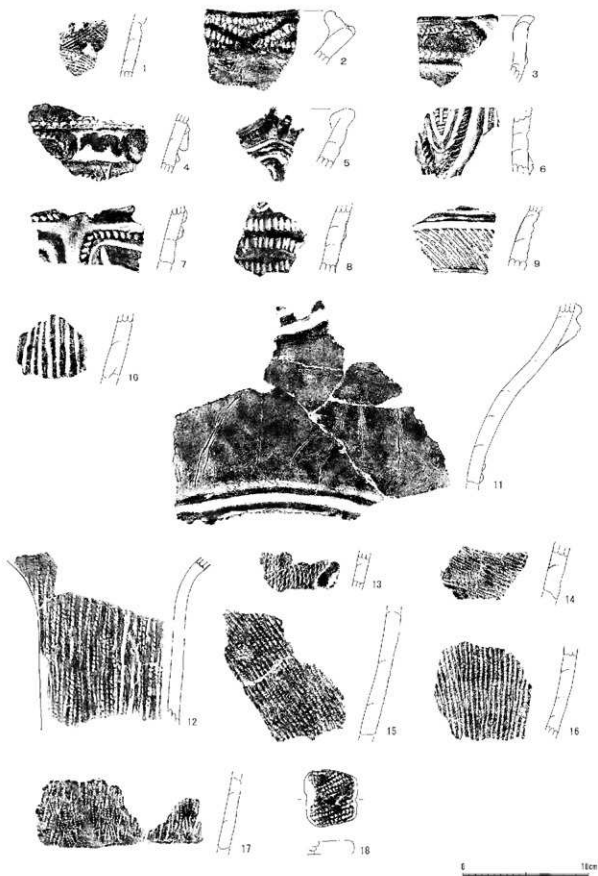
1～10は中期前葉から中葉にかけての土器である。

1は集合沈線を地文に三角陰刻文が施文される。胎土には金雲母・砂粒を多く含む。

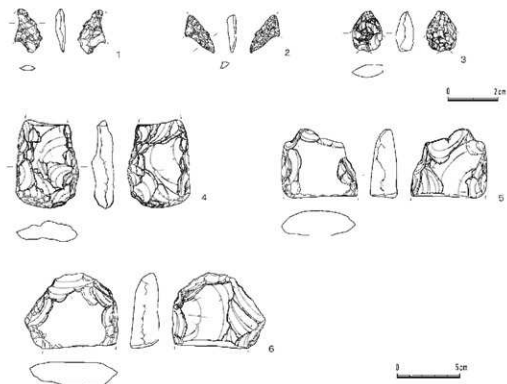
2は口縁部が短く「く」字状に内屈する。文様は隆帯による連続山形文により、三角形の区画文が形成され、その区画に沿って結節沈線文が施文される。3は隆帯により楕円区画文が形成され、その区画内は隆帯に沿って結節沈線文が施文される。胎土には金雲母・砂粒・小石を多く含む。4は上下2本の隆帯を巡らし区画することにより文様帯を形成し、その区画内には隆帯による楕円区画文と「M」字状の貼付文が施文される。楕円区画文の内部は隆帯に沿って結節沈線文が施文される。胎土には金雲母・砂粒を多く含む。



第47図 135号住居跡(1/60)



第48図 135号代冚跡出土遺物(1/3)



第49図 135号住居跡出土石器 (2/3・1/3)

5は波状口縁の波頂部に2条の刻みをもつ貼付文が施され、その直下には沈線文による文様が施文される。肥厚する口縁部は内側に粘土が貼られている。6は刻みをもつ隆帯により「V」字状の区画文が形成されている。その又画の外内には沈線文が施文されているが、区画内の中心にはキャタピラ状の文様が施文されている。7は2本の幅広の隆帯により十字状の文様が施文され、隆帯上の刻みには文様表現での使い分けが行われているようである。下方区画内には沈線文が見られる。8は隆帯裾に沿って幅広の連続爪形文が施文される。上方には沈線による曲線文が見られる。9は上下に横位沈線を巡らし区画文を形成させ、その区画内には斜行沈線が充填する。10は縦位沈線文が施文される。

以上、1は五領ヶ台式土器、2～4は阿玉台式土器、5～10は勝波式土器と思われる。

11～17は中期後葉の土器である。

11は炉に設置された炉体土器と考えられる。頸部に無文帯をもち、口縁部の下端には隆帯による文様が見られる。文様は隆帯の右端がやや右上がりになっているため、渦巻つなぎ弧文になると思われる。胴部との境は2本の隆帯が巡らされ、その下端には2本の隆帯による懸垂文が見られる。

12は甕器高14.0cm。頸部は無文で、胴部には地文のRの撚糸文が施される。また、文様としては把握していないが、部分的に半截竹管による擦痕状の蛇行する懸垂文風の痕跡が観察される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。覆土中からの出土で、頸部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

13・14・16・17はLの撚糸文が地文に施され、13には蛇行する懸垂文が施文される。15はLR縄文が施される。

以上、11～17は加曾利E式土器と考えられるが、13～17は地文部分を中心とした破片であるため、曾利式土器である可能性がある。

土製品 (第48図18、第3表)

土鏡である。

石器 (第49図1～6、第4表)

①・②は黒曜石製の石鏡である。①は右側縁から右脚部にかけて欠損している。調整は粗く、表裏両面に素材面が残置している。②は右脚部である。③は石鏡であり、快りはかなり深い。丁寧に調整を施している。

④は黒曜石製の石鏃未製品である。形状を作出している際に右側縁が破損し、再び調整を行っているものと推定される。

⑤～⑥は砂岩製の打製石斧である。④は基部を欠損しているが、撥形を呈すると思われる。比較的薄身である。⑤・⑥は刃部を欠損している。表面には原礫面が広く残置している。⑤の両側縁につぶれが認められる。

136号住居跡

遺構 (第50図)

[住居構造] 13Mに切られ、457Dを切る。後世の耕作によりかなり壊されている。(平面形) 楕円形。(規模) 5.20×4.82m。(長軸方位) N 20° E。(壁高) 10～35cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。(壁溝) 確認できなかった。(床土) 住居中央付近がよく硬化していた。ほぼ直床である。(か) 石川炉で、住居中央より北に偏って位置する。平面形は楕円形、規模70×58cm・深さ6cmの掘り込みを持つ。炉床の下のロームが7cm程の厚さで被熱により硬化していたが、赤化はしていなかった。(柱穴) 主柱穴と思われる深さ50～65cmのもの4本と、入口に関係すると思われる深さ24・25cmのもの2本が確認できた。

[遺物] 土器・石器が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉(加曾利EⅡ式前葉)。

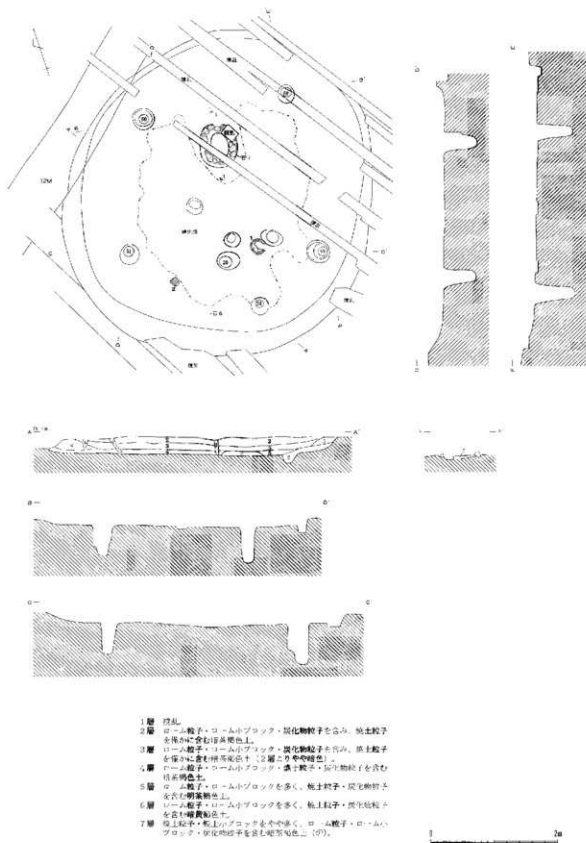
遺物 (第51～53図、第3・4表)

土器 (第51～52図1～28)

3～22は中期中葉の上器である。

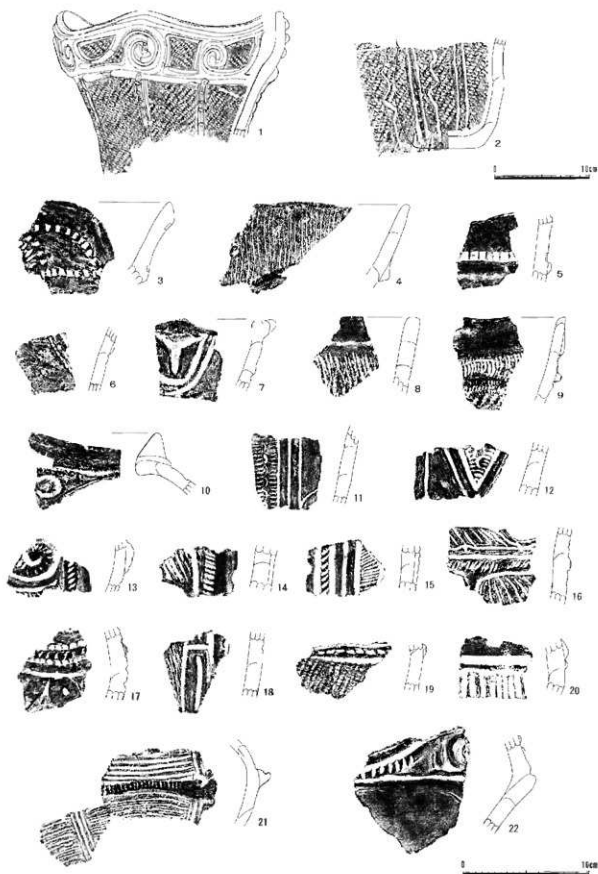
3は波状口縁を呈し、その直下にキョトビラ状の結節沈線文が施文される。4は大きく外傾する口縁部には半截竹管による縦帯平行沈線文が施文され、その下端には降帯の一部が見られる。5は横位隆帯の上端に沿って幅広い結節沈線文を巡らし、その上方には指状の結節沈線文が見られる。6は曲線的な隆帯に沿って半截竹管による結節沈線文が施文される。3～6の胎土には金雲母を多く含む。

7は平坦口縁に突起を1ヶ所もち、その直下に二文文と2本の沈線が施文される。8は出筒形の器形になるうか。口縁部に幅状の無文帯をもち、以下に地文のLの擦余文が施される。9は複合口縁を呈する口縁部に1ヶ所突起をもつ。文様は複合部は無文で、その直下には隆帯が1本見られ、隙間無く連続八形文あるいは刺突文列が施文される。10は口縁部が断面三角形の分厚い作りで、文様は口縁部直下に1本の沈線を巡らし、その下方に沈線による円形文、曲線文が施文される。11・12は半截竹管による懸垂文と刺突文が施文される。13～17は隆帯と沈線文・結節沈線文による文様が施文される。13は渦巻文、

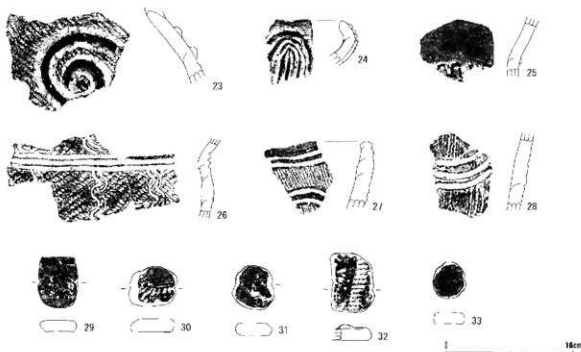


- 1層 打乱。
- 2層 ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を含む、粘土粒子を伴った含む厚黄褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む、粘土粒子を伴った含む暗褐色土（2層よりやや暗色）。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・灰土粒子を含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子・ロームブロックを多く、粘土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、粘土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 7層 灰土粒子・粘土小ブロックを多く、ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を含む暗褐色土（2層）。

第50頁 136号住居跡 (1/60)



第518図 136号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第52図 136号住居跡出土遺物2 (1/3)

17は三叉文と円形文が施文される。18は捩糸文、19は縄文が施される。20は隆帯の直下に竹管による縦位沈線が施される。21は小型品で、胴部中に刻みをもつ1本の隆帯を巡らし、その上下に横位沈線文が施文される。隆帯の1ヶ所には粘土を貼り付け突起部を作り、その上面には沈線による渦巻文が施文される。また、その突起部の位置に合わせて、上下に懸垂文が施文される。

22は浅鉢であろう。口縁部には渦巻文を主とする文様が隆帯と沈線により表出され、隆帯の一部には刻みをもつ。

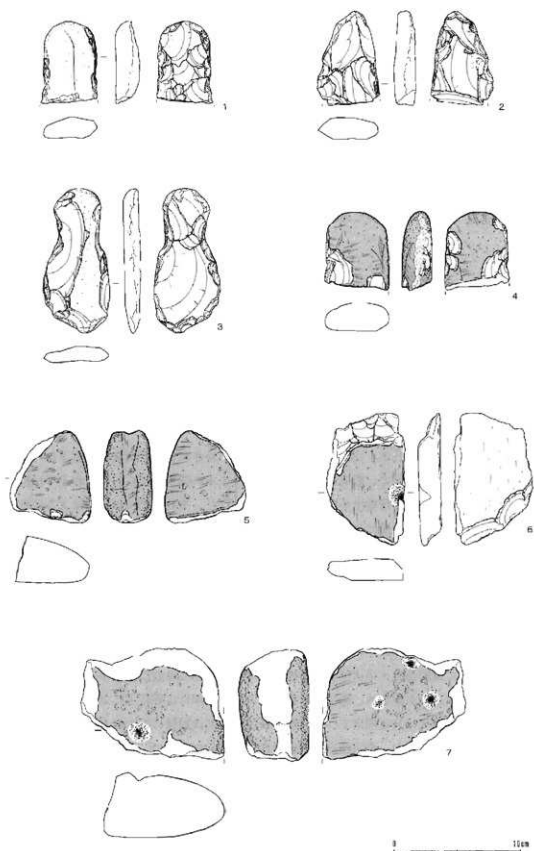
以上、3～6は阿玉台式土器、7～22は勝板式土器と思われる。

1・2・23～28は中期後葉の土器である。

1は現器高17.5cm・口径23.3cm。4単位位の波状口縁を呈する。口縁部文様は隆帯あるいは隆沈線により表現され、口縁部には渦巻文・仲状区画文が施文される。渦巻文は波頂部直下が大きく、波頂部間は一巻き少ない小さなものが配され、単位的な構成である。胴部には隆帯上に刻み目をもつ1本単位の懸垂文が施文される。地文はRL縄文で、口縁部は横位に胴部は縦位に施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。南東柱穴の西側の床面上からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて4/5程度埋存する。

2は現器高11.8cm・底径7.3cm。頸部と胴部の境には横位沈線文が1本見られる。胴部はRL縄文を地文に懸垂文が施文される。懸垂文は2本単位の直線文と1本単位の蛇行文が交互に配されている。色調は内面が黒色、外面が暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。南壁近くの床面上からの出土で、胴部中位以下は完形である。

23は浅鉢であろう。LR縄文を地文に隆帯による大きな渦巻文が施文される。



第53図 136号住居跡出土石器 (1/3)

24は小型の深鉢と思われる。口縁部は内湾し、文様は細い隆帯を重畳文状に貼付けている。25は頸部と胴部の境に波状隆帯を巡らし、頸部は無文である。26は口縁部と胴部の境に半截竹管による平行沈線文を2本巡らし、口縁部から胴部全体に半截竹管による蛇行文を等間隔に垂下させている。地文はRL網文である。

27は口縁部直下に2本の横位沈線文を巡らし、その下方に2本単位による連弧文が施文される。地文はLの擦糸文である。28はLの擦糸文を地文に3本単位による連弧文が施文される。

以上、1・2・23は加曾利E式土器、24～26は曾利式土器、27・28は連弧文系土器と思われる。

土製品 (第52図29～33、第3表)

29～32は上錘、33は上製皿盤である。

石器 (第53図1～7、第4表)

1～3は打製石斧である。1は砂岩製であり、刃部を欠損している。両側縁には使用によると思われる磨痕が見受けられる。表面には原礫面が広く残置している。2はホルンフェルス製であり、刃部を欠損している。両側縁には細かな調整を施している。3は片岩製であり、分銅形を呈する。両側縁には使用によると思われる磨痕が見受けられる。表面には原礫面が広く残置している。比較的、薄身である。

4・5は磨石である。4は砂岩製であり、下部を欠損している。表裏両面に使用による磨耗面が顕著に認められる。左右両面および上面には敲打痕が観察される。5は安山岩製であり、欠損している。表裏面は使用による磨耗が顕著であり、右側面も使用が認められる。また、下面の割れ面においても磨痕が見受けられ、破損後も使用したと考えられる。

6は緑色片岩製の多孔石器であり、欠損している。表面は磨耗が顕著に見受けられる。1ヵ所、凹みが認められる。

7は閃緑岩製の石皿であり、欠損している。表裏両面を使用しており、表面に1ヵ所、裏面に3ヵ所ほど凹みが認められる。敲打痕も観察される。風化が著しい。

(3) 土坑

452号土坑

遺構 (第54図)

〔構造〕西半分が調査区域外であるため、詳細は不明である。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明。(深さ) 25cm。(覆土) 6層に分層される。

〔遺物〕土器小片が2点出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉。

遺物 (第55図1・2)

1は隆帯の上下に沿って、連続爪形文が施文される。勝坂式土器。

2は底部付近の小破片で、地文にLの擦糸文が施される。加曾利E式土器か。

453号土坑

遺構 (第54図)

〔構造〕2基の重複形態をとる。裏側は攪乱により壊されている。(平面形) 不整形。(規模) 不明。(深さ) 北側が38cm、南側が36cm。(覆土) 七層がローム粒子・埴土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶

褐色土、中層がローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む明茶褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕土器小片・土鍾が出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉。

遺物 (第55図3～9、第3表)

土器 (第55図3～8)

3は沈線区画内に刺突列文が施文される。4は隆帯の内側に沿って、連続爪形文が施文される。5はLの捺糸文を地文に沈線による渦巻文が施文される。6は縦位沈線文が施文される。

7は口縁部直下に隆沈線を巡らし、その下方にRの捺糸文が施される。8は地文の条線文が施される。

以上、3～6は勝坂式土器、7・8は加曾利E式土器であろう。

土製品 (第55図9、第3表)

土鍾である。

454号土坑

遺構 (第54図)

〔構造〕上層は攪乱によりかなり壊されている。(平面形)ほぼ円形か。(規模)径68cm。(深さ)42cm。(覆土)3層に分層される。

〔遺物〕土器小片が僅かに出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉。

遺物 (第55図10～12)

10は把手部分の破片である。文様は沈線文、三叉文が施文され、全体にキョクピラ文状の刻みが充填されている。把手下端には刻みをもつ隆帯が垂下している。11は口縁部直下に縦位沈線文が施文される。

12は口縁部に縦位沈線文が施文される。

以上、10・11は勝坂式土器、12は曾利式土器であろう。

455号土坑

遺構 (第54図)

〔構造〕135Jを切る。(平面形)不整形。(規模)112×110cm。(長軸方位)N-30°-W。(深さ)50cm。(覆土)6層に分層される。

〔遺物〕土器片・土鍾・石器が出土した。

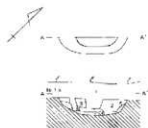
〔時期〕縄文時代中期後葉。

遺物 (第55図13～26、第3・4表)

土器 (第55図13～22)

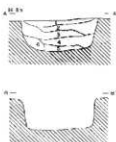
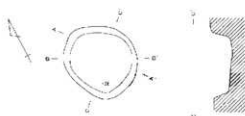
13は口縁部直下に結節沈線文による鋸歯状文が施文される。胎土に金雲母・砂粒を多く含む。14は無節R線文を地文に沈線による鋸歯状文と直線文が施文される。胎土には金雲母を僅かに含む。

15は縦位沈線文を地文に2本の隆帯を基本とする大きな渦巻文が施文される。16は刻みをもつ曲線の隆帯が垂下し、区画内は縦位沈線文が充填される。



- 1層 表土及び腐乱。
- 2層 ローム粒子・粘土粒子・炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土（厚さ約0.5m程度）。
- 3層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 4層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土（2層よりやや厚い）。
- 5層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土（2層よりやや厚い）。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土（2層よりやや厚い）。
- 7層 ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。

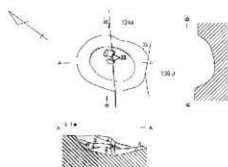
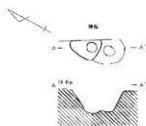
452号土坑



- 1層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土（1・2・4層より厚い）。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。

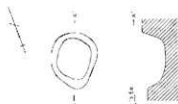
455号土坑

453号土坑



- 1層 腐乱。
- 2層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 3層 ローム粒子・粘土粒子・炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 4層 ローム粒子・粘土粒子・炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。
- 6層 ローム粒子・粘土粒子・炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土。

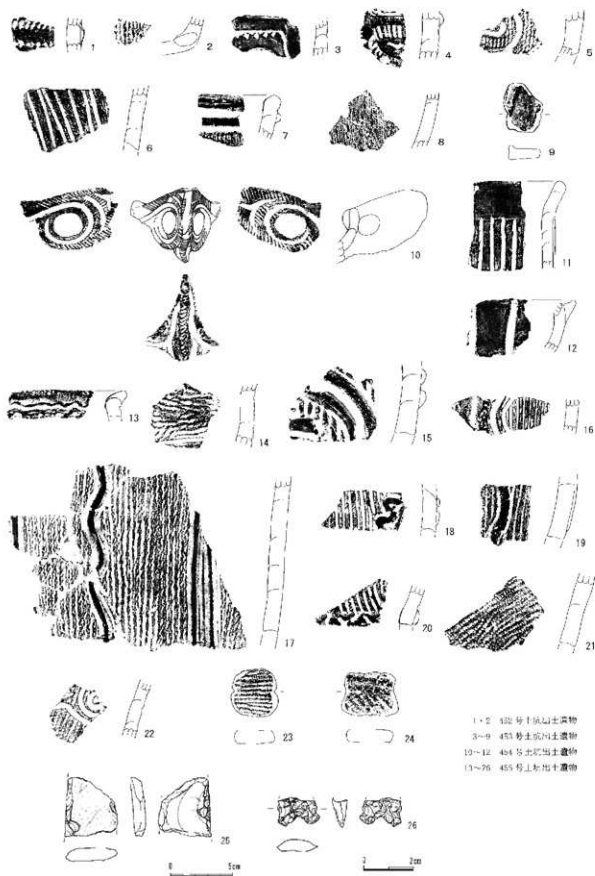
457号土坑



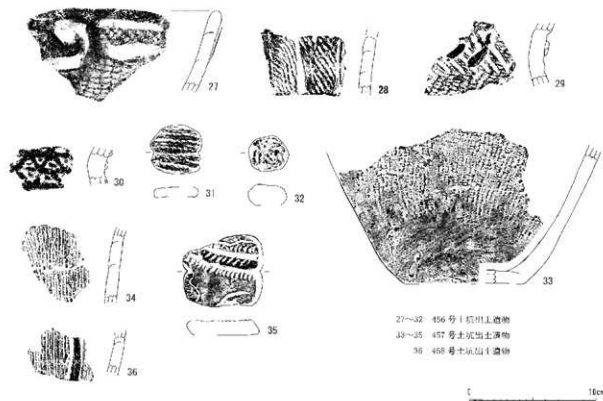
459号土坑

1 2m

第34図 土坑 (1/60)



第55図 土坑出土遺物1 (1/3・2/3)



27~32 456号土坑出土遺物
 33~35 457号土坑出土遺物
 36 458号土坑出土遺物

第56区 土坑出土遺物 2 (1/3)

17は胴部中位の大きな破片である。1.の撚糸文を地文に懸垂文が施文される。懸垂文は2本単位の直線文と1本単位の短行文が交互に配されている。18・19は縦位沈線文を地文に降帯文による懸垂文が施文される。20は口縁部と胴部の境に「ハ」字状の連続した刻みをもつ横位降帯文を巡らし、口縁部には重弧文が施文される。

21は全面に地文のR L縞文が施される。

22はLの撚糸文を地文に同心円文や連弧文状の文様が施文される。

以上、13・14は阿玉台式土器、15・16は勝坂式土器、17~20は管利式土器、21は加曾利F式土器、22は連弧文系土器であろう。

土製品 (第55区23・24、第3表)

土甕である。

石器 (第55区25・26、第4表)

25は凝灰岩製の打製石斧であり、基部および刃部を欠損している。比較的薄身である。表面には原礫面が広く残置している。

26は黒曜石製の石鏃であり、先端を欠損している。凹基鏃である。調整は粗く思われる。

456号土坑

遺構 (第35区)

〔構造〕 291 Yに切られ、134 Jを切る。外側が一段浅いテラス状になっている。(平面形) 楕円形。(規模) 外側が286×不明cm・深さ7～10cm。内側が152×90cm・深さ約40cm。(長軸方位) N 38°-E。(覆土) 6層に分層される。

〔遺物〕 土器小片・上鉢・土製円盤が僅かに出土した。

〔時期〕 縄文時代中期後葉。

〔所見〕 朽木痕の可能性がある。

遺物 (第56図27～32、第3表)

土器 (第56図27～30)

27は口縁部破片で、R L縄文を地文に太沈線による渦巻文と区画文が施される。28は無彫 L縄文を地文に沈線による懸垂文が施される。

29はR L縄文を地文に斜位の沈線文と隆帯により格子日文を構成し、その上方に波状文を施文している。30は頸部に隆帯による波状文が2段見られる。

以上、27・28は加曽利E式土器、29・30は曾利式土器であろう。

土製品 (第56図31・32、第3表)

31は上鉢、32は土製円盤であろう。

457号土坑

遺構 (第54図)

〔構造〕 13Mと136 Jに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 115×86cm。(長軸方位) N 17°-W。(深さ) 約30cm。(覆土) 5層に分層される。

〔遺物〕 土器片・上鉢が僅かに出土した。

〔時期〕 縄文時代中期後葉。

遺物 (第56図33～35、第3表)

土器 (第56図33～34)

33は現器高11.2cm・推定底径9.5cm。色調は内面が黒色、外面が暗赤褐色を呈し、胎上には砂粒を含む。全体に地文のR L縄文が施される。

34は地文に懸垂文を施しているが、条線のように引いた痕跡が観察される。

以上、33・34は加曽利E式土器であろう。

土製品 (第56図35、第3表)

土錘である。

458号土坑

遺構

〔構造〕 大部分が後世の耕作により壊されていたため、上端はごく一部しか確認できなかった。(平面形) 楕円形。(規模) 116×不明cm。(深さ) 約30cm。(覆土) 上層が焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕 土器小片が1点出土した。

() は現存否

標記番号	種類	遺構名	長さ	幅	厚さ	数量	色調	土器形式	特 徴
第1区44	土師	35.1	4.4	2.5	1.0	182	淡茶褐色	加曽利E式	R.I.縄文/欠損あり
第1区45	土師	35.1	4.5	(3.9)	1.7	42.8	淡茶褐色	加曽利E式	浅鉢/湯呑文/欠損あり
第1区46	土師	35.1	6.1	2.8	0.9	11.8	内面:黒色 外面:茶褐色	不明	浅鉢?/欠損あり
第1区47	土師	35.1	5.0	3.2	1.0	19.4	栗褐色	不明	
第1区48	土師	35.1	4.1	2.9	1.2	19.8	内面:黒色 外面:茶褐色	加曽利E式	L.R.縄文
第1区49	土師	35.1	3.6	3.6	1.1	18.2	栗褐色	羅紋式	連続爪形文
第1区50	土師	35.1	3.3	2.9	0.9	11.8	栗褐色	不明	無文
第1区51	土師	35.1	(4.1)	2.5	1.0	16.8	内面:黒色 外面:栗褐色	不明	茶室1本/欠損あり
第1区52	土師	88.1	3.6	3.5	0.7	9.2	栗褐色	不明	無文
第1区53	土師	88.1	4.1	3.4	1.2	18.6	茶褐色	加曽利E式	R.I.縄文
第1区54	土師	88.1	5.3	3.2	1.2	26.0	栗褐色	加曽利E式	R.I.縄文に沈線文
第1区55	土師	88.1	8.1	7.3	1.5	106.0	淡茶褐色	加曽利E式	大形器/1個あるといは地層の無文物?
第1区56	土師	88.1	(10.6)	(9.1)	1.5	125.0	栗褐色	加曽利E式	帯内文/玉環欠陥/短文は茶室/2本の帯帯による懸垂文/欠損あり
第1区57	土師	131.1	4.4	3.8	0.9	23.2	淡茶褐色	加曽利E式	R.I.縄文
第1区58	土師	131.1	(3.3)	(3.1)	0.8	8.8	淡茶褐色	不明	無文/欠損あり
第1区59	土師	131.1	(3.2)	(2.4)	0.8	6.8	明赤褐色	不明	無文/欠損あり
第1区60	土師	131.1	4.8	3.9	1.0	55.0	栗褐色	不明	無文/上蓋・片石を多く含む
第1区61	土師	131.1	(3.6)	(3.6)	0.9	24.4	栗褐色	不明	上部に2列の帯を付随あり?/欠損あり
第1区62	土師	131.1	(4.8)	(3.1)	1.0	19.0	栗褐色	羅紋式?	浅鉢?/無文/外面赤彩/欠損あり
第1区63	土師	131.1	4.0	3.4	0.8	15.0	内面:黒色 外面:栗褐色	羅紋式?	無文
第1区64	土師	131.1	4.0	3.4	1.2	19.6	内面:黒色 外面:赤褐色	加曽利E式	Rの掛文/2本脚帯による懸垂文
第1区65	土師	131.1	3.1	3.0	0.9	12.0	茶褐色	加曽利E式	L.I.縄文
第1区66	土師	131.1	3.1	2.9	0.8	9.6	茶褐色	不明	無文/欠陥/石角を多く含む
第1区67	土師	131.1	4.3	2.9	1.2	18.4	内面:栗褐色 外面:茶褐色	不明	無文
第1区68	土師	131.1	3.9	3.4	1.5	21.1	淡茶褐色	不明	浅鉢/口縁部文/内外赤彩
第1区69	土師	131.1	4.2	3.1	1.6	21.6	茶褐色	不明	遺存状態不良で表面摩耗/中継縄文?
第1区70	土師	131.1	4.0	3.2	0.6	13.0	栗褐色	阿玉台式?	Rの掛文/金雲母・砂粒を多く含む
第1区71	土師	131.1	5.4	(3.2)	1.1	18.2	茶褐色	不明	無文/白砂粒を多く含む/欠損あり
第1区72	土師	131.1	4.2	(3.5)	1.2	20.8	茶褐色	羅紋式?	無文/内外赤彩/欠損あり
第1区73	土師	131.1	4.5	3.5	1.2	30.8	茶褐色	不明	上部の帯/角石を含む
第1区74	土師	131.1	3.5	4.1	1.0	23.2	茶褐色	羅紋式?	別列文
第1区75	土師	131.1	5.4	4.8	1.3	40.1	内面:栗褐色 外面:茶褐色	加曽利E式	R.I.縄文
第1区76	土師	131.1	5.3	(5.0)	1.2	39.4	栗褐色	羅紋式?	沈線を主文様/刺突文/欠損あり
第1区77	土師	131.1	6.9	6.0	1.4	73.5	内面:栗褐色 外面:茶褐色	羅紋式?	浅鉢?/無文
第1区78	土師	131.1	5.8	6.0	1.5	58.5	栗褐色	羅紋式?	上部を利用/内四角・砂粒を含む
第1区79	土師	131.1	2.4	2.3	0.8	4.8	茶褐色	羅紋式?	縦文沈線文
第1区80	土師	131.1	3.4	3.0	1.6	16.6	茶褐色	不明	茶室文
第1区81	土師	131.1	3.8	3.5	1.1	15.0	内面:栗褐色 外面:暗栗褐色	加曽利E式	Lの掛文
第1区82	土師	131.1	4.2	3.9	0.9	17.0	茶褐色	阿玉台式?	平行沈線文/金雲母を多く含む
第1区83	土師	131.1	4.7	4.1	1.4	25.2	茶褐色	不明	Lの掛文
第1区84	土師	131.1	4.5	4.2	0.9	19.0	茶褐色	羅紋式?	遺存状態不良で表面不明/連続爪形文?
第1区85	石製片	131.1	3.2	2.3	1.7	3.0	灰褐色	不明	小破片のため詳細不明
第1区86	土師	131.1	3.3	3.1	0.9	16.8	淡茶褐色	阿玉台式?	無文/金雲母を多く含む
第1区87	土師	131.1	3.1	2.4	1.1	10.4	淡色	阿玉台式?	無文/金雲母を多く含む
第1区88	土師	131.1	(2.9)	(2.7)	0.9	5.8	栗褐色	加曽利E式	Lの掛文/欠損あり
第1区89	土師	131.1	(3.3)	(2.9)	0.8	8.8	内面:栗褐色 外面:暗栗褐色	不明	無文/欠陥あり
第1区90	土師	131.1	(3.7)	(3.6)	1.0	9.4	茶褐色	不明	縁部の一筋/欠損あり
第1区91	土師	131.1	3.7	3.5	1.2	17.8	茶褐色	加曽利E式	R.I.縄文
第1区92	土師	131.1	(4.3)	(3.5)	1.0	17.5	茶褐色	不明	無文
第1区93	土師	131.1	4.9	3.7	1.4	24.2	栗褐色	羅紋式?	縁部に沿って暗栗色文
第1区94	土師	131.1	4.4	3.8	1.3	28.4	明赤褐色	羅紋式?	白線部縦文/無文
第1区95	土師	131.1	(3.9)	(3.9)	0.9	25.0	暗栗褐色	不明	無文/金雲母・白色砂粒を含む/欠損あり
第1区96	土師	131.1	4.6	(4.2)	1.2	29.8	内面:栗褐色 外面:暗茶褐色	加曽利E式	L.R.縄文/欠損あり
第1区97	土師	131.1	4.1	3.2	0.9	14.0	淡茶褐色	羅紋式?	口縁部縦文/無文
第1区98	土師	131.1	3.9	3.2	1.1	37.0	茶褐色	阿玉台式?	縁部/縁部沈線文/白色砂粒を多く含む・雲母を含む
第1区99	土師	131.1	3.6	3.4	1.1	22.4	茶褐色	阿玉台式?	無文/金雲母・砂粒を多く含む
第1区100	土師	131.1	3.6	(3.6)	1.3	15.0	茶褐色	不明	縁部に沿って・キタビラ文/欠損あり
第1区101	土師	131.1	3.0	2.7	0.9	8.7	茶褐色	不明	無文/白色砂粒を含む
第1区102	土師	453D	3.5	3.1	1.2	13.4	淡茶褐色	阿玉台式?	1本の縁部/金雲母・白色砂粒を多く含む
第1区103	土師	453D	3.9	3.7	1.1	23.0	茶褐色	加曽利E式	R.I.縄文
第1区104	土師	453D	4.1	3.4	1.1	19.6	暗栗褐色	加曽利E式	表面縦文/R.I.縄文を短文に沈線による懸垂文
第1区105	土師	456D	4.1	4.0	0.8	17.8	暗褐色	加曽利E式	Lの掛文
第1区106	土師	458D	3.1	2.8	1.7	16.0	栗褐色	加曽利E式	表面縦文/Lの掛文
第1区107	土師	497D	6.4	5.5	1.2	62.0	淡褐色	羅紋式	研をもつ縁部/連続爪形文/縁部縦文/白色砂粒を含む

第3表 縄文時代住居跡・土坑出土の土製品・石製品 表

(単位: cm・g)

神岡番号	遺構名	器種	分類	石材	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量
第8回1	35J	石皿	凹基	黒曜石	左側縁から左脚部欠	25.83	12.55	4.56	1.0
第8回2	35c	磨製石片破片	不明	片岩	破片	53.45	22.39	9.68	13.5
第8回3	35J	磨製石斧	乳輪状	凝灰岩	左側縁から刃部欠	137.67	28.83	29.60	141.9
第8回4	35c	打製石斧	分銅	片岩	欠片	96.98	50.84	18.47	204.9
第8回5	35J	打製石斧	短冊	砂岩	完形	115.82	46.71	19.19	154.5
第8回6	35J	打製石斧	短冊	砂岩	基部欠	107.77	38.39	2.88	05.1
第8回7	35J	打製石斧	短冊	頁岩	基部欠	73.55	45.72	14.77	60.3
第8回8	35J	打製石斧	楕	ホルンフェルス	基部・刃部欠	62.53	36.33	19.54	86.7
第8回9	35J	打製石斧	楕	砂岩	刃部欠	71.03	49.70	19.98	61.2
第8回10	35J	打製石斧	不明	ホルンフェルス	刃部欠	66.83	43.23	18.88	74.9
第8回11	35J	打製石斧	不明	ホルンフェルス	刃部欠	56.96	61.28	17.76	83.7
第8回12	35J	打製石斧	不明	ホルンフェルス	基部欠	61.47	52.87	21.54	96.0
第8回13	35J	打製石斧	不明	頁岩	基部欠	33.56	51.86	10.84	47.2
第8回14	35J	打製石斧	不明	砂岩	完形	81.04	36.62	20.69	108.2
第8回15	35J	打製石斧	不明	凝灰岩	下部欠	80.07	44.37	23.83	145.7
第8回16	35J	打製石斧	不明	片岩	下部欠	100.61	44.17	22.05	133.1
第8回17	35J	磨石	不明	花崗岩	完形	81.33	77.33	59.06	418.3
第8回18	35J	石皿	不明	片岩	下部欠	113.5	120.69	33.00	606.8
第13回1	88J	磨石	不明	黒曜石	完形	45.48	30.78	21.95	37.2
第13回2	88J	打製石斧	不明	砂岩	基部・刃部欠	33.94	49.62	16.52	35.7
第13回3	88J	打製石斧	不明	ホルンフェルス	基部欠	89.32	43.05	24.09	99.7
第13回4	88J	多孔石器	不明	片岩	破片	75.17	41.59	10.84	53.3
第13回5	88J	心皿	不明	片岩	欠損	96.40	169.02	31.39	730.9
第16回1	131J	石皿	凹基	黒曜石	先端から左脚部欠	18.12	9.55	4.17	0.5
第16回2	131J	刃部1のある割片	不明	黒曜石	右側縁欠	34.21	16.86	6.62	3.8
第16回3	131J	打製石斧	不明	砂岩	刃部欠	54.68	43.94	16.19	65.9
第16回4	131J	磨石	不明	ホルンフェルス	完形	85.64	77.04	27.50	232.0
第16回5	131J	磨石	不明	砂岩	下部欠	111.25	85.17	60.96	780.6
第22回1	132J	打製石斧	不明	砂岩	刃部欠	47.69	42.85	13.43	34.3
第22回2	132J	打製石斧	楕	頁岩	基部・刃部欠	81.95	45.90	22.45	99.7
第22回3	132J	打製石斧	楕	頁岩	完形	82.14	56.11	18.49	104.4
第22回4	132J	打製石斧	楕	頁岩	完形	90.21	40.35	13.35	56.0
第22回5	132J	打製石斧	短冊	ホルンフェルス	完形	100.73	44.96	16.72	87.9
第22回6	132J	磨石	不明	砂岩	上部欠	49.72	68.93	29.10	93.8
第22回7	132J	磨石	不明	砂岩	上部欠	107.46	38.76	25.03	136.1
第22回8	132J	磨石	不明	砂岩	完形	104.37	43.39	31.76	239.0
第22回9	132J	磨石	不明	砂岩	完形	135.98	55.58	34.68	414.4
第22回10	132J	磨石	不明	砂岩	上下部欠	68.17	55.35	29.07	173.9
第31回1	133J	石皿	凹基	黒曜石	完形	16.67	13.66	3.37	0.6
第31回2	133J	石皿	凹基	黒曜石	先端・左脚部欠	19.88	15.28	3.51	1.0
第31回3	133J	石皿未製品	不明	黒曜石	完形	17.41	13.38	3.47	0.7
第31回4	133J	楕形石器	不明	黒曜石	完形	15.12	9.57	4.73	0.8
第31回5	133J	楕形石器	不明	黒曜石	完形	18.90	13.79	7.35	1.4
第31回6	133J	石皿	不明	黒曜石	完形	23.21	26.17	11.68	4.7
第31回7	133J	割片	不明	黒曜石	完形	25.28	25.68	12.11	6.1
第31回8	133J	円盤状石器	不明	片岩	完形	46.51	40.67	13.04	24.0
第31回9	133J	小形石器	不明	砂岩	上部欠	46.21	31.44	8.03	15.4
第31回10	133J	横刃	不明	片岩	完形	67.96	38.56	13.46	32.8
第31回11	133J	磨製石斧乾用凹石	不明	凝灰岩	欠損	107.09	40.10	32.65	219.3
第31回12	133J	打製石斧	楕	片岩	刃部欠	71.51	40.88	13.47	52.5
第31回13	133J	打製石斧	楕	砂岩	基部欠	51.29	55.19	20.15	59.2
第31回14	133J	打製石斧	楕	砂岩	刃部欠	61.32	46.74	18.99	66.2
第31回15	133J	打製石斧	楕	砂岩	刃部欠	70.89	44.86	19.81	73.5
第32回16	133J	打製石斧	楕	砂岩	基部・刃部欠	84.51	43.19	21.36	87.8
第32回17	133J	打製石斧	楕	砂岩	完形	96.81	41.26	24.20	153.6
第32回18	133J	打製石斧	楕	凝灰岩	刃部欠	91.76	45.27	23.26	125.0
第32回19	133J	打製石斧	不明	砂岩	基部欠	48.42	48.08	34.20	71.5
第32回20	133J	打製石斧	不明	砂岩	基部・刃部欠	50.51	44.83	12.65	37.2
第32回21	133J	打製石斧	不明	砂岩	基部欠	59.06	56.20	13.79	53.1
第32回22	133J	打製石斧	不明	砂岩	刃部・裏面欠	60.25	45.17	16.38	49.7
第32回23	133J	打製石斧	不明	ホルンフェルス	刃部欠	63.14	41.43	19.57	60.0
第32回24	133J	打製石斧	不明	ホルンフェルス	基部欠	67.94	51.42	13.92	70.0
第32回25	133J	スレイバー	不明	ホルンフェルス	完形	102.55	55.45	27.75	167.9
第33回26	133J	磨石	不明	砂岩	下部欠	61.40	55.75	25.14	127.3
第33回27	133J	磨石	不明	砂岩	下部欠	67.34	52.30	26.02	117.5
第33回28	133J	磨石	不明	砂岩	上部欠	99.38	38.86	35.53	217.7

第4表 縄文時代住居跡・土坑出土の石器一覧(1)

(単位: mm・g)

発掘番号	遺構名	器種	分類	石材	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量
第33図29	133J	砥石		砂岩	定形	141.20	51.83	18.06	203.3
第33図30	133J	磨石		砂岩	定形	48.40	22.86	15.91	25.4
第33図31	133J	磨石		砂岩	下部欠	92.01	39.48	36.74	188.5
第33図32	133J	磨石		砂岩	定形	58.85	52.60	35.95	231.2
第33図33	133J	磨石		安山岩	下部欠	70.52	55.87	39.27	252.3
第33図34	133J	石皿破片		閃緑岩	欠損	62.59	43.74	50.21	161.3
第34図35	133J	石皿破片		閃緑岩	欠損	64.84	58.59	36.97	233.1
第34図36	133J	石皿破片		閃緑岩	欠損	69.18	72.05	56.15	244.9
第34図37	133J	石皿		片岩	欠損	88.14	219.00	46.45	1085.2
第34図38	133J	石皿		砂岩	欠損	211.00	116.59	91.20	3314.1
第43図 1	134J	石巻	凹基	黒曜石	右側部欠	11.28	11.06	1.96	0.1
第43図 2	134J	石巻	凹基	チャート	定形	20.79	13.29	3.88	0.8
第43図 3	134J	石巻	凹基	黒曜石	先端欠	16.38	11.72	3.78	0.6
第43図 4	134J	石巻未製品		黒曜石	先端・左側部欠	11.57	15.06	2.72	0.5
第43図 5	134J	石巻未製品		黒曜石	定形	17.09	15.58	4.30	1.1
第43図 6	134J	石巻		黒曜石	刃先・上部欠	17.11	8.66	4.88	0.5
第43図 7	134J	楔形石器		黒曜石	定形	11.88	11.44	4.32	0.5
第43図 8	134J	楔形石器		黒曜石	定形	14.39	11.29	6.22	0.9
第43図 9	134J	楔形石器		黒曜石	定形	15.34	9.75	3.71	0.4
第43図10	134J	楔形石器		黒曜石	定形	16.73	20.43	4.04	1.3
第43図11	134J	楔形石器		黒曜石	定形	17.59	14.33	8.75	2.0
第43図12	134J	楔形石器		黒曜石	定形	18.16	6.72	3.77	1.1
第43図13	134J	楔形石器		黒曜石	定形	19.00	14.91	6.00	1.2
第43図14	134J	R.F		黒曜石	定形	12.41	14.92	4.72	0.4
第43図15	134J	R.F		黒曜石	定形	16.30	21.36	6.10	1.6
第43図16	134J	尖頭器	木彫形	安山岩	定形	65.34	27.07	12.03	19.0
第43図17	134J	小形石器		ホルンフェルス	定形	58.34	43.49	9.74	33.7
第43図18	134J	棒状		砂岩	右側部欠	81.92	53.72	5.53	89.3
第43図19	134J	打製石斧	分級	頁岩	基部欠	79.86	47.58	1.69	53.3
第43図20	134J	打製石斧	短冊	凝灰岩	定形	90.24	38.50	24.12	59.6
第43図21	134J	打製石斧	短冊	凝灰岩	定形	97.96	45.74	9.56	117.6
第44図22	134J	打製石斧	短冊	砂岩	刃部欠	108.81	47.46	21.16	141.9
第44図23	134J	打製石斧	短冊	砂岩	刃部欠	44.76	45.86	13.46	25.4
第44図24	134J	打製石斧	短冊	ホルンフェルス	定形	74.50	49.48	17.03	67.4
第44図25	134J	打製石斧	短冊	ホルンフェルス	定形	88.57	49.72	21.31	84.0
第44図26	134J	打製石斧	短冊	ホルンフェルス	基部欠	79.81	45.98	12.07	59.8
第44図27	134J	打製石斧	短冊	片麻岩	基部欠	81.67	62.12	13.59	73.7
第44図28	134J	打製石斧	短冊	砂岩	基部欠	72.41	55.79	23.03	111.4
第44図29	134J	打製石斧	短冊	砂岩	刃部欠	88.90	55.81	16.83	100.5
第44図30	134J	打製石斧	短冊	砂岩	定形	93.51	52.71	22.92	151.6
第44図31	134J	打製石斧	短冊	砂岩	基部・刃部欠	94.04	52.83	7.23	53.7
第44図32	134J	打製石斧	短冊	砂岩	基部欠	109.74	47.79	15.98	92.1
第45図33	134J	打製石斧	短冊	ホルンフェルス	基部欠	88.42	71.15	19.09	87.7
第45図34	134J	打製石斧	不明	砂岩	右側部から刃部欠	58.22	35.24	10.96	25.3
第45図35	134J	打製石斧	不明	砂岩	基部欠	58.21	44.88	19.45	53.1
第45図36	134J	打製石斧	不明	砂岩	刃部欠	49.34	49.78	11.48	37.1
第45図37	134J	打製石斧	不明	ホルンフェルス	刃部欠	68.85	48.49	20.48	93.5
第45図38	134J	打製石斧	不明	閃緑岩	基部欠	66.32	46.55	20.44	74.8
第45図39	134J	磨石		砂岩	上部欠	73.35	49.42	30.29	147.1
第45図40	134J	砥石		片岩	定形	105.23	28.02	25.43	108.6
第45図41	134J	磨石		安山岩	欠損	50.03	53.33	32.34	126.0
第45図42	134J	多孔石器		片岩	欠損	51.22	47.08	9.59	26.4
第46図43	134J	石皿		安山岩	欠損	172.96	142.67	68.59	2747.3
第46図44	134J	石皿		閃緑岩	欠損	277.32	181.00	128.78	5839.7
第49図 1	135J	石巻	凹基	黒曜石	右側部から右側部欠	17.58	10.78	3.40	0.5
第49図 2	135J	石巻	凹基	黒曜石	先端から左側部欠	17.84	7.32	3.70	0.4
第49図 3	135J	石巻未製品		黒曜石	定形	15.96	11.74	4.86	1.0
第49図 4	135J	打製石斧	不明	砂岩	基部欠	70.04	49.35	16.57	62.5
第49図 5	135J	打製石斧	不明	砂岩	刃部欠	54.45	58.72	21.31	91.8
第49図 6	135J	打製石斧	不明	砂岩	刃部欠	59.52	72.76	21.54	127.7
第50図 1	136J	打製石斧	不明	砂岩	刃部欠	63.32	45.93	16.37	68.4
第50図 2	136J	打製石斧	不明	ホルンフェルス	刃部欠	73.77	48.77	16.87	77.6
第50図 3	136J	打製石斧	分級	片岩	定形	115.59	52.66	32.82	99.0
第50図 4	136J	磨石		砂岩	下部欠	62.94	51.32	23.60	119.9
第50図 5	136J	磨石		安山岩	欠損	73.84	63.91	39.21	263.7
第50図 6	136J	多孔石器		片岩	欠損	105.80	62.48	27.88	172.6
第50図 7	136J	石皿		閃緑岩	欠損	90.76	107.45	53.83	710.5
第55図25	435J	打製石斧	不明	凝灰岩	基部・刃部欠	47.96	43.30	10.92	26.6
第55図26	435J	石巻	凹基	黒曜石	先端欠	11.86	15.89	6.08	0.8

(単位: cm・g)

第4表 縄文時代住居跡・土坑出土の石器一覧(2)

〔時期〕縄文時代中期後葉。

遺物 (第56図36)

36は縦位条線を地文に隆帯による蛇行する懸垂文が施文される。加曾利E式土器であろう。

459号土坑

遺構 (第54区)

〔構造〕133 Jを切ると思われる。(平面形)不整形。(規模)90×72cm。(長軸方位)N-40°-E。(深さ)135 Jの床面からの深さ36cm。(覆土)ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕縄文時代中期後葉か。

(4) 集石

22号集石

遺構 (第57区)

〔構造〕北側は調査区域外である。不明×93cm・深さ15cm程の楕円形と思われる土坑を伴う。(覆土)3層に分層される。

〔遺物〕燧42個・緑泥片岩1個・石器片35点が出土した。

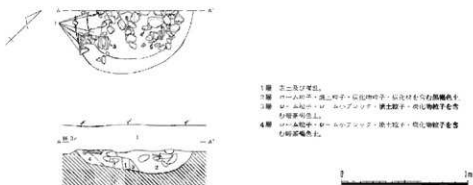
〔時期〕縄文時代中期後葉。

遺物 (第58×)

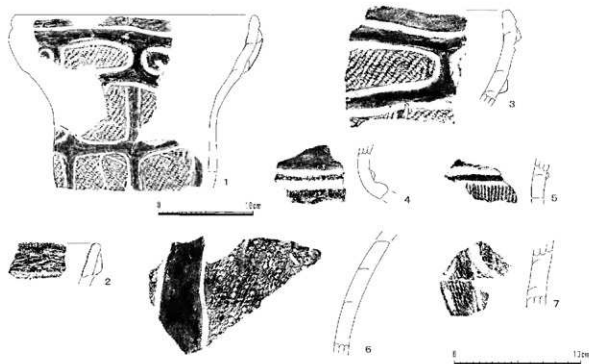
1は現器高17.3cm・推定口径26.0cm。口縁部は隆沈線による渦巻文と楕円文が施文される。胴部は磨消懸垂文が十字に配され、内部には区画文が形成されている。地文はRL縄文である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。南壁寄りの環上中(坑底上10cm)からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて1/5程遺存する。

2は複合口縁状を呈する口縁部小破片で、文様は不鮮明であるが、Rの懸垂文を横方向に施しているものと思われる。複合部下端は半藪竹管による横位沈線が見られる。

3は口縁部は隆沈線により、楕円区画文が施文され、胴部には3本沈線による懸垂文の一部が見られ



第57図 22号集石 (1/30)



第58図 22号集石出土遺物(1/4・1/3)

る。地文はR L縄文である。4は小破片であるが、かなり胴部が膨らむ器形になろうか。頸部に無文帯をもち、胴部との境に降帯を巡らしている。胴部には燃糸文か。5は2本の降帯を巡らし、胴部には地文のLの燃糸文が施される。6は唇消懸垂文が施文される。地文はR L R縄文である。

7はRの燃糸文を地文に沈線により、連弧文状の文様と懸垂文が施文される。

以上、1・3～6は加富利E式土器、7は連弧文系土器であろう。2は五領ヶ台式土器か。

第3節 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の遺構と遺物

(1) 概要

この時期の遺構については、住居跡8軒・竪立柱建築遺構1棟が検出された。

住居跡からは、土器・石器が出土しているが、特に石器については、従来この時期の住居跡出土であっても遺構外出土遺物として扱うことが多かったが、今匠は、基本的に縄文時代の遺物とは分離し、敢えて当該期の遺物として取り扱う試みを行った。今後は、石器の取り扱いについては、十分意識して、時期の判定に努める必要がある。

また、竪立柱建築遺構が1棟検出されている。時期の特定は、遺物が出土していなかったが、柱穴Cの1本が392Yの粘床下から検出されたことにより、392Yの時期である弥生時代後期末葉～古墳時代前期より古い遺構であるということが判明し、当該期の所産のものと考えた。

(2) 住居跡

138号住居跡

遺構 (第59図)

〔住居構造〕南半部は平成8年度の区画整理に伴う調査で、調査済みである。後世の耕作によりかなり壊されている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 5.50×4.84m。(長軸方位) N-57°-W。(壁高) 残りの良い部分で21~27cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) 全周する。上幅18~23cm・下幅4~6cm・深さ3~8cmを測る。(床面) 北コーナー付近と南東壁の近くに硬化した床面が確認できた。貼床が4~10cmの厚さで施されている。(炉) 南半部の調査で確認されている。(柱穴) 主柱穴は4本で本調査ではそのうちの2本が検出された。深さは44・58cmを測る。(貯蔵穴) 南東壁の東コーナー寄りに位置し、平面形は隅丸方形、規模46×44cm・深さ26cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 5層に分層される。東コーナーに祭壇状溝構と思われる赤色の砂利層が検出された。

〔遺物〕 土器・石器が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期末葉~古墳時代前期。

遺物 (第59図、第5表)

土器 (第59図1~6)

高坏形土器 (1)

脚台部小破片である。胎土の色調は黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を僅かに含む。外面は赤彩され、内外面へラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

壺形土器 (2・3)

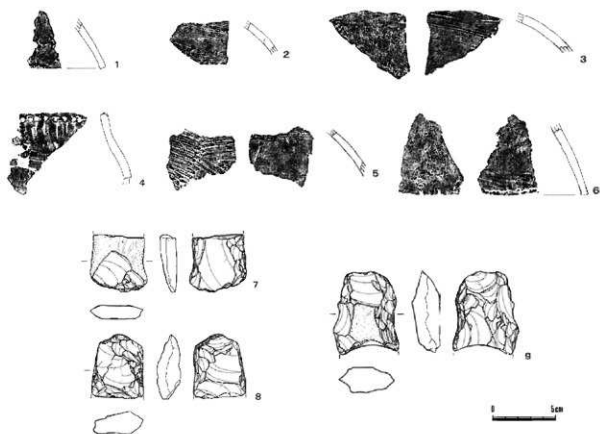
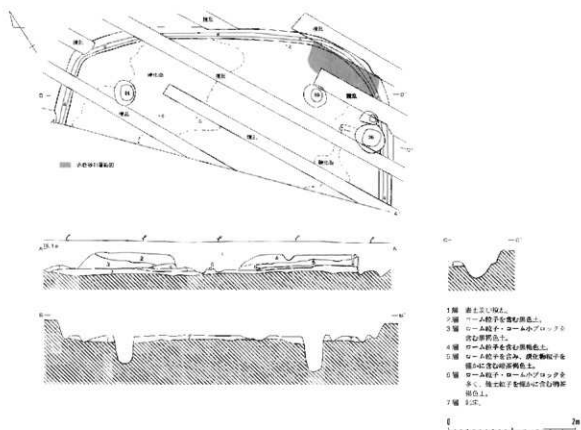
2・3は肩部小破片である。2は色調が暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。内面はへラ磨き調整、外面はハケ目調整が施される。北東壁すぐ近くの床面上からの出土である。3は胎土の色調は黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内外面は赤彩され、内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後へラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

壺形土器 (4~6)

4は口縁部から頸部にかけての小破片で、口縁部の外反は弱く、口唇部外面には刻み目が付される。全体に黒褐色を呈するが、胎土の色調は明褐色を基調とする。胎土には黄褐色粒子を僅かに含む。口縁部内面及び外面はハケ目調整、内面は以下へラナデが施される。覆土中からの出土である。5は胴部上半の小破片で、色調は内面が黄褐色、外面が黒褐色を呈する。胎土には砂粒を僅かに含む。内面はへラナデ、外面はハケ目調整が施される。北西柱穴近くの床面上からの出土である。6は脚台部の破片で、色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を僅かに含む。内面はへラナデ、外面はハケ目調整が施される。中央付近の覆土中(床上15cm)からの出土である。

石器 (第59図7~9、第5表)

7~9は砂岩製の打製石片である。7は基部を欠損している。横長の剥片を素材としている。表面には原隆面が残存している。比較的薄身である。8は刃部を欠損している。左右両側縁には使用によると思われる磨減が認められる。9は刃部を欠損しているが、撥形を呈すると思われる。表面には原隆面が残存している。側縁は細かな調整が施されている。



第59図 138号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)

289号住居跡

遺構 (第60図)

〔住居構造〕本調査は北コーナー付近のみで、それ以外は平成13年度の区画整理に伴う調査により、調査済みである。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 5.84×4.80m。(長軸方位) N 57° E。(壁高) 25～38cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 住居中央付近を除いて良く硬化していた。貼床は5～8cmの厚さで施されていた。(竪) 平成13年度の調査で検出されている。(柱穴) 支柱穴は4本で、本調査では北コーナーの1本が確認された。重複形態をとり、深さ44・54cmを測る。(覆土) 6層に分層される。

〔遺物〕 土器・石器が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺物 (第60図、第5表)

土器 (第60図1～5)

壺形土器 (1・2)

1は複合口縁を呈する口縁部小破片である。文様は内面に端末結節を伴うLR縄文を施し、その後には直径1cm程の円形赤彩文が施文されている。胎土の色調は黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子を多く含む。赤彩は口唇部端部と内面の施文部以下に観察される。内面の赤彩部分である無文部はへら磨き調整、外面の口縁複合部はナデ、以下はハケ目調整が施される。住居中央付近の覆土中(床上15cm)からの出土である。2は単純口縁を呈する口頸部破片で、色調は内面が暗灰褐色、外面が暗黄褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。内外面はへら磨き調整が施されるが、内面にはハケ目痕が僅かに残る。覆土中からの出土である。

甕形土器 (3～5)

3・4は同一個体で、口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部はやや受け口状を呈し、口唇部には刻み目が付される。色調は内面が暗茶褐色、外面は黒色を呈する。胎土には黄褐色粒子を含む。内外面は粗いハケ目調整が施される。3・4ともに北東壁近くの覆土中(床上約6cm)からの出土である。5は頸部小破片で、色調は黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。内外面は粗いハケ目調整が施される。住居中央付近の覆土中(床上12cm)からの出土である。

石器 (第60図6～8、第5表)

6は石製の石鏃であり、先端を欠損している。凹基鏃であり、決りは非常に深い。裏面は素材面が広く残置している。縁辺はやや鋸歯縁状と思われる。

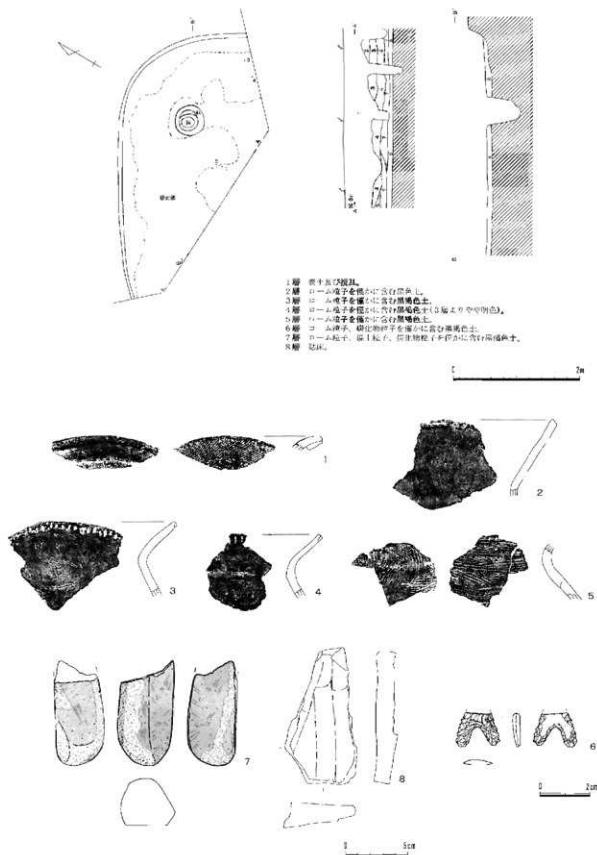
7は砂岩製の磨石である。上部を欠損しており、左側縁は磨理面である。表裏両面は使用による磨耗面が顕著に認められる。両側面には敲打痕が観察される。

8は紙行である。遺存状態は悪く、上面の一部が遺存するが、大部分欠損している。砂岩製である。

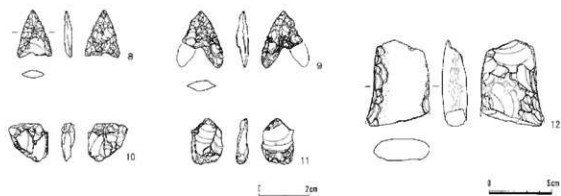
291号住居跡

遺構 (第61図)

〔住居構造〕本調査は北壁付近のみで、大半は平成13年度の区画整理に伴う調査により調査済みである。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 8.30×7.55m。(長軸方位) N 52° E。(壁高) 48～57cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 全周すると思われる。上幅20～26cm・下幅4～8cm・深さ5～10cm



第60図 289号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3・2/3)



第62図 291号住居跡出土遺物？(2/3・1/3)

を測る。(床面) 壁素を除き良く硬化している。貼床は20cm程の厚さで施されていた。(柱穴) 主柱穴は4本で、本調査では西コーナーの1本が検出された。深さ56cmを測る。(覆土) 住居の覆土は43層に、貼床は11層に分層された。

〔遺物〕 土器・石器が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

〔所見〕 床面上から炭化材が多量に検出されていることから、焼失住居と思われる。

〔遺物〕 (第61・62図、第5表)

土器 (第61図1～7)

高環形土器 (1)

1 口縁部から体部にかけての破片で、鉢形土器の可能性もある。文様は口縁部外面にL R縄文を施文している。色調は黒褐色を基調とし、胎土には金雲母・砂粒を含む。不明瞭であるが、内外面の無文部は赤彩されているものと思われる。内面はハケナデ後、ナデ調整、外面無文部はへら磨き調整が施される。貼床中からの出土である。

壺形土器 (2～4)

2 は複合口縁を呈する口縁部小破片で、内面には単節斜縄文による羽状縄文が施文され、外面口唇部下端にはハケ状工具による刻み目が付される。不鮮明であるが、内面を中心に赤色塗料の付着が見られる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。外面はハケ日調整が施される。中央付近の覆土中(床土6cm)からの出土である。3 は幅広い複合口縁を呈する口縁部小破片で、複合部には端末結節を伴う単節斜縄文が上下羽状に1層端部には単節斜縄文が施文される。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はへら磨き調整が施される。北壁寄りの覆土中(床土36cm)からの出土である。4 は胴部上半から下半にかけての破片で、胴部上半には端末結節を伴うL R縄文が施文される。外面無文部は赤彩される。胎土の色調は黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面ヘラナデ、外面はハケ日調整後へら磨き調整が施される。北壁寄りの覆土中(床土8cm)からの出土である。

鉢形土器 (5～7)

5・6 は口縁部小破片で、5 は口縁部が短く屈曲し、口唇端部に刻み目が付される。色調は内面が暗

茶褐色、外面が黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を僅かに含む。外面及び口縁部内面は細かいハケ目調整、内面は以下ヘラナデが施される。覆土中からの出土である。6は大きく外反する器形を呈し、口唇部には刻み目が付される。色調は内面が暗茶褐色、外面が黒色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面は細かいハケ目調整、外面は縦方向の粗いハケ目調整後僅かに横ナデが施される。北壁溝に接する覆土中（床土55cm）からの出土である。391Y-4と同一体と考えられる。7は胴部中位から下半にかけての破片で、胎土の色調は暗黄褐色を基調とするが、全体に黒く煤けている。胎土には砂粒を僅かに含む。内外面は全体にナデが施され、その後粗いヘラ磨き調整が施される。北コーナー近くの覆土中（床土13cm）からの出土である。

石器（第62図8～12、第5表）

8・9は石鏃である。8はチャート製である。平基であるが、表面の基部には素材面が広く残置しており、未製の可能性が窺えよう。9は黒曜石製であり、左脚部を欠損している。円基であり、抉りはかなり深い。全体に割裂は粗く思われ、比較的基厚である。

10・11は黒曜石製の楔形石器である。上下両端に剥離痕が認められる。

12は砂岩製の打裂石斧であり、刃部を欠損している。表面には原礫面が広く残置している。左右両側縁には敲打による割裂が認められる。裏面には使用によると思われるつぶれ痕が見受けられる。

391号住居跡

遺構（第63図）

〔住居構造〕確認前と床面がほぼ同じレベルで、壁は確認できなかった。（平面形）隅丸方形。（規模）3.25×2.82m。（長軸方位）N-65° E。（床面）良く硬化しており、住居中央部分は少し低くなっていた。貼床は30～40cmと厚く、11層に分層された。（柱穴）検出されなかった。（覆土）ほとんど確認できなかったが、残っていた部分では、ローム粒子を僅かに含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕土器・石器が出土した。

〔時期〕弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺物（第63図、第5表）

土器（第63図1～6）

すべて床面上からの出土である。

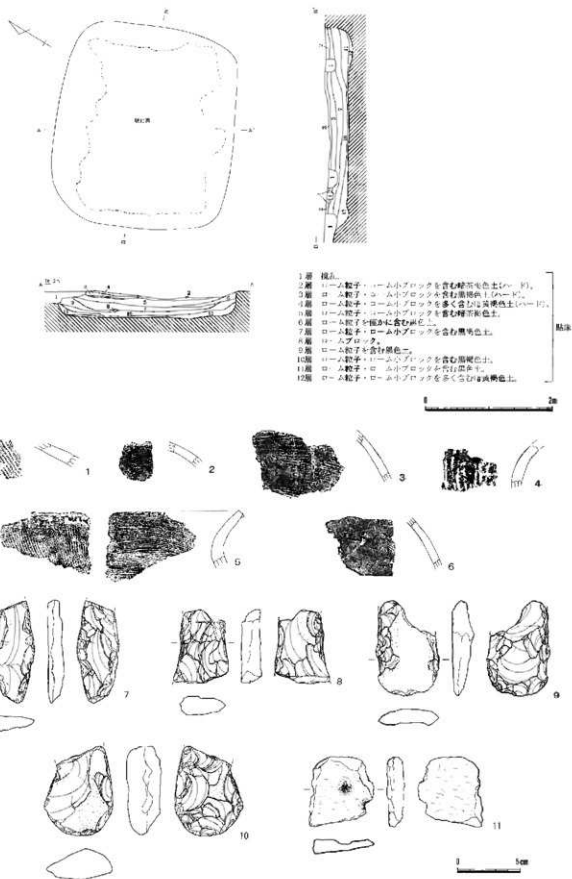
壺形土器（1～3）

すべて胴部上半の小破片である。

1は外面にRL端文が施文される。色調は内面が黒色、外面が暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデが施される。2は端末結節文の一部が見られ、外面は赤彩される。胎土の色調は淡茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。3は外面に赤彩が施され、胎土の色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。

壺形土器（4～6）

4は頸部小破片で、色調は内面が暗茶褐色、外面は黒色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面は細かいハケ目調整、外面は縦方向の粗いハケ目調整後僅かに横ナデが施される。291Y-6と同一体と考えられる。5は口縁部破片で、口唇部は平坦に皿取りされ、その後下端には刻み目が



第63図 391号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)

付される。色調は暗茶褐色～黒色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子を多く含む。内外面はハケ目調整が施される。6は胴部小破片で、色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面は細かいハケ目調整が施される。

石器 (第63図7～11、第5表)

7～10は打製石斧である。7は短冊形、8～10は撥形を呈する。7は基部を欠損しており、比較的薄身である。8は刃部および基部を欠損している。9は基部を欠損している。表面には広く原礫面が残置している。10は基部を欠損している。比較的基厚である。礫を素材としており、表裏両面に原礫面が残置している。8はホルンフェルス製、他は砂岩製である。

11は多孔石器である。表面に2カ所、凹みが認められる。

392号住居跡

遺構 (第64図)

【住居構造】131J・132J・2Tを切る。住居の上層は、掘削によりかなり壊されている。(平面形)円形に近い隅丸方形。(規模)3.90×3.88m。(壁高)16～18cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(床面)蟻痕を除いて良く硬化しており、貼床は3～8cmの厚さで施されている。(炉)地床炉である。住居中央より北に偏って位置し、56×52cmの楕円形で、10cm程の掘り込みを持つ。(柱穴)主柱穴は確認できなかったが、南壁から40cm離れた所に検出された深さ20cmのものは、入口梯子穴の可能性がある。(貯蔵穴)南壁の中央よりやや東に偏って位置し、平面形は隅丸方形、規模12×40cm・深さ21cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。(覆土)5層に分層される。南東コーナーから祭壇状遺構と思われる赤色の砂利層が検出された。

【遺物】土器・石器が出土した。

【時期】弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺物 (第64・65図、第5表)

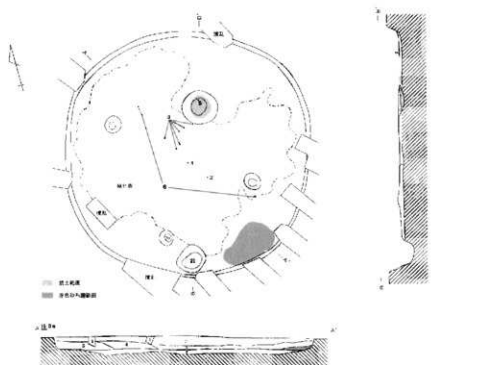
土器 (第64図1～6)

壺形土器 (1・2)

1は胴部上半の破片で、単節斜縄文により羽状縄文を施文し、途中3段の白縄結節文がまわる。さらに直径5mm程の円形貼付文が3箇所観察される。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。内面はヘラナデが施される。覆土中からの出土である。2は頸部から胴部上半にかけての破片で、頸部には直径8mm程の円形貼付文がまわっている。胎土の色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・砂粒を含む。頸部内面と外面無文部は赤彩される。内面はヘラナデ、細かいハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。住居中央付近のほぼ床面上からの出土である。

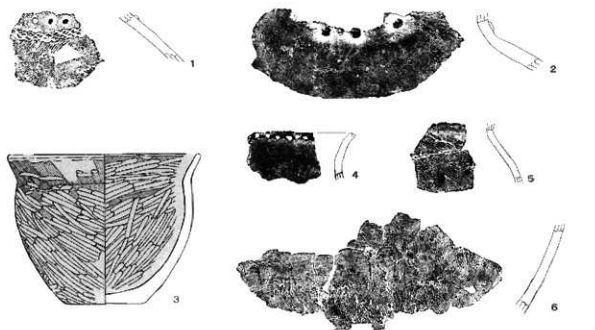
甕形土器 (3～6)

3は平底甕である。器高12.1cm・推定口径15.2cm・推定底径5.0cm。口縁部に最大径を測り、頸部は「く」字状に屈曲する。内外面は赤彩され、胎土の色調は淡茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。内外面へラ磨き調整が施されるが、口縁部を中心にハケ目痕が残る。炉のすぐ西側の覆土中(床土7～14cm)からの出土で、遺存度は1/2程である。4は口縁部小破片で、口唇部は平坦に凸取りされ、下端には刻み目が付される。色調は明褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子を含む。内外面はハケ目調整が施される。住居中央のほぼ床面上からの出土である。5は頸部から胴部上半にかけて



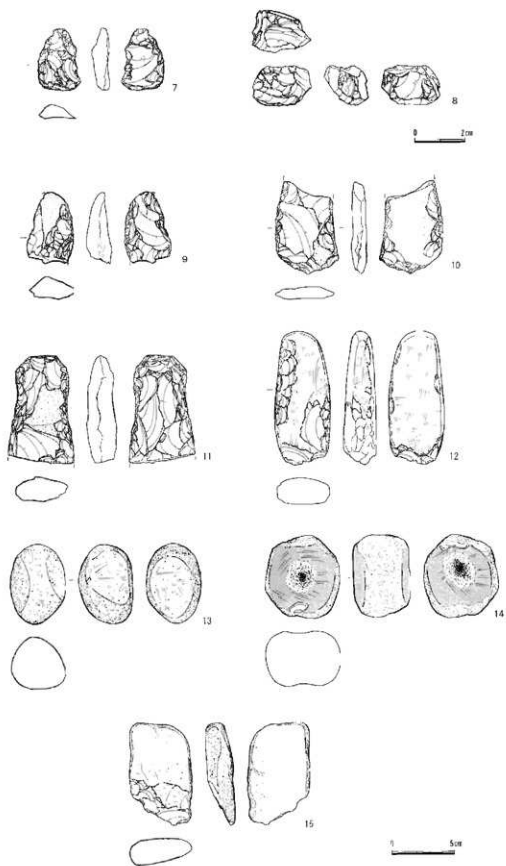
- 1層 覆瓦。
- 2層 ①—ムコ子・ローム小ブロック・炭化植物片・炭化材を含む
凝結土。
②—ムコ子・ローム小ブロック・粘土粒・炭化植物片・炭
化材を含む凝結土。
- 3層 ①—ムコ子・炭土粒子・炭化物粒を含む同色土。
②—ムコ子・炭土粒子・炭化物粒を含む黒褐色土。
- 4層 板状粘土・焼土ブロックを多く、ローム子・炭化物粒子
を含む厚赤褐色セメント。
- 5層 腐泥。

0 3m



第64図 392号住居跡・出土遺物1 (1/60・1/3)

0 10cm



第65図 392号伴埋跡出土遺物2 (2/3・1/3)

の小破片で、色調は暗褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。外面及び内面頸部はハケ目調整、以下内面はヘラナデが施される。炉腔内からの出土である。6は胴部下半の破片で、色調は暗褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子を含む。内面はヘラナデ後へう磨き調整、外面はハケ目調整が施される。覆土中（床上15～20cm）から散在的に出土している。

石器（第65図7～15、第5表）

7は黒曜石製の石鏃未製品である。縦長剥片を素材としており、全体に粗い調整を施し、形状を作出していると思われる。

8は黒曜石製の石核である。小形の残核であり、上面を打面として数枚のハ形剥片を、左側面を打面として4枚ほど小形縦長剥片を剥出しており、打面転移を行っていることが窺える。

9～11は打製石斧である。9は蛇紋岩製であり、左側縁から刃部を欠損している。右側縁には敲打痕が認められる。表面には原礫面が残置している。10は片岩製であり、基部を欠損しているが、楕形を呈すると思われる。比較的、薄身である。両側縁に磨滅が認められる。11は砂岩製であり、刃部を欠損しているが、楕形を呈すると思われる。左側縁には敲打痕が観察される。表面には原礫面が残置している。

12は蛇紋岩製の磨製石斧未製品である。刃部を欠損している。表面と裏面には整形加工による磨耗面が顕著に認められる。両側面には敲打痕が観察される。

13は軽石である。使用によると思われる平坦面が観察される。全面に擦痕が観察される。

14は安山岩製の凹石である。表裏両面に1ヶ所ずつ凹みが認められる。また磨滅が顕著である。上下面には敲打痕が観察される。

15は砂岩製の敲石である。扁平な鏢を素材としている。表面には剥離痕が見受けられ、右側面には敲打痕が観察される。

393号住居跡

遺構（第66図）

〔住居構造〕13Mに切られ、394Yを切る。（平面形）隅丸方形。（規模）5.30×5.04m。（長軸方位）N-53°-W。（壁高）24～32cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できなかった。（床面）炉の南側から西側にかけて、良く硬化していた。貼床は壁際を除いて施されており、厚さ15cmを測る。（炉）地床炉である。住居中央よりやや北西に偏って位置し、90×76cmの楕円形で、10cm程の掘り込みを持つ。炉床はほとんど焼けていなかった。（柱穴）主柱穴は4本確認され、西側の1本は重複形態をとる。深さ69～79cmを測る。（貯蔵穴）南東壁の中央よりやや東に偏って位置し、平面形は隅丸方形、規模44×40cm、深さ17cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。（覆土）12層に分層される。後世のドットにより一部壊されていたが、東コーナーから祭壇状遺構と思われる赤色の砂利層が検出された。

〔遺物〕土器・石器が出土した。

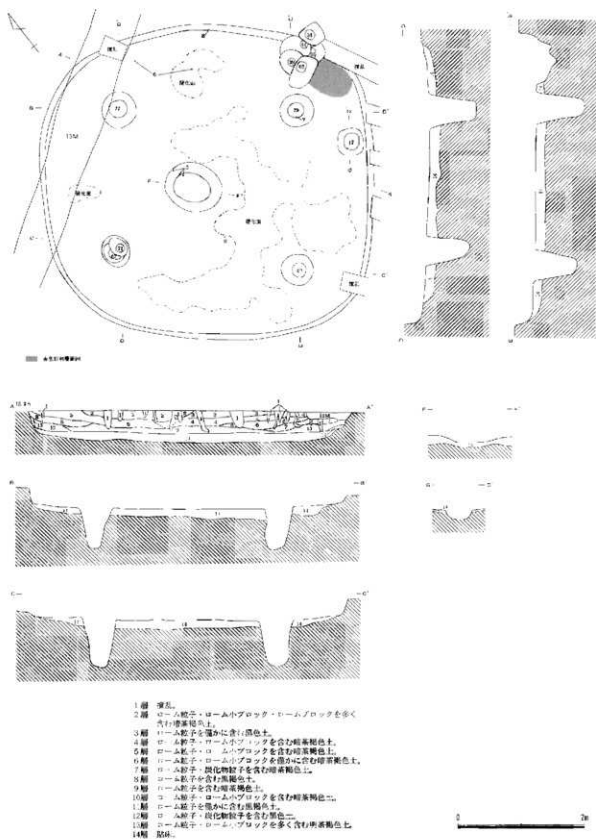
〔時期〕弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺物（第67・68図、第5表）

土器（第67図1～8）

壺形土器（1・2）

1・2は口縁部小破片で、覆土中からの出土である。1は複合口縁を呈する。口唇端部及び口縁部内



第66図 393号住居跡 (L/60)

面に単節斜縄文が施文され、口縁部内面にはその後直径8cm程の円形赤彩文が付される。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。2は複合口縁を呈する内外面赤彩の土器である。胎土の色調は暗灰褐色を呈し、胎上には黄褐色粒子を多く含む。内外面はへら磨き調整が施されるが、外面複合部直下にはハケ目痕が残る。

壜形土器（3～7）

3は現器高7.3cm・推定口径22.0cm。口縁部は外反し、口唇部外面には刻み目をもつ。刻み目はハケ状工具により口唇部を平らに面取りした後に施されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎上には黄褐色粒子・橙色粒子を含む。外面及び口縁部内面は目の粗いハケ目調整、内面は以下へらナデが施される。炉跡上方（床上6cm）からの出土で、口縁部から胸部上半にかけて1/3程遺存する。4・6は同一個体と考えられる。4は口縁部から胸部上半にかけての破片で、色調は暗茶褐色～黒色を呈し、6は胸部中位から下半にかけての破片で、色調は内面が黒色、外面が暗黄褐色を基調とする。いずれも胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む、内外面はハケ目調整が施される。4は覆土中から、6は北東壁近くの床面上からの出土である。5は頸部から胸部上半にかけての破片である。色調は内面が黒褐色、外面が暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。頸部内面及び外面はハケ目調整、内面は以下へらナデが施される。炉跡の北側のほぼ床面上からの出土である。7は台付壜の脚台部である。現器高6.7cm・底径7.3cm。脚台部の器形は「ハ」字状を呈する。色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子を含む。内外面へらナデが施される。東ビット（床面レベル）からの出土で、脚台部のみ完形品である。

高坏形土器（8）

脚台部破片で、器形は「ハ」字状を呈する。色調は淡茶褐色を基調とするが、内外面赤彩されているものと思われる。胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面はへらナデ、外面はハケ目調整が施される。北東壁に接する覆土中（床上23cm）からの出土である。

石器（第67図9～15、第68図16～23、第5表）

9・10は黒曜石製の石鏃である。9は凹基縁の右鏃部である。比較的、厚みがあり、裏面の調整が粗いことから未製品の可能性が窺えよう。10は先端を欠損している。凹基縁であり、抉りは深い。全体を丁寧に調整を施している。裏面には原礫面が残置している。

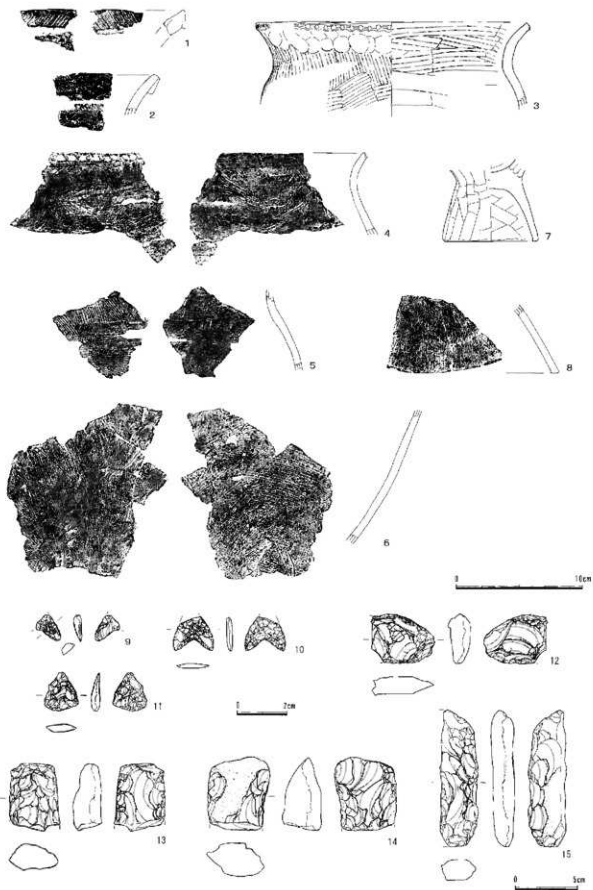
11は黒曜石製の石鏃未製品であり、先端を欠損している。表裏両面に素材面が残置している。

12は頁岩製のスクレイパーであり、左側縁を欠損している。縁辺に調整が施されている。下部に微細剝離痕が観察される。表裏の上部には磨滅が認められる。打裂石斧の転用の可能性が窺えよう。

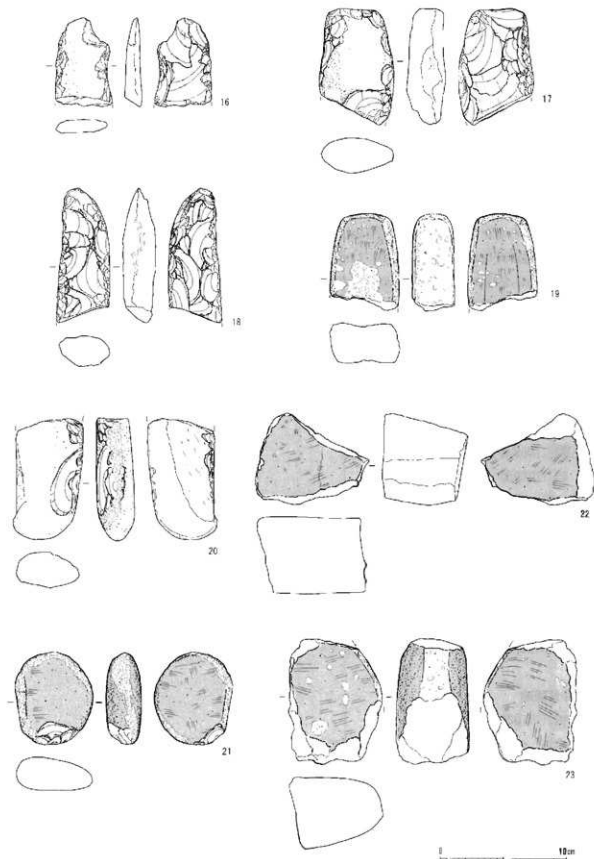
13～18は打裂石斧である。13は刃部を欠損している。全体的に風化が見られる。14は刃部を欠損している。比較的、厚みがある。表面には原礫面が残置している。15は左側縁を欠損しているが、短冊形を呈すると思われる。扁平礫を素材としており、表裏両面に原礫面が残置している。側縁には敲打痕が観察される。16は刃部を欠損している。表面には原礫面が広く残置している。比較的、薄身である。17は刃部を欠損している。両側面には敲打痕が観察される。表面には原礫面が広く残置している。18は刃部を欠損しているが、楕円形を呈すると思われる。両側は敲打により調整を施している。比較的、厚みがある。13・14・18がホルンフェルス製、15・17が砂岩製、16が片岩製である。

19は安山岩製の砥石であり、下部を欠損している。表裏両面を使用面としており、溝状の凹みが1条ずつ認められる。

20は砂岩製の敲石であり、上面を欠損している。扁平礫を素材とし、両側縁を使用している。敲打痕



第67図 393号住居跡出土遺物1 (1/3・2/3)



第68図 393号住居跡出土遺物2 (1/3)

および剥離痕が認められる。

21は三稜製の磨石である。扁平礫を素材とし、表裏両面を使用しており、磨耗が顕著に見受けられる。上下面は敷石として使用されており、敲打痕および剥離痕が認められる。

22・23は石皿であり、欠損している。表裏両面を使用しており、磨耗面が顕著に認められる。22が花崗岩製で、23が閃緑岩製である。

394号住居跡

遺構 (第69図)

〔住居構造〕 13Mと393Yに切られる。住居の南側は393Yにより壊されている。(平面形) 隅丸方形。(規模) 4.34×不明m。(長軸方位) N-63°-E。(壁高) 17~21cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際を塗いて良く硬化している。貼床が6~16cmの厚さで施されていた。(炉) 地床炉である。住居中央より北西に偏って位置し、平面形は楕円形で、規模84×70cm・9cm程の掘り込みを持つ。炉床は良く焼けており、ロームが6cm程の厚さで赤化していた。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 南西壁の中央付近に位置し、平面形は隅丸長方形、規模50×36cm・深さ13cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・炭化物を含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 12層に分層される。貯蔵穴の周囲に、範囲を示すことはできなかったが赤い砂列層が検出されたため、築壇状遺構があったと考えられる。

〔遺物〕 土器・石器が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期末葉~古墳時代前期。

遺物 (第69図1~4、第5表)

土器 (第69図1)

壺形土器の胴部小破片である。色調は内面が黄褐色、外面が黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面は粗いハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。

石器 (第69図2~4、第5表)

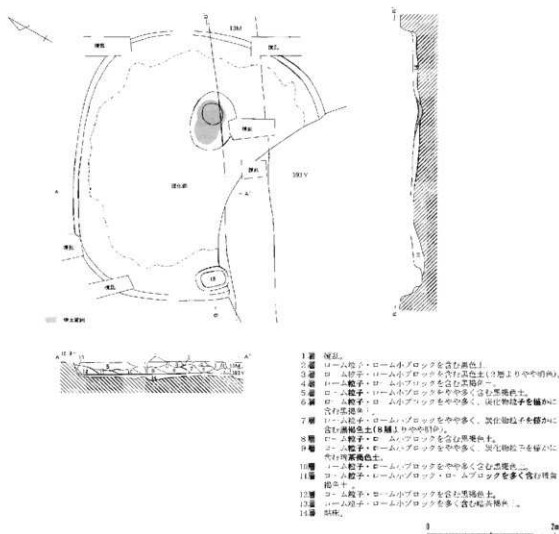
2・3は打製石斧である。2は砂岩製であり、刃部を欠損している。表面には原礫面が残置している。3はホルンフェルス製であり、基部を欠損しているが楕形を呈すると思われる。表面には原礫面が広く残置している。全歪にわたり風化が著しい。

4は安山岩製の磨石であり、大きく欠損している。右側縁には敲打痕が認められる。

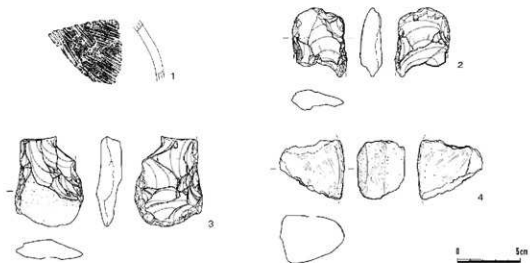
395号住居跡

遺構 (第70図)

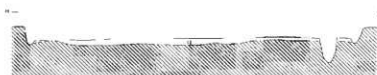
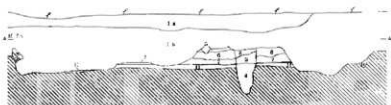
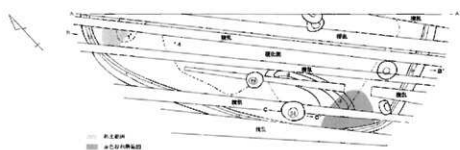
〔住居構造〕 住居の南西側以外は調査区域外であることと、後世の耕作により壊されているため詳細は不明である。(平面形) 隅丸方形か。(規模) 不明×5.40m。(壁高) 16~23cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。上幅16~20cm・下幅4~6cm・深さ9~15cmを測る。(床面) 床面の遺存状態は良くなかったが、壁際を塗いて良く硬化していると思われる。(柱穴) 土柱穴は確認できなかったが、南西壁の中央付近から50cm程離れた所から検出された深さ19cmのものは、人口梯子穴と思われる。(貯蔵穴) 南西壁の中央よりやや南に偏って位置する。平面形は楕円形で、規模37×21cm・深さ34cmを測る。一部しか確認できなかったが、裏側には高さ4cm程の突壇が巡らされて



- 1層 埴土。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む褐色土(埴土よりやや明るい)。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む黒褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、炭化物粒子を随所に含む褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム・ブロックをやや多く、炭化物粒子を随所に含む黒褐色土(埴土よりやや暗い)。
- 8層 ローム粒子・ローム・ブロックを含む黒褐色土。
- 9層 ローム粒子・ローム・ブロックをやや多く、炭化物粒子を随所に含む黒褐色土。
- 10層 ローム粒子・ローム・ブロックをやや多く含む褐色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム・ブロックを多く含む褐色土。
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 13層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む褐色土。
- 14層 埴土。

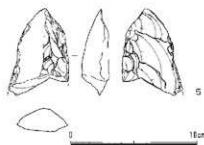
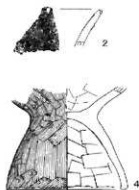


第69図 394号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)



- 14層 壁土。
 15層 黄土及び瓦片。
 16層 ローム粘土・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 17層 ローム粘土・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土。
 18層 ローム粘土・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 19層 ローム粘土を多く含む黒褐色土。
 20層 ローム粘土・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 21層 ローム粘土を多く含む暗褐色土。
 22層 ローム粘土・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
 23層 灰土。

0 7m



第70図 395号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)

いたと思われる。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 6層に分層される。西コーナー付近からは白色の粘土が検出された。

〔遺物〕 土器・石器が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺物 (第70図、第5表)

土器 (第70図1～4)

壺形土器 (1)

無頸壺の口縁部から胴部にかけての破片である。複合口縁を早する口縁部には網目状蒸糸文が施文され、胴部外面は赤彩される。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。住居北西側の床面上から

押出番号	遺構名	器種	分類	石材	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量
第59図7	38Y	打製石斧	不明	砂岩	基部欠	46.37	46.01	12.06	36.4
第59図8	38Y	打製石斧	不明	砂岩	刃部欠	51.40	41.80	18.16	46.8
第59図9	38Y	打製石斧	磨	砂岩	磨	65.23	50.67	21.59	76.6
第60図6	289Y	石鏃	凹基	石英	先端欠	13.67	16.96	2.68	0.5
第60図7	289Y	石鏃		砂岩	上部欠	87.07	38.38	39.25	294.0
第60図8	289Y	灰石		砂岩	大部分欠	11.00	5.70	2.00	129.0
第62図8	291Y	石鏃	平底	チャート	完形	18.17	13.36	3.04	0.6
第62図9	291Y	石鏃	凹基	黒曜石	左側部欠	22.34	16.69	4.20	0.8
第62図10	291Y	壺形石鏃		黒曜石	完形	15.90	13.12	5.14	0.8
第62図11	291Y	壺形石鏃		黒曜石	完形	18.55	12.71	4.57	1.0
第62図12	291Y	打製石斧	磨	砂岩	刃部欠	68.65	50.13	19.28	83.3
第63図7	391Y	打製石斧	短冊	砂岩	基部欠	82.22	33.06	12.27	40.6
第63図8	391Y	打製石斧	磨	ホルンフェルス	刃部・基部欠	59.43	43.74	16.23	59.2
第63図9	391Y	打製石斧	磨	砂岩	基部欠	76.32	49.35	15.87	58.9
第63図10	391Y	打製石斧	磨	砂岩	基部欠	68.94	52.97	28.66	106.3
第63図11	391Y	多孔石器		片岩	破片	59.29	59.74	11.96	40.4
第65図7	392Y	石鏃未製品		黒曜石	完形	24.56	16.51	6.35	2.4
第65図8	392Y	石鏃		黒曜石	完形	15.89	23.94	17.56	5.8
第65図9	392Y	打製石斧	不明	粒状岩	刃部欠	57.23	35.74	19.26	39.8
第65図10	392Y	打製石斧	磨	片岩	基部欠	73.71	48.58	17.67	54.1
第65図11	392Y	打製石斧	磨	砂岩	刃部欠	86.36	52.55	23.47	123.4
第65図12	392Y	磨製石斧未製品		粒状岩	刃部欠	68.38	44.19	25.75	188.5
第65図13	392Y	粒石		燧石	完形	64.3	43.88	42.06	36.6
第65図14	392Y	燧石		安山岩	完形	66.35	58.43	44.86	278.5
第65図15	392Y	粒石		砂岩	完形	80.66	51.08	19.96	113.2
第67図9	393Y	石鏃	凹基	黒曜石	先端から左側部欠	11.19	7.46	3.05	0.2
第67図10	393Y	石鏃	凹基	黒曜石	先端欠	13.89	15.99	2.41	0.5
第67図11	393Y	石鏃未製品		黒曜石	先端欠	15.28	13.41	3.31	0.6
第67図12	393Y	スクレイパー		片岩	左側部欠	49.50	50.57	17.87	38.8
第67図13	393Y	打製石斧	不明	ホルンフェルス	刃部欠	54.32	39.66	22.23	61.5
第67図14	393Y	打製石斧	不明	ホルンフェルス	刃部欠	59.06	47.94	30.97	107.4
第67図15	393Y	打製石斧	短冊	砂岩	左側部欠	110.39	31.48	18.81	86.5
第68図16	393Y	打製石斧	磨	片岩	刃部欠	70.78	45.04	13.36	31.5
第68図17	393Y	打製石斧	磨	砂岩	刃部欠	93.04	69.94	30.08	217.5
第68図18	393Y	打製石斧	磨	ホルンフェルス	刃部欠	106.16	42.58	25.94	146.1
第68図19	393Y	燧石		安山岩	下部欠	76.76	65.28	32.62	221.9
第68図20	393Y	燧石		砂岩	上部欠	100.16	53.96	29.82	241.9
第68図21	393Y	燧石		玉髓	完形	73.53	61.21	26.55	279.0
第68図22	393Y	石鏃		花崗岩	欠損	71.51	83.49	62.88	568.5
第68図23	393Y	石鏃		閃緑岩	欠損	105.95	82.77	60.79	668.6
第69図2	394Y	打製石斧	不明	砂岩	刃部欠	54.79	42.13	18.53	32.5
第69図3	394Y	打製石斧	磨	ホルンフェルス	基部欠	70.91	53.75	18.21	75.9
第69図4	394Y	燧石		安山岩	破片	45.19	50.79	38.06	88.7
第70図5	395Y	打製石斧	磨	ホルンフェルス	刃部欠	68.81	47.52	21.16	58.1

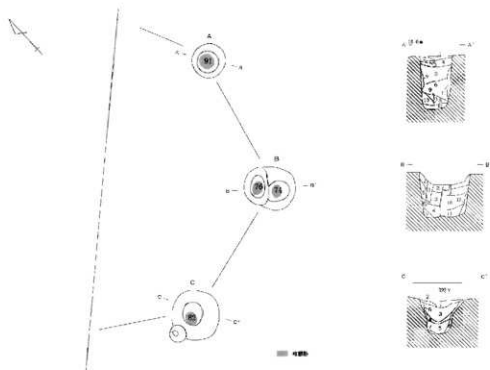
(単位: cm・g)

第5表 弥生時代住居跡出土の土器一覧

らの出土である。

壺形土器 (2~4)

2・3は口縁部小破片で、覆土中からの出土である。2は11層部に刻み目が付される。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を僅かに含む。内外面は細かいハケ目調整が施される。3は11層部が平坦



- 2 T-A
- 1層 コム粒子を僅かに含む黒褐色土。
 - 2層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
 - 3層 ローム粒子を多く含む黒褐色土。
 - 4層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
 - 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土。
 - 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土。
 - 7層 ローム粒子・粘土粒子を僅かに含む黒褐色土(152) [覆土の流れ込み]。
 - 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 - 9層 ロームブロック。
 - 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 - 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土。
 - 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。

- 2 T-B
- 1層 陶片。
 - 2層 ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土。
 - 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土。
 - 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土。
 - 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 - 6層 ロームブロック。
 - 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土。
 - 8層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
 - 9層 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロック(直径2cm)を多く含む黒褐色土。
 - 10層 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 - 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 - 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土。

- 2 T-C
- 1層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
 - 2層 ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土。
 - 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を多く含む黒褐色土。
 - 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土。
 - 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 - 6層 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土。
 - 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土(1107)。

第71図 2号掘立柱建築遺構 (1/60)

に面取りされている。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む。内外面はハケ目調整が施される。

4は台付甕の脚台部である。現器高8.6cm・底径9.6cm。脚台部の器形は「ハ」字状を呈する。色調は暗棕色を基調とし、胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。住居北西隅寄りのほぼ床面上からの出土で、脚台部のみ完形である。

石器 (第70図5、第5表)

ホルンフェルス製の打製石斧である。刃部を欠損しているが、撥形を呈すると思われる。表面には原線面が広く残置している。

(3) 掘立柱建築遺構

2号掘立柱建築遺構

遺構 (第71図)

[構造] 3本の柱穴が該当すると思われる。いわゆる単甲形を呈する掘立柱建築遺構である。ここでは、北側の柱穴から、A・B・Cとして説明する。規模はAが径52cm・深さ91cm、Bが80×66cm・深さ76・74cm、Cが径76cm・深さ82cmを測る。各柱穴の柱根間の距離はほぼ同じで、約2.20mであった。Bは2本の重複形を呈しているが、土層断面から見ると北側が南側を切っている。Cは392Yの貼床下から検出された。(覆土) Aは12層に、Bは6層と5層に、Cは7層に分層される。

[遺物] 出土しなかった。

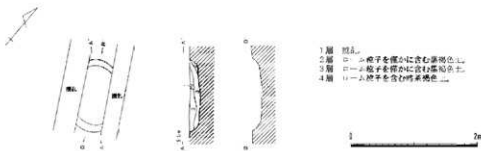
[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

[所見] 時期については、柱穴Cが392Yの貼床下から検出されたことにより、当該期の所産であることが判断できた。当該期の掘立柱建築遺構の類例として、本遺跡第8地点の1号掘立柱建築遺構(尾形・佐々木 1990)がある。

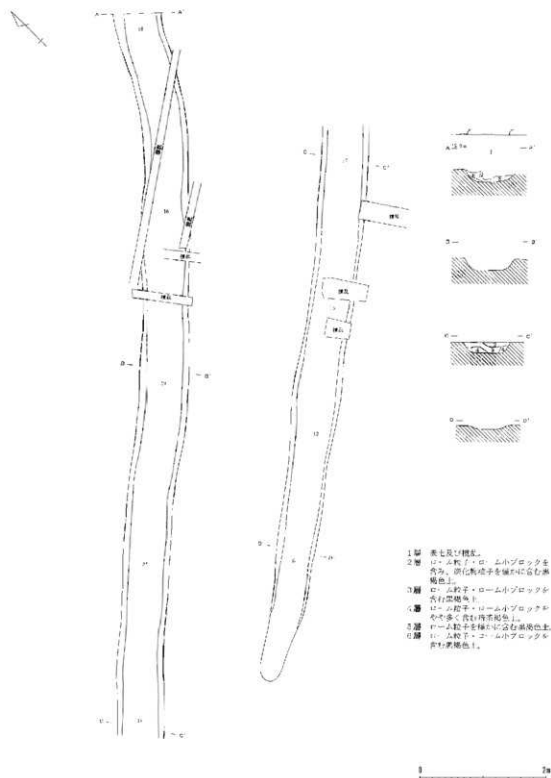
第4節 平安時代の遺構と遺物

(1) 概要

平安時代の遺構については、覆土の観察や出土遺物から、土坑1基・溝跡1本が該当するものと考え



第72図 451号土坑 (1/60)



第73図 13号溝跡 (1/60)

られる。遺物量は少なかったが、13号溝跡(13M)については、最新の出土遺物から、9世紀後葉に比定できる。

(2) 土 坑

451号土坑

遺 構 (第72区)

〔構造〕東側と西側は攪乱により壊されている。131Jを切る。(平面形)楕円形か。(規模)126cm×不明。(深さ)15cm。(覆土)ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕土しなかった。

〔時期〕詳細は不明であるが、覆土の観察から平安時代か。

(3) 溝 跡

13号溝跡

遺 構 (第73区)

〔構造〕第35地点で検出された溝跡の上側部分と考えられるため、同遺構名で取り扱った。本地点では全長約20mが確認できた。走行方向はN-53°Eであるが、東側は15°北に、西側は7°西に曲がっている。上幅52~78cm・下幅42~64cm・深さ6~27cmを測る。溝底はほぼ平坦で、断面は逆台形を呈する。覆土はローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕縄文・弥生土器の小破片が数点出土しているが、最新の遺物として平安時代の須恵器杯・土師器甕の小破片が1点ずつ出土した。

〔時期〕最新の遺物及び覆土の観察から、ここでは平安時代(9世紀後葉)として扱うことにした。

遺 物 (図版31 2 1・2)

1は須恵器杯の口縁部小破片である。口縁部は僅かに外反する。色調は青灰褐色を呈し、胎上には白色砂粒を含む。覆土中からの出土で、東金子製品と考えられる。

2は土師器甕の胴部小破片で、いわゆる武藏型甕であろう。色調は淡茶褐色を呈し、胎上には砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面は粗いヘラ削りが施される。覆土中からの出土である。

第5節 遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文時代の石器・土器・土製品、弥生時代後期末葉~古墳時代前期の土器、古墳時代後期の土器、平安時代の土器、近世の陶磁器・土器が出土した。以下、各遺物ごとに分類して説明する。

(1) 縄文時代の石器 (第74・75図、第6表)

ここで扱う石器については、393Yの擾乱内出土のものが多く、これは近年の耕作中に穴を掘ってまとめて捨てられたためと考えられる。

1は琥珀玉である。上下を欠損している。

2は黒曜石製の石鏃であり、先端を欠損している。凹基鏃である。調整は粗く思われる。表面には素材面が残置している。

3～14は打製石斧であり、3・4が短冊形で、他は楕形を呈する。3は刃部を欠損している。両側縁には敲打による調整を施している。裏面には原礫面が残置している。4はホルンフェルス製である。両側縁は敲打による調整を施している。13M川上。5は刃先に微細剥離痕が観察される。裏面には原礫面が広く残置している。6は砂岩製であり、楕形を呈する。両側縁は敲打による調整を施している。表面には原礫面が広く残置している。7は表面の刃部付近に磨滅が認められる。表面には原礫面が広く残置している。8は刃部、表面、両側縁に磨滅が顕著に認められる。上部には原礫面が残置している。9は砂岩製であり、基部を欠損している。比較的、薄身である。表面には原礫面が広く残置している。10は基部を欠損している。比較的、厚みがあり、右側縁には敲打による調整を施している。11は基部を欠損している。刃部および両側縁は磨滅が非常に顕著に認められる。表面には原礫面が残置している。12は刃部を欠損している。両側縁に敲打痕が観察される。表面には原礫面が広く残置している。13は刃部および右側縁を欠損している。左側縁には敲打痕が認められる。裏面には原礫面が残置している。14は刃部を欠損している。調整は粗く、両側縁には敲打痕が観察される。5・7・14・13が砂岩製、8・3・11が頁岩製、10が礫岩製、12がホルンフェルス製である。

15・16は石皿である。15は片岩製であり、欠損している。表面を使用しており、磨耗面が顕著に認められる。16は花崗岩製であり、欠損している。表裏両面を使用しており、磨耗面が顕著に観察される。裏面には4ヶ所、凹みが認められる。

(2) 縄文時代の土器 (第76～79×1～100)

縄文時代の上器を大まかに以下のように大別する。

- 第1群 中期前葉の土器群 (五領ヶ台式土器)
- 第2群 中期中葉の土器群 (阿玉台式・勝坂式土器)
- 第3群 中期後葉の土器群 (加曾利E式・曾利式・連縄文系土器)
- 第4群 後期前葉の土器群 (称名寺式・堀之内式土器)

第1群 中期前葉の土器群 (1・2)

1は口縁部が短く「く」字状に内屈し、その幅狭の口縁部に横位沈線文と交互刻突文が施文される。

2は口縁部直下に集合沈線による横位直線文と下向きの半円形文が施文される。

第2群 中期中葉の土器群 (3～63)

3は口縁部をやや肥厚させ、その二端に刻みをもつ。文様は短沈線による縦位沈線文が施文される。

4は典型的な鬚状把手を呈する口縁部破片で、隆帯上端には刻みをもち、文様は結節沈線文が施文される。5は山形把手を呈する口縁部破片で、把手の内側には弱い刻みをもつ。文様は把手から延びる隆帯が懸垂し、区画文を構成し、その内側に角押文が3重に施文される。6は緩い波状を呈する口縁部破片で、角押文が施文される。7は緩やかな山形状を呈する把手部分の破片で、口縁部直下には器形に沿って連続爪形文を施し、その内部には鋸齒状文が施文される。隆帯は先端が尖り、その側面には角押文が施される。8は大きな山形把手の破片で、結節沈線による文様が施文される。9は緩やかな山形状を呈する把手部分の破片で、直下には耳飾状の突起が付けられる。10は胴部途中に隆帯を巡らし、上下に3

本単位の結節沈線による文様が施文される。11は結節沈線による文様が施文される。12は横位隆帯の上下に沿って連続爪形文が施文され、その上方に鋸歯文を巡らしている。13は半載竹管による横位鋸歯文が施文される。14は横位の隆帯による波状文が施文される。隆帯には上端に刻みが、上方側面には結節沈線文が施される。15は隆帯による懸垂文が施文され、底部には襷代痕が残る。3～6・8・9・12・13の胎上には金室母を含む。

16は何層もの隆帯を貼り付けることにより、大木式の横状把手を思わせるような口縁部破片である。全体に精巧な作りで、隆帯側面には沈線を巡らし、渦巻文を基本とする文様が施文される。17は山形把手を呈する口縁部破片で、口縁部直下の隆帯上に2ヶ所の刺突文が施文され、さらに隆帯上端に連続爪形文が施される。18は刻みをもつ3本の隆帯をねじり状に貼り付けた口縁部破片である。隆帯直下の口縁部は無文である。19は耳飾状突起をもつ口縁部破片で、文様は突起下端から半載竹管による刻みをもつ隆帯を垂下させ、胴部には半載竹管による縦位沈線文が施文される。20は大きな耳たが状の把手をもつ口縁部破片で、口縁部縁は刻みをもち、文様は器形に沿って沈線2本を施し、その内側に短伏状を充填している。21は三角形の大きな尖った把手部分の破片である。22は中空のコップ状把手で、4本の刻みをもつ隆帯を基本に区画文を構成し、区画内には沈線文が施文される。23は2本の横状の把手部分の破片で、前面には太沈線による渦巻文、側面には沈線文が施文される。24は大きな半円形の把手部分の破片で、隆帯には連続爪形文が施される。25は先端に窪みをもつ小突起をもつ口縁部破片で、突起部下端には短沈線により連続「コ」の字状文と刻みをもつ隆帯を垂下させている。区画内には太沈線による三叉文が施文されている。26は先端に大きな窪みをもつ楕円形を呈する把手部分の破片で、中心部には1本の粘土を柱にして積み上げた様子が観察できる。文様は隆帯とそれに沿って幅広の結節沈線文が施文される。27は指頭状の突起をもつ口縁部破片で、文様は結節沈線文と押捺痕をもつ隆帯による懸垂文が施文される。28は口縁部直下に断崖三角形の隆帯を貼り肥厚させ、直下の又画内にはR L縄文が施される。29は口縁部に無文帯をもち、文様は沈線文と連続刺突文が施文される。30は無文帯をもつ口縁部直下に刻みをもつ隆帯を垂下させ、区画内は縦位沈線文が充填される。31は全体に連続爪形文や角押文を中心に文様が施文される。また、耳飾状突起を貼り付け、L R縄文も施される。32は隆帯の上下に大型の連続爪形文を施し、その上方に鋸歯文が施文される。33はL R縄文を地文に沈線文による文様が施文される。34は口縁部に幅状の無文帯をもち、文様は半載竹管による平行沈線文や連続爪形文・刺突文が施文される。35は交互刺突による連続「コ」の字状文と沈線文を施文し、その下方にL R縄文が施される。36は土文様として隆帯による渦巻文が施文される。37・38は半載竹管による斜位の条線を地文に、37は沈線、38は半載竹管による連続的な文様が施文される。39は横位の連続爪形文の直下に連続的な文様が施文され、その上方に円形刺突文が充填され、下方にL R縄文が施される。

40は刻みをもつ隆帯により大きな渦巻文が描かれ、その区画内には沈線により文様が施文される。41は先縁が太くパイプ状を呈する突起が貼られ、その隆帯に沿ってキャタピラ文が施文される。42は胴部に隆帯を巡らし、その上方には隆帯による「V」字状文と沈線による三叉文状の文様が施文され、下方には地文のL R縄文が施される。隆帯には刻みをもつ。43は沈線による表現と思われるが、蛇行する懸垂文や区画文が施文され、部分的に刺突文が加えられる。44はLの縷系文を地文に沈線による渦巻文・鋸歯文が施文される。45は隆帯に沿って、大型の連続爪形文が施文され、上方には鋸歯文が見られる。46は渦巻状の微隆起部分に三叉文や円形刺突文が施文され精巧に作られている。47・48は刻みをもつ隆帯により縦位区画された内部に沈線文が施文される。47は縦位沈線が、48はさらに方形区画され、重畳面

文的な文様が施文される。49は隆帯と沈線そして連続爪形文により文様が施文される。50は斜位の沈線文による文様が施文される。51は方形区画内に横位沈線文が充填される。52は二义文あるいは蛇行文の文様が施文され、そこにキャピラ文が加えられている。53はキャピラ文に区画された内部に玉栴_三又文が施文される。54は刻みをもつ隆帯と沈線文が曲線的に施文される。55は鋸歯文と連続爪形文に区画された内側に沈線により象徴的な文様が施文される。56は隆帯による点線文と交互刺突文による連続「コ」の字状文を巡らし、その下方にはR L縄文を地文に渦巻文を伴う懸垂文が施文される。57は結節沈線による渦巻文が施文される。

58・59は底部付近の破片で、58・59は胴部下半で屈曲し、その下方に無文帯をもつタイプで、58は地文に縦位の結節沈線文が施され、59は縦位の沈線文を地文に斜位の平行沈線文が施文される。

60～62は浅鉢である。60は口縁部は平坦で、口縁部直下には半截竹管による横位沈線文が施文される。胎上には白色針状物質を含み、内外面赤彩される。61は口縁部と体部の境に刻みをもつ隆帯、その直上に2本の隆帯を巡らし、口縁部文様帯には同心円文が施文される。62は丸(2重隆帯)に花卉状文を構えた文様を中心に連結する渦巻文が施文される。外面は赤彩される。

63は有孔罅付土器の小破片で、内外面赤彩される。

以上、3～15は阿玉台式土器、16～63は唇坂式土器を基本とするものと考えられる。

第3群 中期後葉の土器群 (64～93)

64・65は同一個体で、器形はキャリパー形を呈し、Lの燃糸文を地文に口縁部と胴部文様帯には2本単位の隆帯による文様が施文される。隆帯には交互刺突文が部分的に加えられている。66は口縁部に耳飾状突起を貼り付け、そこから隆帯によるつなぎ弧文を施文し、その上方は区画文となる。区画内は縦位沈線文が充填される。また、耳飾状突起の下端から3本の沈線文が垂下している。67は隆沈線により栴円区画文が形成される。区画内はR L縄文が施される。68は口縁部に無文帯をもち、その直下に微隆起原文による文様が施文される。文様は幅広い懸垂部と縄文部(L R縄文)を交互に配置させている。69・70はR L縄文を地文に岩形懸垂文が施文される。71・72は円形刺突文を地文に2本単位の隆帯による区画文と懸垂文が施文される。73は蛇行する条線文が施される。

74は口縁部と胴部の境に波状隆帯を巡らし、口縁部はR L縄文を地文に波状隆帯が懸垂する。75は条線を地文に隆帯による文様が施文される。76はL縁部と胴部の境に波状隆帯を巡らし、L縁部は無文である。胴部には地文のR L縄文の一部が観察できる。77は口縁部と胴部の境に2本の沈線とその下方に1本の波状文を巡らし、口縁部あるいは頸部は無文である。胴部には地文のLの燃糸文が施される。78は1本の隆帯とその下方に2本の刻みをもつ隆帯を巡らし、口縁部あるいは頸部は無文である。79・80は隆帯による波状文と胴部の地文に横位沈線文が施される土器で、79は口縁部は縦位沈線文である。81は口縁部と胴部の境に波状隆帯を巡らし、L縁部には重弧文が施文され、波状隆帯が垂下する。82～85は胴部に縦位羽状の沈線文を地文に懸垂文が施文される土器である。86は縦位沈線文を地文に交互刺突文をもつ隆帯が懸垂する。87は半截竹管による縦位羽状の沈線文が施される。88はR L縄文を地文に沈線による懸垂文が施文される。

89はLの燃糸文を地文に3本単位の沈線による連弧文と口縁部と胴部の境に横位沈線文が施文される。90はLの燃糸文を地文に口縁部と胴部の境に3本単位の横位沈線文が施文される。上下には連弧文の一部が観察される。91はLの燃糸文を地文に3本単位の沈線による曲線的な文様が施文される。92は大型破片で、2段の連弧文に渦巻文・栴円文が組み込まれた文様が施文される。最下段の横位沈線文は上下

2段の文様帯を区分するものであろう。地文はL R縄文である。93はLの撚糸文を地文に3本半位の沈線による連弧文、その下方に懸垂文が施文される。

以上、63～73は加曾利E式土器、74～88は曾利式土器、89～93は連弧文系土器を基本とする。しかし、加曾利E式土器には多分に曾利式系が含まれるものと思われる。

第4群 後期前葉の土器群 (94～100)

94は口縁部小破片で、平口口縁を呈し、口縁部直下に帯縄文(L R縄文)が施文される。

95～98は沈線文により文様が施文される土器で、95・96は縦位に、97は斜位に、99は「V」字状に施文される。

99・100は粗製土器であろうか。99は色調が黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。全体に粗いR L縄文が施される土器である。100は全体に色調が黒褐色を呈し、押捺を伴う横位降帯の下方に斜位の沈線文が施文される。粗縄文系土器であろう。

(3) 縄文時代の土製品 (第80図101～134、第7表)

101～127は土鍾、128～134は土製円盤である。

(4) 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器 (第80図135～137)

135・136は壺形土器である。135は口縁部小破片で、色調は内面が黒色、外面は淡茶褐色を早するが、胎土には黄褐色粒子を多く含む。不明瞭であるが、内外面赤彩されるものと思われる。内外面はハケ目調整後、粗いへう磨き調整が施される。393Yの攪乱内からの出土である。136は広口壺の口縁部から胴部下半にかけての破片であると思われる。口縁部は複合口縁を呈し、胴部上半に膨らみをもつ器形である。色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む。不明瞭であるが、内外面赤彩されるものと思われる。内外面はへう磨き調整が施される。136Jの攪乱内からの出土である。

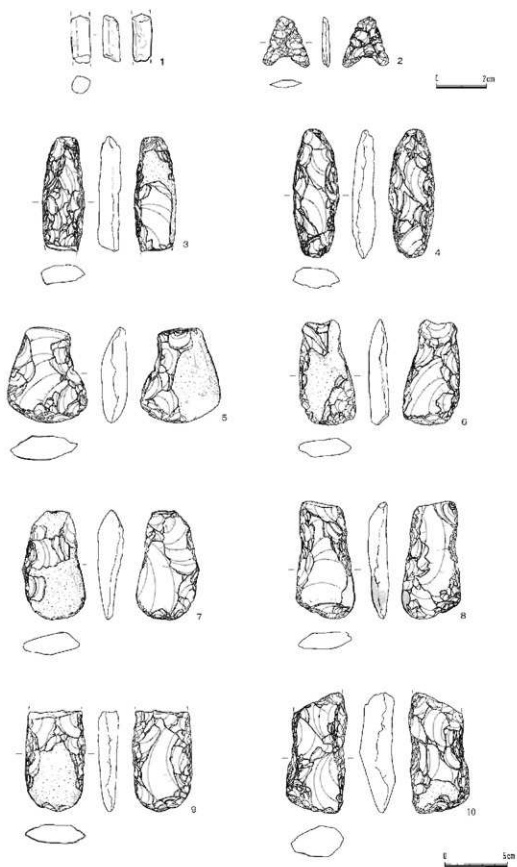
137は壺形土器の口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部はやや受け口状を呈し、口唇部外面にはハケ目調整による刻み目が付される。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面はハケ目調整が施される。393Yの攪乱内からの出土である。

(5) 古墳時代後期の土器 (図版35-138～144)

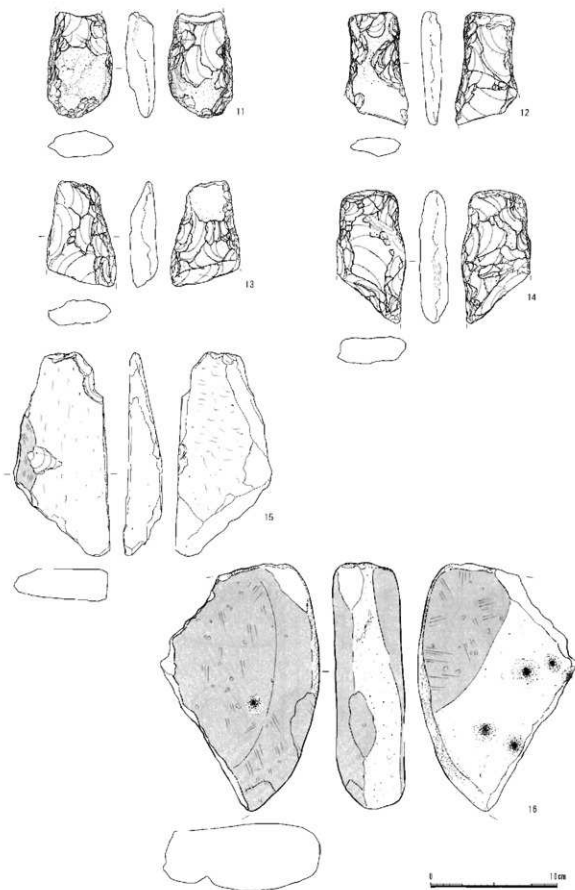
138・139は土師器壺形土器で、いわゆる初現段階の比企型壺の小破片である。138は口縁部で、口唇部は短く外反する。内外面赤彩され、胎土には砂粒を伴うを含む。133Jからの出土である。139は底部で、内面は赤彩される。胎土の色調は暗赤褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。外面はへう削り後へう磨き調整が施される。

140・141は土師器壺形土器で、口縁部が複合口縁を呈する土器である。4は色調が暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面はへらナデ、外面は口縁部横ナデ、以下ハケ目調整が施される。5は色調が暗茶褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はへらナデ、外面は口縁部が横ナデ、以下ハケ目調整が施される。

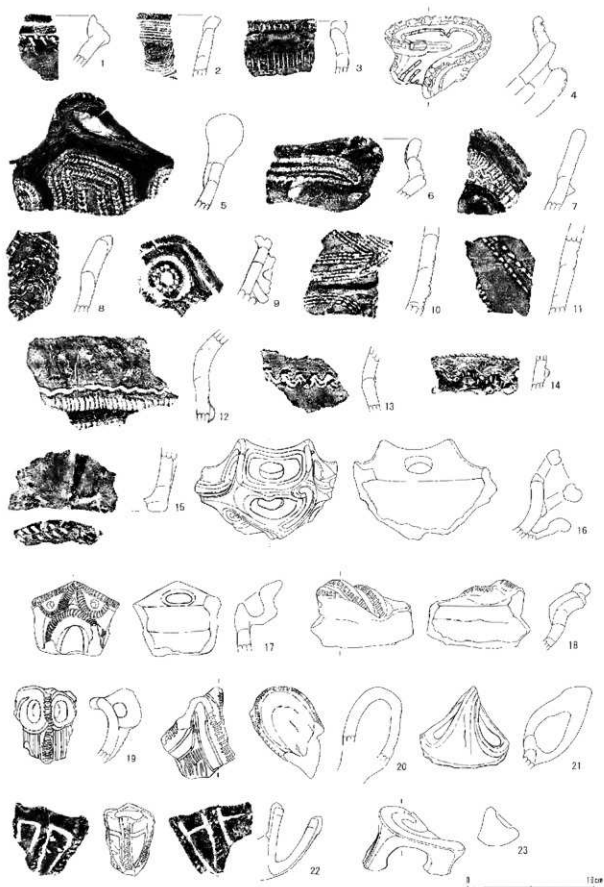
142・143は土師器壺形土器である。142は口縁部破片で、色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内外面横ナデが施される。143は底部破片で、全体に黒く煤けているが、胎土の色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を含む。内面はへらナデ、外面はへう削りか。



第74図 遺構外出土石器1 (2/3・1/3)



第75圖 漢朝外出土石器2 (1/3)



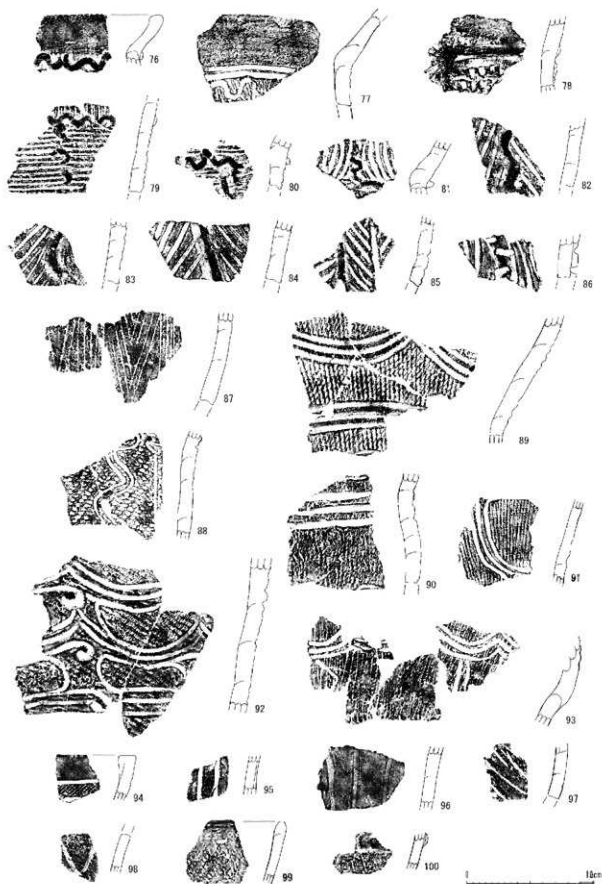
第76図 遺構外出土遺物1 (1/3)



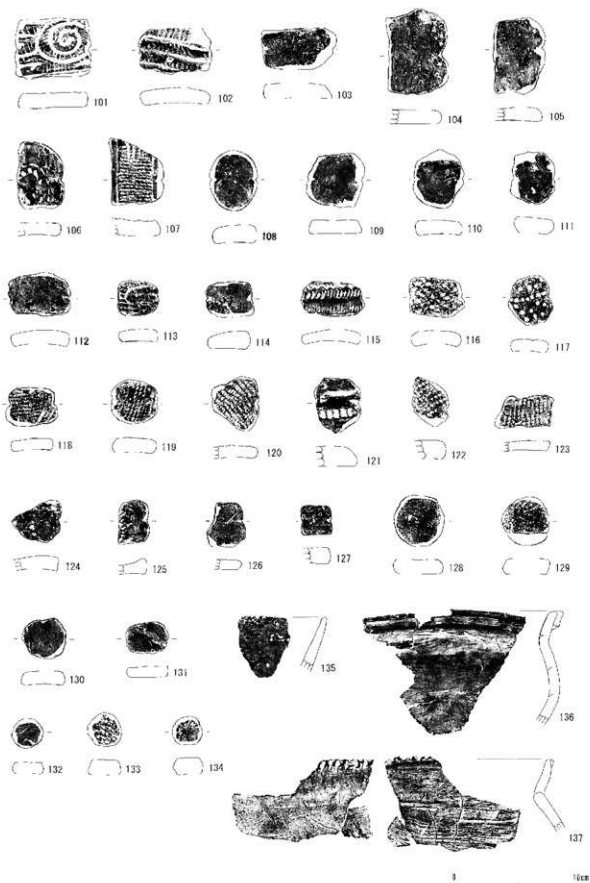
第77図 遺構外出土遺物2 (1/3)



第78図 遺構外山土遺物3 (C/3)



第79圖 遠東外出土遺物 4 (1/3)



第90図 遺構外出土遺物5 (1/3)

押収番号	器種	分類	石材	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置
第74図1	鉄道瓦		磁石	欠損	18.76	7.66	6.74	2.3	—
第74図2	石礎	仰鉢	磨礫石	先端欠	19.22	17.90	2.99	0.7	—
第74図3	打製石斧	短形	頁岩	刃部欠	91.62	33.57	17.80	72.6	393Y内腹乱
第74図4	打製石斧	短形	ホルンフェルス	先端	103.60	37.57	17.81	87.1	13M
第74図5	打製石斧	短形	砂岩	完形	76.99	63.11	50.61	111.3	393Y内腹乱
第74図6	打製石斧	短形	砂岩	葉形	84.50	43.73	15.32	73.7	—
第74図7	打製石斧	短形	砂岩	完形	88.13	49.06	22.02	86.5	393Y内腹乱
第74図8	打製石斧	短形	頁岩	完形	91.92	46.66	14.21	86.4	393Y内腹乱
第74図9	打製石斧	短形	砂岩	基部欠	80.86	48.10	16.36	84.0	—
第74図10	打製石斧	短形	礫岩	基部欠	96.30	44.86	28.06	147.6	393Y内腹乱
第74図11	打製石斧	短形	頁岩	基部欠	84.87	52.13	27.30	122.7	393Y内腹乱
第74図12	打製石斧	短形	ホルンフェルス	刃部欠	90.55	49.25	15.27	83.6	393Y内腹乱
第74図13	打製石斧	短形	砂岩	刃部欠	80.01	56.36	21.76	109.6	393Y内腹乱
第74図14	打製石斧	短形	砂岩	刃部欠	106.34	54.66	22.40	156.5	393Y内腹乱
第75図15	石皿		片岩	欠損	162.99	74.43	29.57	385.2	393Y内腹乱
第75図16	石皿		花崗岩	欠損	133.86	121.22	52.71	1707.2	393Y内腹乱

(単位: mm・g)

第6表 遺構外出土の石器一覧

押収番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	色調	土器型式	出土位置	特徴
第80図101	土埴	6.1	4.8	1.8	52.0	暗赤褐色	五領・台式	391Y	沈着表現による減意文/葉状沈着?
第80図102	土埴	5.8	3.7	1.3	30.6	明赤褐色	器底式	131J腹乱	2本殊等/LR縄文
第80図103	土埴	5.9	3.4	1.3	33.8	暗褐色	器底式	291Y助土	無文/無文
第80図104	土埴	6.9	4.9	1.2	44.6	明赤褐色	器底式	291Y	無文/欠損あり
第80図105	土埴	4.2	(6.1)	1.1	34.2	黒色	阿玉台式	138Y	無文/金雲母を多く含む/欠損あり
第80図106	土埴	5.1	(3.8)	1.0	25.2	内面: 黒色 外面: 暗褐色	阿玉台式	133M	隆起/平砥竹管による結節沈着/金雲母・白色砂粒を多く含む
第80図107	土埴	5.4	(4.4)	1.3	35.2	暗赤褐色	器底式	134J腹乱	平砥竹管による平砥痕跡/Lの減意文/欠損あり
第80図108	土埴	4.9	4.3	1.4	30.8	淡赤褐色	阿玉台式	391Y	無文/金雲母・白色砂粒を多く含む
第80図109	土埴	4.5	4.3	1.1	30.5	淡赤褐色	不明	291Y	無文/白色砂粒を含む
第80図110	土埴	4.7	4.1	1.2	24.6	暗赤褐色	器底式	遺構外	無文
第80図111	土埴	4.2	3.5	1.3	22.4	内面: 黒色 外面: 暗褐色	不明	135J腹乱	外面赤彩?/無文
第80図112	土埴	5.0	3.5	1.1	24.4	内面: 黒色 外面: 暗褐色	阿玉台式?	291Y	無文/金雲母・砂粒を含む
第80図113	土埴	3.3	2.8	1.0	9.8	黒色	不明	391Y	表面磨耗/平砥竹管による沈着/Lの減意文?
第80図114	土埴	3.9	2.9	1.5	19.2	内面: 黒褐色 外面: 暗黄褐色	加曾利式	291Y	表面磨耗/磨痕文?
第80図115	土埴	5.0	2.8	0.9	15.4	暗赤褐色	器底式	392Y	隆起/濃緑灰形文/磨痕状文
第80図116	土埴	4.1	3.2	1.1	19.2	暗赤褐色	加曾利式	291Y	表面磨耗/LR縄文
第80図117	土埴	4.2	3.6	1.0	14.4	暗赤褐色	阿玉台式?	136J腹乱	内形: 磨痕文/結節沈着文/金雲母を含む
第80図118	土埴	4.1	3.1	0.9	14.8	暗赤褐色	加曾利式	393Y腹乱	平砥竹管による沈着文/LR縄文
第80図119	土埴	3.7	3.6	1.2	18.6	暗赤褐色	加曾利式	393Y腹乱	Lの減意文
第80図120	土埴	4.5	(3.8)	1.0	19.4	内面: 黒色 外面: 暗赤褐色	加曾利式	13M	LR縄文/欠損あり
第80図121	土埴	4.4	(3.7)	2.7	90.8	内面: 無褐色 外面: 暗赤褐色	器底式	135J腹乱	隆起の付脚/遺痕灰形文/欠損あり
第80図122	土埴	(4.0)	(2.9)	1.5	17.0	内面: 黒褐色 外面: 黄褐色	加曾利式	291Y	Lの減意文/欠損あり
第80図123	土埴	(4.7)	2.7	0.8	10.1	暗赤褐色	加曾利式	遺構外	LR縄文?/欠損あり
第80図124	土埴	(4.0)	3.4	1.1	13.8	内面: 暗赤褐色 外面: 暗赤褐色	器底式?	392Y	無文/欠損あり
第80図125	土埴	3.4	(2.9)	1.3	11.2	内面: 黒色 外面: 暗赤褐色	器底式?	138Y	結節灰形文/欠損あり
第80図126	土埴	3.6	(3.1)	0.8	9.9	内面: 無褐色 外面: 暗赤褐色	阿玉台式	392Y	無文/金雲母・L/白色砂粒を多く含む/欠損あり
第80図127	土埴	(2.5)	2.4	1.3	10.6	暗赤褐色	器底式	138Y	内腹面/無文/欠損あり
第80図128	土埴内腹	4.5	(4.0)	1.2	24.0	暗赤褐色	器底式	135J腹乱	無文/白色砂粒を含む
第80図129	土埴内腹	3.7	(2.9)	1.3	18.0	淡赤褐色	器底式?	13M	減意文/無文?/欠損あり
第80図130	土埴片断	5.4	3.4	1.1	14.8	内面: 暗赤褐色 外面: 暗褐色	器底式?	291Y助土	無文
第80図131	土埴内腹	3.4	2.6	0.9	10.2	暗赤褐色	不明	136J腹乱	無文
第80図132	土埴片断	2.3	2.7	1.2	9.3	暗褐色	不明	392Y助土	無文/内面砂粒を含む
第80図133	土埴片断	2.4	2.4	0.9	6.9	暗褐色	加曾利式	392Y	—
第80図134	土埴片断	2.4	2.3	1.3	8.9	暗褐色	不明	289Y	表面磨耗/竹管文?

(単位: cm・g)

第7表 遺構外出土の上製品一覧

144は須恵器甕形土器の胴部小破片である。色調は灰褐色を呈し、胎土は精練されており、砂粒を僅かに含む程度である。内面はナデ、外面には平行叩き目痕が残る。

以上、138・139は6世紀前葉、140～143は393Yの攪乱内からの出土で、6世紀前～中葉に比定される。144は6世紀代であろう。

(6) 平安時代の土器 (図版35-145～150)

145・146は須恵器甕形土器の胴部小破片である。145は色調が灰褐色を基調とし、断面はセピア色を呈している。胎土は精練され白色砂粒を僅かに含む程度である。146は灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。いずれも東金子製品で、時期は9世紀前葉～中葉であろう。

147は須恵器蓋形土器の天井部付近の破片である。色調は灰白色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。東金子製品で、時期は9世紀代であろう。

148は灰釉陶器の甕形土器の底部小破片である。底部には高台が付く。灰釉は内面に施釉されている。胎土の色調は灰褐色を呈し、胎土は精練され白色砂粒を僅かに含む程度である。

149は土師器甕形土器の頸部から胴部上半にかけての小破片で、いわゆる武蔵型甕であろう。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には角閃石・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面は口縁部が横ナデ、以下横方向に粗いヘラ削りが施される。135Jの攪乱内からの出土で、時期は9世紀代であろう。

150は須恵器甕形土器の胴部小破片である。色調は灰褐色を呈し、胎土には白色針状物質・砂粒を僅かに含む。内外面はヘラナデが施されるが、外面には僅かに平行叩き目痕が残る。鳩山製品で、時期は9世紀代か。

(7) 中・近世の陶磁器・土器 (図版35-151～168、第8表)

151～154は磁器、155～167は陶器、168は土器である。

図版番号	種別	器種	胎土	製作の特徴	釉薬	生産地・系譜	時期	出土位置
図版35-151	磁器	碗	暗灰褐色 緻密	口口成形 絞漉	青磁	中国製	13C	289Y
図版35-152	磁器	碗	白色 緻密	口口成形	透明釉	肥前	16C	
図版35-153	磁器	碗	白色 緻密	口口成形 外面：染付(草文)	透明釉	瀬戸	19C	131J攪乱
図版35-154	磁器	碗	白色 緻密	口口成形 染付	透明釉	肥前	18～19C	131M
図版35-155	陶器	天目茶碗	灰褐色 緻密	口口成形	鉄釉	瀬戸・美濃	17C	291Y
図版35-156	陶器	皿	淡灰褐色 緻密	口口成形	緑色釉	唐津	17C	
図版35-157	陶器	割分碗	黄白色 緻密	口口成形		内面：灰釉 外面：鉄釉	19C	304Y攪乱
図版35-158	陶器	徳利	黄白色 緻密	口口成形	鉄釉	瀬戸・美濃	19C	
図版35-159	陶器	茶碗	黄白色 緻密	口口成形 色繪付(植物文)	灰釉	瀬戸・美濃	19C	134J
図版35-160	陶器	急須	淡褐色 緻密	口口成形 鉄繪(風紋文)	灰釉	瀬戸・美濃?	19C	304Y攪乱
図版35-161	陶器	徳利	灰白色 緻密	口口成形 鉄繪	灰釉	瀬戸	18C	
図版35-162	陶器	徳利	淡褐色 緻密	口口成形	灰釉	瀬戸	18C	289Y
図版35-163	陶器	鉢	淡褐色 やや粗	口口成形	鉄釉	瀬戸・美濃	19C	303Y
図版35-164	陶器	鉢	淡褐色 やや粗	口口成形	鉄釉	瀬戸・美濃	19C	
図版35-165	陶器	三筋盃?	灰褐色 やや粗/砂粒	輪轆み		常滑?	14C	303Y攪乱
図版35-166	陶器	盃	暗灰褐色 やや粗/白色砂粒	輪轆み	信押直	常滑	16C	303Y攪乱
図版35-167	陶器	燗鉢	灰褐色 やや粗/白色砂粒	輪轆み	信押直		16C	303Y攪乱
図版35-168	土器	信筒	黄褐色 やや粗/金泥母・砂粒	輪轆み		在地系	不明	

第8表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧

第3章 調査のまとめ

今回の西原大塚遺跡第67地点の調査では、縄文時代中期後葉の住居跡8軒・土坑8基・集石1基、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡8軒・獨立柱建築遺構1棟、平安時代の土坑1基・溝跡1本を検出した。

ここでは、特に縄文時代中期後葉の住居跡と出土土器について考えてみることにする。

第1節 縄文時代中期後葉の住居構造について

(1) 住居形態について

住居構造の主な特徴は、第9表に示した通りである。

まず、8軒の住居跡の平面形については、円形・楕円形・隅丸方形・六角形の4種類に分類できる。今回の土器編年で設定した時間軸上では、円形・楕円形・隅丸方形は1・2期の古い時期に、六角形は3～5期の新しい時期に比定される。

規模については、135Jが最も小型で、4m台であり、最も大型の134Jが6.6m程度である。平均的には、5～6m程度と言えるであろう。

壁溝の有無については、円形が六角形の88・131・132・134Jにはすべて確認できたが、円形と楕円形の135・136Jには確認できなかった。隅丸方形では、35Jには確認できなかったが、133Jでは確認できた。今回は住居跡の軒数が少なかったため、全体的な傾向を示しているとは限らないが、3～5期の六角形のすべての住居跡で壁溝を確認することができた。これについては、壁溝の機能についても関係するが、住居の上屋構造に関係するものであるのか、それとも壁溝そのものが、排水機能といったような役割を果たすためであるのかなど、今後追究する必要があろう。

遺構名	時期	平面形	規模 (m)	壁溝	伊の形態		壁溝			備 考
					形態	埋埋部の土器形式	有無	姿勢	土器形式	
135J	1期	円形	不明×4.40	無	埋埋部	加賀利式	無	-	-	133Jに切られる
35J	2期	隅丸方形?	不明	無	A 石周り B 地床石	-	無	-	-	両壁寄りのピットは入口障子穴と思われる /88Jに切られる
135J		隅丸方形	5.12×4.50	有	石周り	-	無	-	-	135Jを切る
136J		楕円形	5.25×4.82	無	石周り	-	無	-	-	両壁寄りのピットは入口障子穴と思われる
88J	3期	六角形?	5.70×5.50	有	A 石周り埋埋部 B 地床石	透沢文	無	-	-	壁溝が応接することから低壁住居と考えられる /35Jを切る
131J		六角形	不明×5.20	有	石周り	-	有	正位	透沢文	柱穴が重なり形跡を呈することから建替住居と考えられる
132J	4期	六角形	不明×6.10	有	A 地床石 B 地床石	-	有	正位	加賀利式	柱穴が重なり形跡を呈することから建替住居と考えられる
134J	5期	六角形	不明×6.66	有	A 石周り B 地床石	-	不明	-	-	両壁間は破壊されているため壁溝の有無は不明

第9表 各住居跡の主な特徴

(2) 炉跡・埋壺について

炉跡の形態については、地床炉・埋壺炉・石囲炉・石囲埋壺炉の違いが見られる。また、炉の数は、必ずしも1住居に1つという規則性をもつものではなく、35・134Jには地床炉と石囲炉、88Jには地床炉と石囲埋壺炉、132Jには地床炉2つというように8軒中4軒で2つ設置されていた。傾向として、埋壺炉は1期のみで、2期以降は地床炉・石囲炉が一般的なものと言えるであろう。また、埋壺炉として使用された炉体土器を系統別に見ると、1期の135Jでは加曾利E式、3期の88Jでは連弧文系というように連弧文系の盛行期ともいえる3期では炉体土器に連弧文系が取り入れられたものと考えられる。

埋壺については、131・132Jの2軒で設置が確認された。埋壺の姿勢はいずれも正位であった。特に、132Jの埋壺内から鎌と土器片が出土したが、この状況が埋納行為を示しているかは不明である。

第2節 縄文時代中期後葉の土器について

(1) 土器様相と編年 (第81図)

今回検出された縄文時代中期後葉の住居跡からは多くの土器・石器が出土した。ここでは、出土土器の様相と編年について考えることにする。まず、時期と時間幅を把握するため、埼玉県入間市水産遺跡における銅年(谷井・細田 1997)を基準に各住居出土の加曾利E式土器の細分を行った。その結果、おおよそ加曾利E I式後葉、E II式前葉・中葉・後葉、E III式のおよそ1～5期に連続する時間幅で対応することが可能と言えるであろう。また、土器の特徴から加曾利E式・曾利式・連弧文系の3系統の土器群に大別できることから、ここでは、各期の土器様相を系統別にまとめることにしたい。

— 1 期 — (加曾利E I式後葉) 135号住居跡

今回の地点で検出された資料の中では、最も古い時期に位置付けられる土器群である。2期に比定される133Jに切られる135Jの存在と頸部無文帯を有し、捺糸文を地文とする加曾利E式土器の存在から、良好な資料はないものの2期の前段階に1期を設定した。曾利式・連弧文系土器には良好な資料はなかった。

【加曾利E式土器】

土器の全体を把握する資料はない。11は頸部無文帯と11線部文様帯をもち、胴部との境は2本の降帯が巡らされ、その下端に降帯による懸垂文が施文される土器である。12は頸部は無文で、胴部に地文のRの捺糸文が施される土器である。特に12のように頸部と胴部地文との境に区画文を持たない土器は、埼玉県ふじみ野市(旧人井町)西ノ原遺跡(今井・坪田・鍋島 1996)で西ノ原8期に比定される60号住居跡出土土器(13)と同類と言える。西ノ原8期は加曾利E式直前・加曾利E I古式期に位置付けられている。

— 2 期 — (加曾利E II式前葉) 35・133・136号住居跡

1期に比定される135Jを切り、133Jが存在することと3期に比定される88Jが35Jを切ること、さらに後出する特徴である磨消縄文の皆無ということから、大まかな位置付けとして2期を設定した。本

地点における曾利式・連弧文系土器の出現期と言える。

〔加曾利E式土器〕

この時期で新たに頸部無文帯を欠くキャリパー形の土器群が一般化する。しかし、同時に133J-2のように地文に燃糸文をもち、頸部無文帯を有さないE1式前葉に位置付けられるような土器や133J-3のようにE1式後葉の特徴である頸部無文帯を有し、口縁部文様には降帯による渦巻つなぎ弧文を特徴とする土器が共存することから、新旧の要素が混在するのが特徴とも言える。また、133J-3の胴部と頸部との境に施文された3本単位の横線文は、2本の降帯の置換と考えられ、頸部無文帯の幾分狭い特徴は、E1式後葉のものより後出タイプと把握できるであろう。地文は口縁部がLR縄文で、胴部がLの燃糸文が使用されていることも新旧の要素が混在している。

88Jに切られ、新旧関係が明らかになった35Jの加曾利E式の1~3は、いずれも口縁部文様帯をもち、1には渦巻つなぎ弧文、2・3には単位的な渦巻文と楕円区画文が施文される。2は2本の沈線による横位沈線文と懸垂文の沈線間は磨消状に磨かれているため、磨消縄文の初現段階の様相である可能性がある。また、懸垂文は、降帯表現がなくなり、すべて沈線表現である。1の3本単位の沈線も降帯の置換として捉えられるであろう。地文については、3が燃糸文であるが、他はLR縄文が口縁部から胴部にかけて縦方向に施文されるもので、縄文の多用化に強調されるようである。

〔曾利式土器〕

133Jからまとまって出土している。口縁部の特徴からみると、無文のものや重弧文・斜位の沈線文が施文されるもの、それと133J-5のように口縁部直下に沈線文をまわし、そこから懸垂文を施文するもの、133J-8のように半截竹管による短沈線を縦位に施文し、以下はLの粗い燃糸文が施されるもの、133J-59のように 断面を思わせるような突起が付され、口縁部に重弧文が施文されるものとバラエティーが豊かである。133J-6の胴部に横位沈線文が施文される土器は、当市では珍しい。

口唇部形態については、一貫して内削ぎ状あるいは平坦に面取りされる点に注目される。これは、4期以降の丸く仕上げられているものとは対照的であることから、古い様相を示す特徴と言えるであろう。さらに、口縁部幅に着目し、35J 4・133J 8と4期の132J-11の無文のものを比べると前者は幅が広く、後者は狭くなっているのは一目瞭然である。132J 12の重弧文のものについても極端に口縁部幅が狭く詰まった感じであると理解できる。

〔連弧文系土器〕

水窪編年では、連弧文は加曾利EⅡ式中葉の段階に出現すると分析されているが、今回の調査では、やや古い段階での出現となる。

この時期の連弧文系土器についても133Jからまとまって出土している。133J-11は口縁部に2段の連弧文が施文され、胴部区画文の下方には懸垂文が施文される。懸垂文は、加曾利EⅡ式の接触により採用されたものであろうか。

連弧文系の視覚的な変化を最も見出せる特徴として、口縁部直下と胴部に施文される横位沈線文の存在と連弧文の変化であろうか。この2つの特徴は、2~4期を通じては変化はないが、5期では口縁部直下の横位沈線文が消滅し、連弧文は波状文に変化している。

一 3 期一 (加曾利EⅡ式中葉) 88・131号住居跡

2期に比定される35Jを切る88Jの存在と4期の加曾利E式に大きな特徴である磨消懸垂文を特徴と

する土器の不在を理由に3期を設定した。加曾利E式土器については、この時期に良好な資料は出土しておらず、代わって炉体土器や埋藏にも例えば88Jのか体土器に88J-2、131Jの埋藏に131J-1の連弧文系土器が採用されることを併せて考えると加曾利E式土器の一時的な消長と連弧文系土器の盛行が窺える。

【曾利式土器】

88Jから僅かに出土している。今回88J-3は、曾利式土器として扱ったが、この土器は胴部懸垂文の一部に大柄渦巻文といった特徴的なモチーフをもつ。この大柄渦巻文については、谷井 彪氏の詳細な研究(谷井 2003)があるが、この中で渦巻文の起源を「大木式に求めることに大方の異存はない」とし、さらに大柄渦巻文は、「腕山類と加曾利E式キャリバー形土器の胴部に渦巻文の展開する2タイプ」に分類し、大柄渦巻文で最も古相を示す埼玉県内の例として島の七遺跡1件例をあげ、加曾利EⅡ式中葉段階に比定している。

近隣の大型渦巻文をもつ土器として、ふじみ野市西ノ原遺跡77号住居跡から1点出土している。ここでは、大木系の中で捉えられており、時期は西ノ原9b期(加曾利EⅠ新期中相)に比定されている。しかし、88J-3は、島の上遺跡、西ノ原遺跡の例と比べると大柄渦巻文の他に蛇行文・直線文の懸垂文が併用され、懸垂文を構成する一部としての傾向が強くなっているため、後出タイプとも言えるであろう。

【連弧文系土器】

前述したが、炉体土器や埋藏にも連弧文系土器が採用されていることから、連弧文系土器の盛行期と言えるかもしれない。

この時期の連弧文系土器の特徴は、特に前時期のものの変化を見出すことが難しいが、131J-1の地文に関して、施文具は捻糸であるが、その使い方として、通常の回転させるものではなく、条線文のように引いて使っている点にある。これと同様な使い方をしている土器に4期の132J-11の曾利式土器がある。類例としては、少ないため結論付けることは遅けた方がいいと思われるが、3期以降の特徴と言えるかもしれない。

■ 4 期 ■ (加曾利EⅡ式後葉) 132号住居跡

132号住居跡の1軒が該当する。加曾利E式では、3期の特徴がはっきりとしなかったが、胴部に磨消懸垂文をもつ土器の出現期と言える。曾利式土器では、2期に比べ、口縁部幅が狭く、口縁部形態の丸いものが主体となっている。連弧文系土器については、全体を把握できる資料は出土していない。

【加曾利E式土器】

胴部に等間隔の磨消懸垂文をもつ土器が出土する。しかし、2のように頸部無文帯をもち、口縁部は渦巻つなぎ弧文、胴部は彎帯による懸垂文が施文され、地文に捻糸文が施される土器が共存しているのも実態と言える。これについては、この土器が埋藏施設土器であることに起因するのであるか。岩手県盛岡市柿ノ木平遺跡(岩手日報ニュース <http://www.iwate-np.co.jp/news/y200106/n20010629.html>)では、住居建築と土器埋設を同時に行ったという事例が報告され、住居構築時に埋藏という行為が行われている可能性が指摘されている。そのため、他の出土遺物とは時代差を有する要穴になったということも考えられる。なお、2は頸部無文帯をもつが、口縁部から胴部上半にかけての屈曲の少ないキャリバー形の器形は、133J-3や加曾利EⅠ式後葉のものとは標相が異なるものであり、やはり

後出タイプと言えるであろう。

また、この時期に最も新しい様相である24が共存していることも見逃せない。この土器は口縁部から胴部にかけて「T」字状の磨消懸垂文が施文される土器で、この土器を最新と考えれば、次期の5期（加曾利EⅢ式期）に下ることになってしまうが、ここでは4期として扱った。

〔曾利式土器〕

口縁部無文の土器が目立つ。11の無文帯は2期の133J-6に比べ、狭いものとなっており、口唇部形態が丸いものになっていることで相違する。同時に口縁部文様帯の狭い傾向にあることは、12の重弧文の施文される土器についても133J-7と比べ言えるであろう。

— 5 期 —（加曾利EⅢ式）134号住居跡

最も新しい時期に位置付けられる土器群である。特に、加曾利EⅢ式土器には、1のように4単位の小波状口縁を呈し、胴部には磨消懸垂文が施文された加曾利EⅢ式土器が出現している。

曾利式・連弧文系土器は、4期では曾利式土器が多い傾向であったが、この時期ではやや減少傾向にあると言える程度である。連弧文系土器は、文様パターンに決定的な違いが見られ、連弧文の典型的なモチーフが崩れ、波状文に変化したもの、2段目の連弧文の位置に円形文などのアレンジされた文様が付加されたものが出現している。

〔加曾利EⅢ式土器〕

小波状口縁を呈し、口縁部文様帯と胴部文様帯の区分が4期以前のように明確ではない土器が主流になると考えられる。水産編年の加曾利EⅢ式の様相に相当し、これ以後は口縁部文様帯をもたない土器群との共存をみることになるであろう。

〔曾利式土器〕

4期に比べ、減少傾向にあると言える。8は口縁部に重弧文が施文される土器であるが、重弧文との境にはさらに重弧文を埋め込み、その下部には双渦文風の文様が描かれている。2期の133J-7の土器に比べ、文様がアレンジされており、すべて沈線による表出であることも特徴付けることができる。

〔連弧文系土器〕

この時期での連弧文のモチーフは、きれいな弧が連結する文様ではなく、上下に振幅する波状に変化しているものである。この様相は、桐生直彦氏が区分する第V段階の1崩れた波状のものが目立つようになる、段階に相当するものと考えられる（桐生 1994）。埼玉県春日部市竹之下遺跡（加藤・中野 1998）でも加曾利EⅢ式期に比定される17号住居跡出土の3の土器が134J-1と同類であり、それに伴う連弧文系土器は、連弧文が崩れたものであることにも一致する。

さらに、11の小波状口縁を呈する土器は、1の加曾利EⅢ式土器の口縁部形態に類似するため、この段階での加曾利EⅢ式土器との密接な接触により発生したのと考えられる。

（2）土器の属性分析

前項では、加曾利EⅢ式・曾利式・連弧文系の土器編年を系統別に見てきたが、ここでは、系統別に土器を抽出し、それぞれの属性を分析することにより、判明した事項をまとめることにしたい。

1. 加曾利EⅢ式土器

口縁部形態・文様構成の2要素を基本にさらに口縁部・頸部・胴部に又分し、文様と地文についての

属性を分析した（第10表）。

〔口縁部形態〕

各期を通して平口縁が基本である。波状口縁を呈するものは、2期の136J-1と4期の134J-1がある。前者は渦巻文が単位的に配置される変化の中、渦巻文の拡大部分が波首部として表出され、後者は口縁部文様帯の退化減少の中、前者の小渦巻文の単位が欠落したものであろうか。

〔文様構成〕

口縁部文様帯には、渦巻文・枠状区画文・渦巻つき弧文が主文様として採用されている。さらにこれらの表現には、隆帯・沈線・隆沈線の3種類が存在する。全体傾向としては、隆沈線による枠状区画文が目立つが、この文様は7期に多く見られることから、渦巻文が単位的に配置される変化の中で渦巻文の余白部分が有効使用され発展したものと考えられる。

胴部においては、区画文と無文帯の有無を観察ポイントとしたが、まず区画文については、2期を中心に無文帯をもたないものは、隆帯1本で表現されるものが多い。また、1・2期で区画文をもたない135J-12と35J-2は無文帯をもち、これはふじみ野市西ノ原遺跡8・9期にも同現象が見られることから、無文帯をもつ土器として定型化する過程で一時的に出現する土器群であると考えられる。

胴部文様帯では、隆帯と沈線による懸垂文を分類し、沈線ではさらに磨消懸垂文の有無を観察した。これによると、隆帯の採用は主に1・2期であり、4期以降は沈線による等間隔の磨消懸垂文が主流となる。しかし同時に沈線により磨消縄文をもたない土器群が1～3期を通じて存在し、4・5期でも磨消縄文をもつ土器群と対照的に存在することは、伝統的に加曾利E式の範疇ではない土器群とも言えるかもしれない。

〔地文〕

胴部の地文では条線が見られないことに注目される。傾向として、4期以降に縄文が圧倒的に多いが、2期では位巴跡単位で燃糸文と縄文の使われ方に相違があるようである。133Jには燃糸文、35・136Jには縄文が採用されている。なお、133-3は口縁部に縄文、胴部に燃糸文と異なった地文が採用されているのは珍しい。

また、今回の資料の中で、胴部地文に複節縄文が採用される土器が僅かに見受けられた。これらの土器の帰属であるが、132J-4が加曾利E式土器であることから、縄文のみの破片である場合、今回加曾利E式土器に分類してしまったが、132J-6や竹之下遺跡第17号住居跡出土土器（3）のように連弧文系土器に複節縄文が採用されていることから、一概にすべてを加曾利E式系土器に比定するのは危険であるという結論である。

2. 曾利式系土器

口縁部形態・文様構成・地文の3要素を基本にその属性を分析した（第11表）。

〔口縁部形態〕

口縁部形態については、各期を通じて一貫して平口縁であることに注目される。波状口縁については、もともと加曾利E式の要素であると考えられ、今回88J-2や134J-12のように連弧文系土器にも影響を与えたものと思われるが、曾利式土器には波状口縁は普遍である。さらに口縁部形態を細かく見ると単純口縁と装飾されたものが存在する。特に単純口縁の口唇部については、大きな違いが見られ、口唇部を水平あるいは内削ぎ状に面取りしているものとただ丸く仕上げられているものに分けることがで

きる。前者は、2期を中心とする特徴で、後者は3期以降に一般化する特徴であることから、この口縁部成形には新旧の差があるものと言える。

また、口縁部文様帯の幅にも注目することができる。すでに2・4期の曽利式土器でも説明したが、2期より4期の方が口縁部文様帯の幅が狭くなる傾向にあると言える。

【文様構成】

文様構成として、口縁部・口縁部と胴部の境界区画・胴部に分けて観察することにした。まず口縁部は無文のものと同重弧文が目立つ。133J-9の1点は斜位沈線が斬文されるものである。5期の134J-8の重弧文には、重弧文との境にはさらに重弧文を埋め込み、その下部には双渦文風の文様が付加されアレンジされたものに変化している。

口縁部と胴部の境界区画は、隆帯による表現が多く、波状文1本は2期に多く、直線文は3期に多い傾向がある。また、突起をもつ上器に132J-11・13があるが、この突起の形状は、谷口康浩氏が曽利式のオリジナルの1つと考える「X把手」(谷口 2002)ではなく、「X」の片方が欠け耳たぶ状に変化したものであることに注目したい。

胴部には懸垂文が施文されるのが一般的であるが、133J-6には懸垂文がなく、横位沈線文に微隆起の棒状貼付文が上下鳥状に配される土器は、当市では珍しく、埼玉県富士見市中沢遺跡25・29号住居跡(早坂・隈本 1999)・水窪遺跡10号住居跡出土土器に類似がある。懸垂文は直線文だけではなく、蛇行文と組み合わせられたものが多く、この蛇行文は多分に曽利式の要素であると考えられる。そのため今回はこの蛇行文をもつ懸垂文について、加曽利E式か曽利式か取り扱いに苦慮することになった。結果的には、胴部だけの破片である場合、加曽利E式に分類してしまったが、全体像が判明している35J-4や132J-12についてもこれらの縄文を地文とする土器がすでに曽利式のオリジナルではないということは、これらの扱いも厳密には曽利式であるのか曽利式系とするのか研究者の中で見解が分かれることになるであろう。さらに、35J-4は口縁部無文帯をもつ加曽利E式として扱われてもおかしくない。つまり、曽利式とした名称の規定にも関係するが、今後、どの型式がベースで、どの型式の属性を取り入れているのかについては、かなり研究者の中で見解の相違が生じる可能性がある。

【地文】

谷口氏によると曽利式土器の地文のオリジナルは縦位条線文であるが、条線文が懸系文や縄文に置換されたものが出土し、むしろ一般的でもある。また、条線文でも横位に施文された133J-6や懸系文の施文具でも回転させずに、条線文で表現されている132J-11など、オリジナルからかなりアレンジされたものが存在する一方、違った形でオリジナルに似せようというものもあるように見受けられる。























3. 連弧文系土器

口縁部形態・文様構成・地文の3要素を基本にその属性を分析した(第12表)。

【口縁部形態】

口縁部形態は、平口縁が圧倒的に多いが、3期の88J-2は大波状口縁、5期の134J-12は小波状口縁を呈する。波状口縁については、加曽利E式土器の口縁部に見られる小突起や渦巻文の配置に関して表現されることが多いため、連弧文系土器に見られる波状口縁は、加曽利E式土器の影響によるものと考えられる。

【文様構成】

時期	住居番号	加曾利E式系
1期 (F1式後葉)	135J	 11  12
2期 (EⅡ式前葉)	35J	 1  3  2  5
	133J	 2  4  10  3
	136J	 1  2
3期 (EⅡ式中葉)	88J	
	131J	
4期 (EⅢ式後葉)	132J	 2 ★  4  24  3  7  5
5期 (EⅣ式)	134J	 1  2  3  9

第81図 西原大塚遺跡第67地点の土器編年図

(縮尺は1/14、小破片を除く)

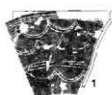
(●印 砂体土器、★印 埋蔵)

曾利式系

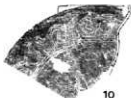
蓮弧文系



浅鉢形土器



★



(縮尺は1/14、小破片を除く)

文様構成については、口縁部と胴部に施文される連弧文の段数、沈線の本数そして地文に分けて観察することにした。まず、連弧文の段数であるが、口縁部に1段、胴部1段が多いが、2・3期の古い段階の133J-11・88J-1・2は口縁部に2段で構成され、特に2期には胴部に懸垂文が施文される133J-11や多段構成される133J-13などの二器も見られる。最新の5期では、口縁部に1段、胴部1段が基本と思われるが、134J-4のように胴部に省略されるものが出現するなど、連弧文の段数は口縁部・胴部ともに新しくなると省略傾向があると言える。

次に沈線数では、口縁部直下と胴部に巡らされる区画沈線と連弧文に注目した。沈線数で全体に言えることは、各期を通して3本単位が多いことから、基本単位としてなりうる可能性がある。沈線文に列点文が伴うものは2期に限定できるが、ふじみ野市西ノ原遺跡では、連弧文系土器の最終段階である西ノ原13・14期にも見られることから、一概に新旧判断には成り得ない。また、5期では口縁部直下の沈線文が省略された134J-10が出現している。これも省略傾向の1つと言えるであろう。

連弧文のモチーフは、5期の連弧文系土器の中でも説明したが、5期のすべてが波状文に変化していることに注目される。3本単位の134J-10・11、2本単位の134J-12であるが、134J-10は口縁部の連弧文の直下に円形文あるいは重弧文が付加されている。この円形文が付加される上器はふじみ野市西ノ原遺跡の西ノ原13期にも見られ、連弧文のモチーフが波状文へ変化する段階に口縁部にあった2段の連弧文が1段へ省略される際に下段の連弧文がアレンジされたものと推測される。

この様相は、榎生貞彦氏が区分する第V段階の「崩れた波状のものが目立つようになる」段階に相当するものと考えられる（榎生 1994）。埼玉県春日部市竹之下遺跡（加藤・中野 1998）でも、加曽利EⅢ式期に比定される17号住居跡出土の3の土器が134J-1と同類であり、それに伴う連弧文系土器は、連弧文が崩れたものであることにも一致する。

【地文】

地文については、捺糸文が2・3期、条線文が2～5期を通して採用されている。4・5期では新たに縄文が採用されている。

これについて榎生氏は、本地点の5期に相当する第V段階には「地文は縄文約45%・条線約30%・捺糸文約25%を示し、条線は減少する」とし、縄文はやや増加傾向にあるというが、134J-10・11は条線文であり、捺糸文も皆無である。さらに出現段階の第Ⅲ期には「条線・縄文・捺糸文がほぼ同数を示す」と分析されるが、今回の調査では、3期の131J-21の小破片のみに縄文が採用されているだけで、大きく様相が異なる結果となった。これについては、地域差である可能性もあり、今後の資料の蓄積を待って解明すべき問題であろう。

（3）異系統土器の相関関係（第82図）

以上、加曽利E式・曾利式・連弧文系土器という3系統の上器群を時期・系統別に説明してきたが、これらの異系統土器の相関関係を示したのが第82図である。

これによると、加曽利E式土器を中心として曾利式土器や連弧文系土器に影響を与えている状況が捉えられるものと思われる。以下に各系統間での関係を表すことにする。

【加曽利E式土器-曾利式土器】

今回、曾利式土器については、谷口康浩氏の研究（谷口 2002）を参考にしたが、谷口氏は、関東地方に分布する曾利式土器の中には、オリジナルな曾利式とほとんど変わらない原型に忠実な作品があ

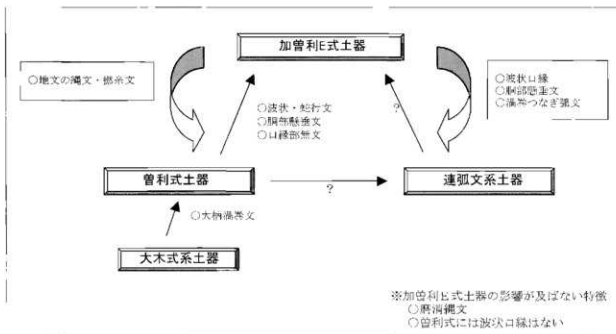
る一方、明らかに変形した土器も少なくない。しかも、後者に認められる変形の程度はさまざまである。これらの差異は、「土器製作者が接していた曾利式土器の型式情報量の差異に還元できる」と説明している。曾利式土器のオリジナルについての認識であるが、谷口氏によれば、主要型式である「長割縁類型・紐線文類型・X把手変類型」の3系統に「a）内側に屈曲して鉤状に肥厚する口縁部、b）地文の条線文、c）流線で表出される胴部懸垂文」の特徴を最も重要な要素としている。そして、A群をオリジナルな曾利式に忠実な一群、B群を文様の細部の特徴や型式情報の編集に変形が生じている一群、C群を変形が著しくオリジナル標本の中にすでに類例を見出せない一群に分類している。谷口氏の論考を参考し、本地点出土の曾利式土器を見てみると、A群は皆無であろう。C群については、やや判断がしづらいが、133J-5・8、134J-8が挙げられそうである。その他はすべてB群に分類できるものと考えられる。

以上のように谷口氏は、「型式情報量の差異」として、曾利式土器の特徴の差異を説明しているが、本地点の曾利式土器がオリジナルな曾利式土器ではない要因は、他系統の土器群の介在による「型式情報」の伝達の妨げにあると考えられる。つまり、オリジナルな曾利式土器に見られない地文の縄文・捺糸文は多分に加曾利E式土器の影響によるものと考えられる。

逆に曾利式土器から加曾利E式土器に影響を与えたと考えられる要素としては、「口縁部や胴部に施文される波状・蛇行文、胴部懸垂文であろう。さらに今回は口縁部が無文であるキャリパー形の土器についてをすべて曾利式土器として捉えたが、これについては、ふじみ野市西ノ原遺跡では、加曾利E式土器として、宮上見市中沢遺跡でも「加曾利E：口縁部無紋系」として分類されている。

〔加曾利E式土器-連弧文系土器〕

波状口縁を呈する土器は、今回の資料中、加曾利E式土器では136J-1と134J-1、連弧文系土器では88J-2と134J-12の計4点であった。この波状口縁については、前述したが多分に加曾利E式



第82図 異系列土器における相関関係図

上器の要素と考えられる。

胴部懸垂文についても柄位区画の文様構成を基本とする連弧文系上器では、133J-11のように胴部に懸垂文が施される土器は珍しいと思われる。この特徴は胴部懸垂文の発達した曾利式土器からの影響であるかもしれないが、ここでは直線文を中心とする単純な懸垂文であることから、直接的には加曾利E式土器の影響と理解したい。

また、連弧文のモチーフであるが、これはもともと加曾利E式土器の口縁部文様帯に施文された「S」字状文・渦巻文が横に展開し、単一的な文様に変化する過程の中で誕生したと考えられる「渦巻つなぎ弧文」から派生したのではないであろうか。これは渦巻つなぎ弧文の衰退と連弧文系上器の出現の時期がほぼ同時期であることから理解できるかもしれない。

連弧文系土器から加曾利E式土器に影響を与えたと考えられる要素としては、見出すことができなかった。これについては、おそらく連弧文系土器の成立や変化の背景には、確固とした連弧文モチーフを基本とした伝統性を保持しながらも加曾利E式土器の新しい特徴を吸収し組み合わせるという比較的自由的なシステムが完成していたと考えられる。その結果、折衷様の土器である咲畑式土器（岩瀬 1991）などの誕生にもつながったものと想像することができる。

しかし、金子直行氏が説明するように、連弧文系土器のスタイルは加曾利EⅡ式に大きな影響を与え、新しいタイプの土器を生み、キャリパ形土器に影響を与えた（金子 1996）というのが一般的な考えなのであろう。

〔曾利式土器－連弧文系土器〕

今回この両者の相関関係に興味を持っていたが、相互間での属性の共有は、顕著に目立ってはいないと言えるであろう。これが、加曾利E式の仲介的な接触によるものなのかなどの理由は、明確な答えを持ち合わせていない。例えば、曾利式の口縁部に見られる重弧文や133J-8の曾利式の胴部に見られる重弧文が、連弧文系に関係するのかわかり不明である。

〔曾利式土器－大木式系土器、その他〕

谷井氏の詳細な研究により、曾利式土器に分類した胴部に大柄渦巻文のモチーフをもつ88J-3を大木式系土器にその起源を求めることができた。このことから、大木式土器は曾利式土器の基本的な胴部文様構成に関与していることで、関東の上器群への影響は甚大であったことが窺える。

その他として、加曾利E式土器が曾利式・連弧文系土器に影響を与えなかった属性について触れてみたい。これについては非常に不思議であると思っていることであるが、4期以降の特徴である磨消懸垂文の採用である。この磨消懸垂文について、可能性として他系統にあってもいいのではないかと想定できるが、実際のところ曾利式・連弧文系土器には皆無という結果であった。おそらく、加曾利EⅡ式後葉直後における曾利式・連弧文系土器の衰退が背景にあったのではないかと想像できるが、今後の課題としたい。

（4）まとめ

以上、今回は西原大塚遺跡第67地点における限られた資料により、縄文時代中期後葉の土器について編年作業を試みたが、数量の把握も行っていない未完成な土器編年であることは間違いない。今後は、

西原大塚遺跡全体の中で土器編年の整備を早急に行い、次なるステップとして集落の細かな動向や展開を追究する必要があるであろう。

最後に今回の土器編年を近隣において最も詳細な土器編年が組まれている、ふじみ野西ノ原遺跡の編年と照合するとおおよそ以下の通りであろう。

本地点1期	→	西ノ原遺跡10期(加曾利EⅠ新期)
〃 2期	→	〃 11期(加曾利EⅡ古相)
〃 3・4期	→	〃 12期(加曾利EⅡ中相)
〃 5期	→	〃 13期(加曾利EⅡ新相)

[引用・参考文献]

- 今井 亮・坪田幹男・編島直久 1996『西ノ原遺跡I大井町遺跡調査報告第6集 埼玉県大井町遺跡調査会』
 今井 亮・坪田幹男・土本 匠 1998『地井遺跡I大井町遺跡調査報告第8集 埼玉県大井町遺跡調査会』
 岩森彰利 1991「埴畑式土器の分布とその背景—縄文時代の通地帯—」『河考古』第4集 三河考古刊行会
 尾形則敏 1990「第2章 西原大塚遺跡第8地点の調査」『志木市遺跡群II』志木市の文化財第14集 埼玉県志木市教育委員会
 尾形則敏・依々木保俊 1990「志木市遺跡群II」志木市の文化財第14集 埼玉県志木市教育委員会
 尾形則敏・深井忠子 1996「志木市遺跡群III」志木市の文化財第23集 埼玉県志木市教育委員会
 加藤 晃・中野達也 1998『竹之下遺跡』春日部市遺跡調査会報告書第6集 春日部市遺跡調査会
 金子直行 1996「加曾利E式土器」『日本土器事典』雄山閣出版株式会社
 程生直彦 1994「埴畑式土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器II 雄山閣出版株式会社
 黒尾和久・小林謙一・中山京治 1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム 縄文中期集落研究の現状』縄文時代中期集落研究グループ 宇都木台地区考古学研究会
 谷井 彪・宮崎朝雄・大塚孝司他 1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』財団法人 埼玉県歴史文化財調査事業団
 谷井 彪・藤田 謙 1997「水窪遺跡の研究 加曾利E式土器の編年と曾利式との関係からみた集落性—」『研究紀要』第13号 財団法人 埼玉県歴史文化財調査事業団
 谷井 彪 2003「縄文時代中期終末と後期前期の接点—鹿山塚をめぐって—」『埼玉県立博物館紀要—28』 埼玉県立博物館
 谷口康浩 2002「縄文土器型式情報の伝達と変形—関東地方に分布する曾利式土器を例に—」『土器から探る縄文社会』2002年度研究会資料集 山梨県考古学協会
 東海大学校地内遺跡調査団 2003「第12回 足もとに眠る歴史展 掘りと結びの考古学」
 早坂廣人・阪本健介 1999『勝瀬原遺跡群発掘調査報告書』富士見市遺跡調査会調査報告第52集 富士見市遺跡調査会
 福島県立博物館 1991『古典展 縄文絵巻—土器に宿る情景たちの歴史—』

[付 編]

自然科学分析

出土動物遺体について

黒澤 一男 (パレオ・ラボ)

今回の調査では、88Jの炉床より検出された骨片について観察を行なった。以下に実体顕微鏡下での観察結果を記す。

骨片試料は、5mm以下の細かな破片となっている(図版36)。これらの破片はその形態から2つに区別され、1つは竹の表面を占める緻密質の破片で、竹厚が1mm程度のもの、もう1つは竹の内部に見られる海綿質を一部付着した緻密質であり、緻密質の竹厚は0.2mm程度である。これらの状態は、チョーク化して白色になっており、脆い状態である。そのため海綿質は緻密質に付着している部分のみが残存し、全体の傾向を観察することができない。

以上のことからこれらの骨片について部位や動物種の同定することは不可能である。

图 版



1. 調査区近景



2. 基本層序



3. 35号住居跡遺物出土状態



4. 35号住居跡遺物出土状態



5. 35号住居跡遺物出土状態



6. 35号住居跡遺物出土状態



7. 35号住居跡跡A・B



8. 35号住居跡



1. 35·88号住居跡



2. 88号住居跡遺物出土状態



3. 88号住居跡炉跡



4. 88号住居跡壁溝



5. 88号住居跡



1. 131号住居跡遺物出土狀態



2. 131号住居跡炉跡



3. 131号住居跡甕



4. 131号住居跡



5. 132号住居跡遺物出土狀態



6. 132号住居跡遺物出土狀態



7. 132号住居跡遺物出土狀態



8. 132号住居跡遺物出土狀態



1. 132号住居跡調査風景



2. 132号住居跡埋装付近



3. 132号住居跡埋装



4. 132号住居跡



5. 133号住居跡遺物出土状態



1. 133号住居遗迹出土状态



2. 133号住居遗迹出土状态



3. 133号住居遗迹出土状态



4. 133号住居遗迹出土状态



5. 133号住居遗迹出土状态



6. 133号住居遗迹出土状态



7. 133号住居遗迹附近



8. 133号住居迹



1. 134号住居跡発掘風景



2. 134号住居跡遺物出土状態



3. 134号住居跡遺物出土状態



4. 134号住居跡遺物出土状態



5. 134号住居跡炉跡A



6. 134号住居跡炉跡B



7. 135号住居跡



8. 135号住居跡



1. 136号住居跡遺物出土状態



2. 136号住居跡遺物出土状態



3. 136号住居跡遺物出土状態



4. 136号住居跡跡



5. 452号土坑



6. 453号土坑



7. 454号土坑



8. 455号土坑



1. 456号土坑



2. 457号土坑



3. 458号土坑



4. 459号土坑



5. 22号集石遺物出土状態



6. 22号集石遺物出土状態



7. 22号集石掘り方



8. 22号集石調査風景



1. 138号住居跡



2. 138号住居跡



3. 138号住居跡貯藏穴



4. 289号住居跡



5. 291号住居跡炭化材出土状態



6. 291号住居跡炭化材出土状態



7. 291号住居跡粘土出土状態



8. 291号住居跡



1. 391号住居跡硬化面



2. 391号住居跡掘り方



3. 392号住居跡



4. 392号住居跡炉跡付近



5. 392号住居跡遺物出土状態



6. 392号住居跡貯蔵穴と入口梯子穴



7. 393号住居跡



8. 393号住居跡貯蔵穴



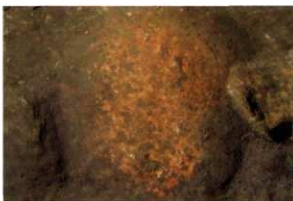
1. 395号住居跡発掘風景



2. 393・394号住居跡



3. 396号住居跡



4. 394号住居跡跡



5. 395号住居跡



6. 395号住居跡遺物出土状況



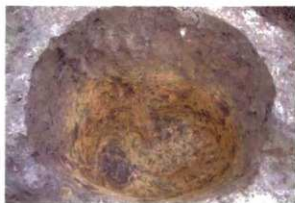
7. 2号掘立柱建築遺構 柱穴A土層断面



8. 2号掘立柱建築遺構 柱穴A



1. 2号掘立柱建筑遺構 柱穴B土層断面



2. 2号掘立柱建筑遺構 柱穴B



3. 2号掘立柱建筑遺構 柱穴C土層断面



4. 2号掘立柱建筑遺構 柱穴C



5. 451号土坑



6. 13号溝跡土層断面A



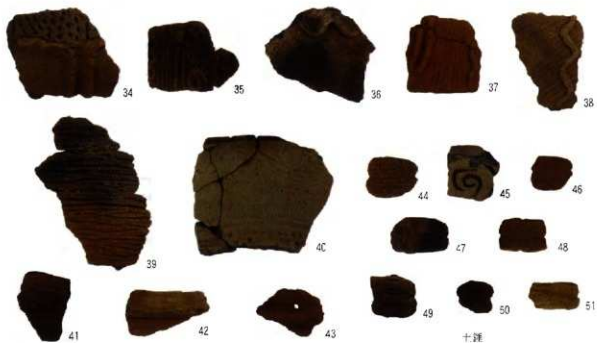
7. 13号溝跡土層断面C



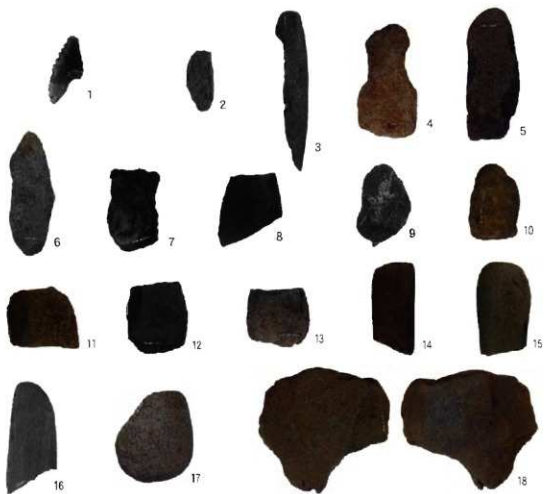
8. 13号溝跡調査風景



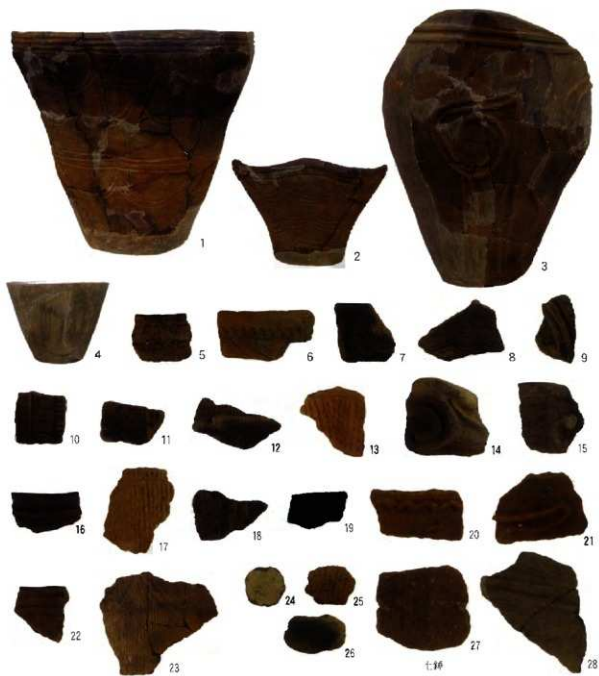
35号住居跡出土遺物 1



1. 35号住居跡出土遺物?



2. 35号住居跡出土石器



1. 88号住居跡出土遺物



2. 88号住居跡出土石器



1. 131号住居跡出土遺物



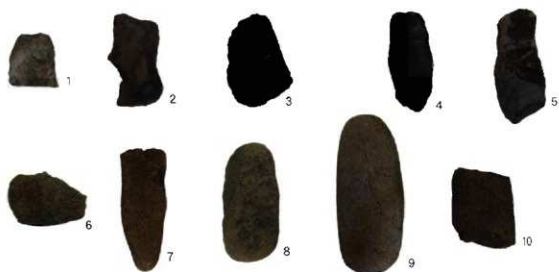
2. 131号住居跡出土石器



132号住居跡出土遺物 1



1. 132号住居跡出土遺物 2



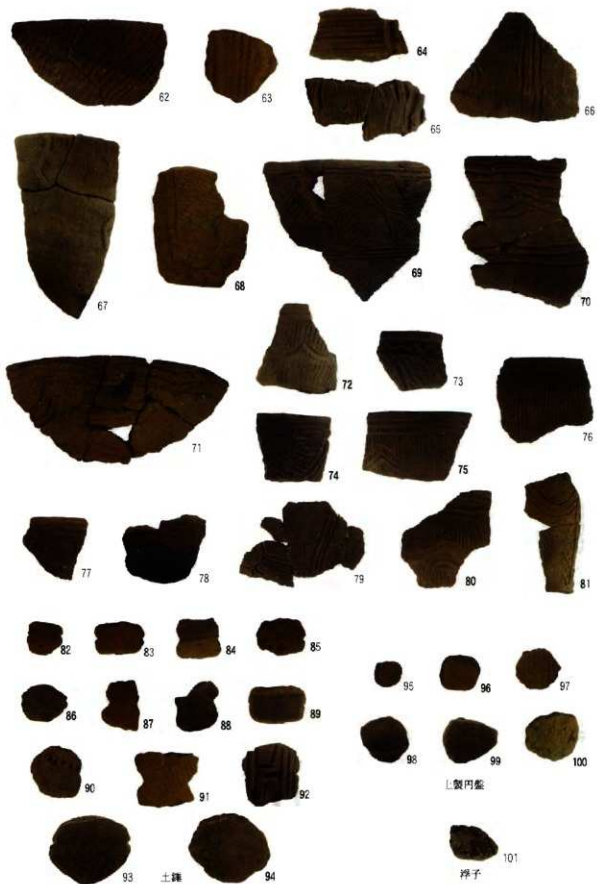
2. 132号住居跡出土石器



133号住居跡出土遺物 1



133号住居跡出土遺物 2



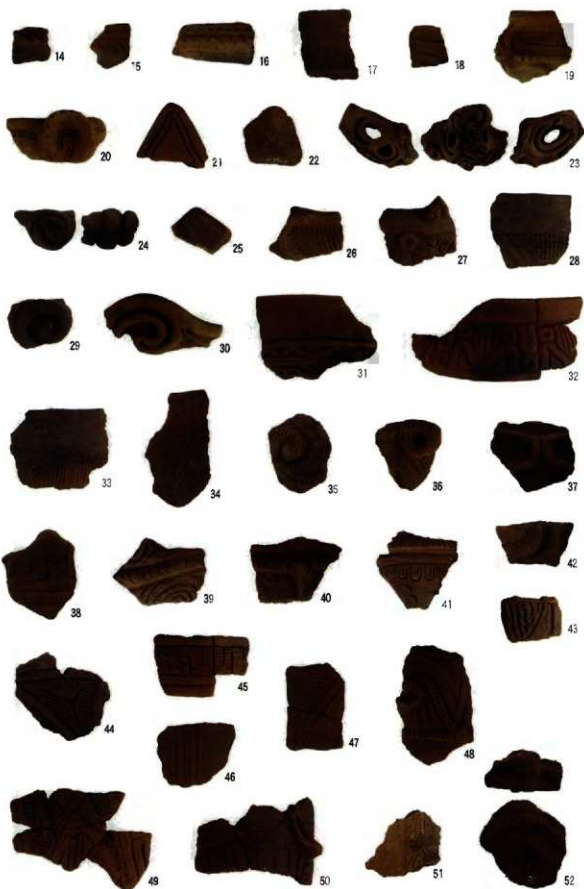
133号住居跡出土遺物 3



133号住居跡出土石器



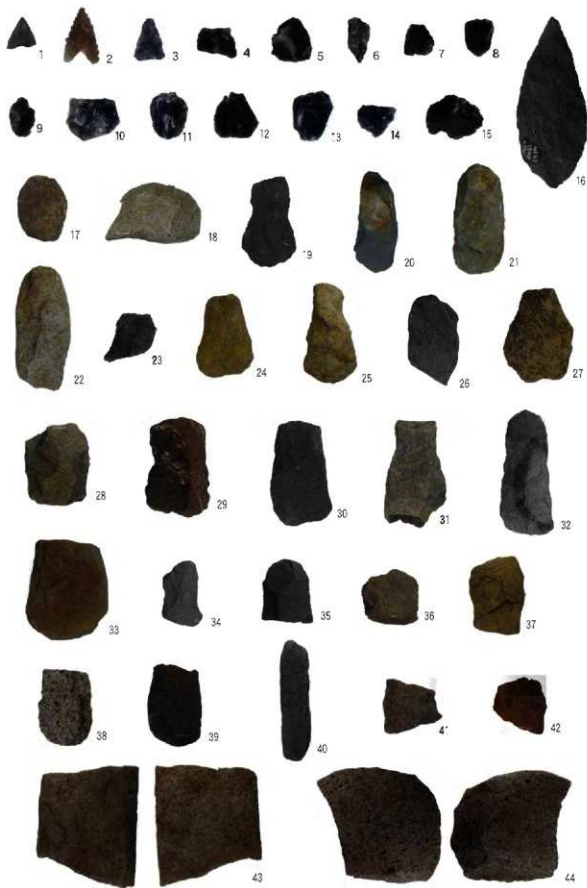
134号住居跡出土遺物1



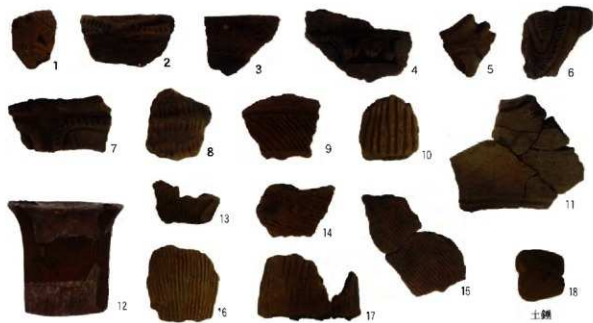
134号住居跡出土遺物 2



134号住居跡出土遺物 3



134号住居跡出土石器



1. 135号住居跡出土遺物



2. 135号住居跡出土石器



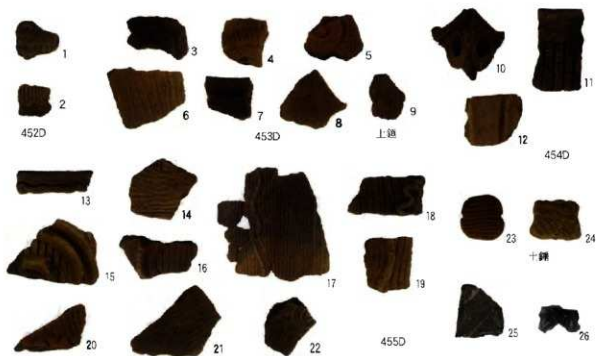
3. 136号住居跡出土遺物 1



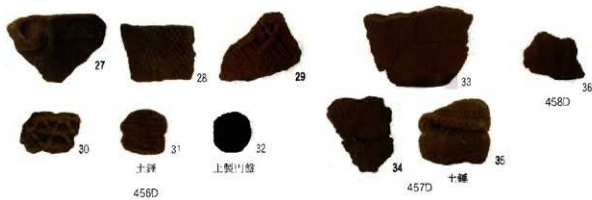
1. 136号住居跡出土遺物 2



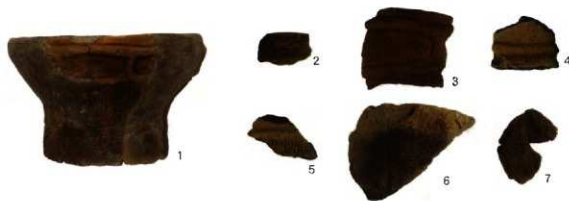
2. 136号住居跡出土石器



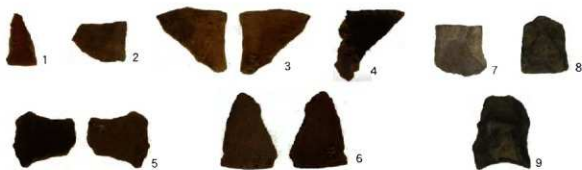
3. 土坑出土遺物 1



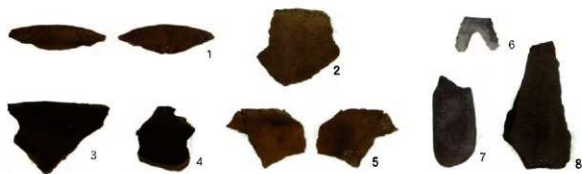
1. 十坑出土遗物 2



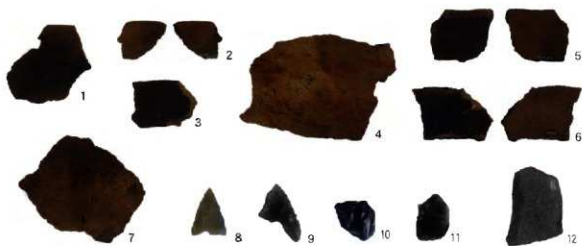
2. 22号集石出土遗物



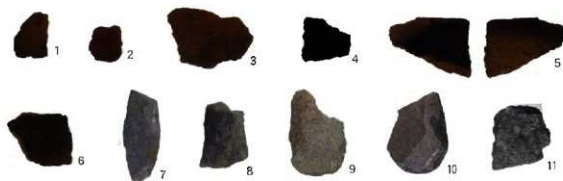
3. 138号住居跡出土遗物



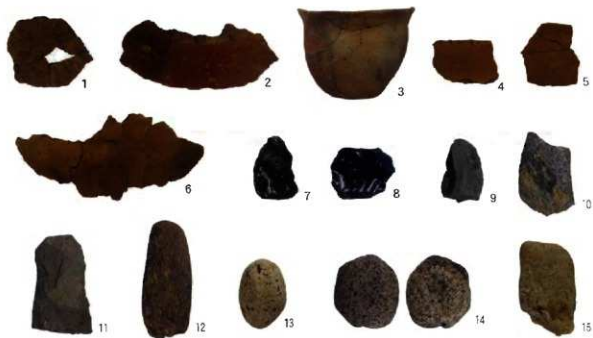
4. 289号住居跡出土遗物



1. 291号住居跡出土遺物



2. 391号住居跡出土遺物



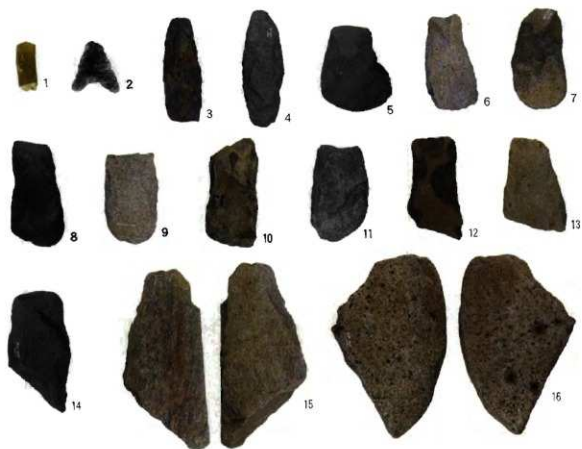
3. 392号住居跡出土遺物



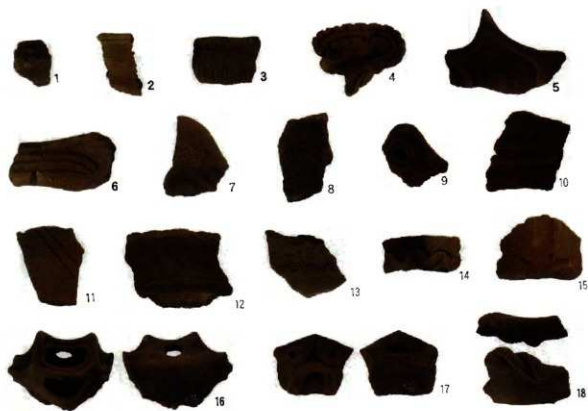
1. 393号住居跡出土遺物



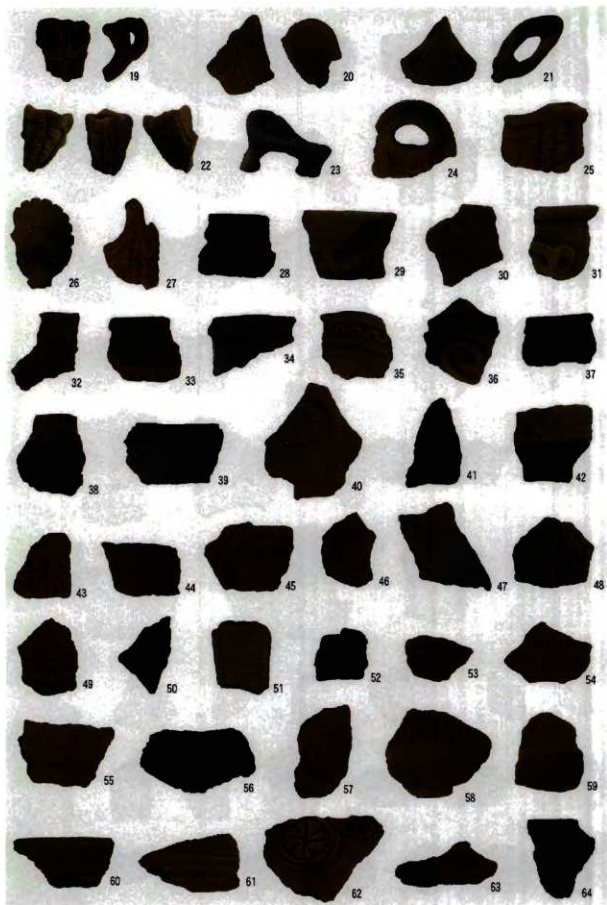
2. 394・395号住居跡、13号溝跡出土遺物



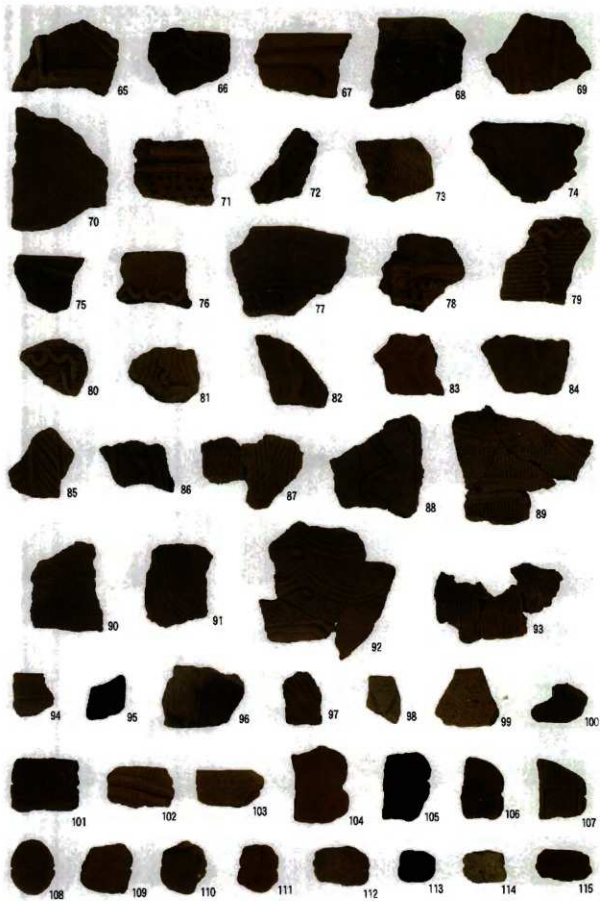
1. 遺構外出土石器



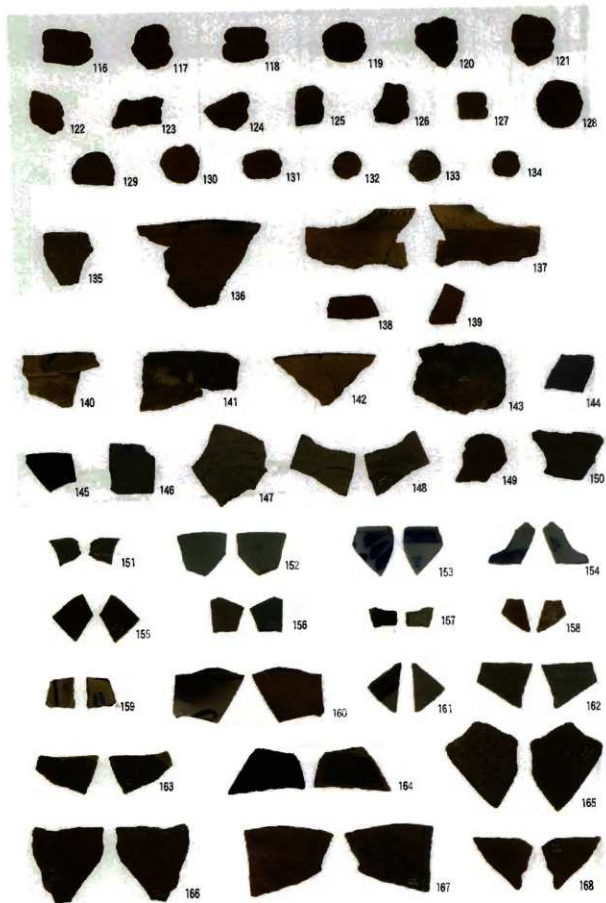
2. 遺構外出土遺物 1



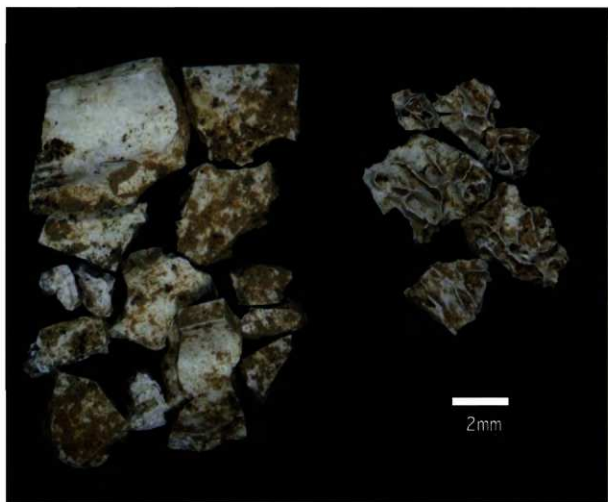
遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3



遺構外出土遺物 4



88号住居跡出土骨片

報告書抄録

ふりがな	しきしいせきぐん15		
書名	志木市遺跡群15		
副書名		巻次	
シリーズ名	志木市の文化財	巻次	第37集
編著者	尾形則敏 深井恵子		
編集機関	埼玉県志木市教育委員会		
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中央1丁目1番1号 TEL 048 (473) 2111		
発行年月日	平成19年(2007)年1月19日		
ふりがな	ふりがな	コード	北緯 東経
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号
西原大塚遺跡 (第67地点)	志木市幸町 3丁目3228	11228	007
			35° 139° 49' 33' 29' 58'
			調査期間 20020909 ～ 20021129
			調査面積 (㎡) 456.20
			調査原因 個人住居及び 物産建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な講稿
西原大塚遺跡 (第67地点)	果 落	縄文時代中期 後葉	住居跡 8軒 土坑 8基 集石 1基
		弥生時代後期末 葉～古墳時代前 期	住居跡 8軒 掘立柱建築遺構 1棟
		平安時代	土 玩 1基 溝 跡 1本
			土器・石器 土器・石器 土器・燧
			土器・石器が多く出土した。 土器については、加賀利E1 式後葉～EⅢ式土器を中心と し、曾利式・連弧文系土器が 共存する。石器は打製石斧を 主体に実測図だけでも約200点 出土した。 亀甲形を呈すると思われる 2号掘立柱建築遺構は、本市 では同遺跡で2例目の検出で ある。

志木市の文化財 第37集

志木市遺跡群 15

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発 行 日 平成19(2007)年1月19日
印 刷 株式会社 白 蜂 社